

妥當なるべし。而して是の傾向を代表する作家は、紅葉、露伴、其他の老大家にあらずして、不知庵、宙外、風葉等の少壯作家に多かりしことは、特に注意すべき價値ありとす。

不知庵は、一面に於て作家たると同時に他面に於て批評家なり。批評家として熱心に時代精神論を唱へたる一人なり。彼れは五月の『新小説』紙上に於て忌憚無く是の意見を述べて曰く、

今の小説家は、身常に社會を離るゝが故に、全く時代の精神を理解せず。政治、宗教、學術の社會は、彼等にとりて風馬牛のみ。されば其の作は新聞紙の三面雜報を延長したるに過ぎず。見よや我邦の今日は、政治、宗教、倫理の上に於て新舊思想の乖離は將に來らむとする大衝突、大破裂を預告するに非ずや。日々の新聞紙を読むも、感興百出、慨くべきもの、恐るべきもの、宛然維新前後の歴史を読むと同一の感あるに非ずや。翻て文藝俱樂部、或は新小説を繕ひば、天下は太平無事に泥み、戀愛に狂し、放蕩に勞れたること宛として隔世の知し。

彼れは紅葉一派の作風を似而非寫實なりと罵り、紅葉自身の作に現はれたる人物すら時勢を體現せず、僅に時勢粧を學べるに過ぎずと放言し、大に時代精神論を鼓吹せり。彼れの言

ふところや、誇大に失し、放誕に流れたるものありと雖も、今の作家の若隱居氣質を打撃し、時代と文學との活ける關係を唱へたるは、慥に作家の傾聴すべき言なりと謂ふべし。而して吾等の彼れに於て最も多とする所は、批評家として唱へたるどころ、作家として是を實行せむと力めたる事であり。彼れは果して是を實行し得たりや否やは暫く措き、兎にも角にも己れの抱負に本きて其の所信を行ひたる勇氣は、天晴れなりと稱すべし。『落紅』、『霜くづれ』、『片づら』、『電影』等は、即ち斯くして生れたるものなりき。

是の社會的傾向に動かされたるものは、不知庵の外尙ほ他に尠からず。紅葉、柳浪諸氏の如きおのづから一流の地歩を占めたるものは、むしろ冷眼にして看過したらんも、や、野心あり、客氣ある青年作家の中には、必ずや時尚の赴く所に乘じて聲名を博せむと欲するものあるべし。想ふに宙外の『腐肉團』、風葉の『政黨』、少しく品はかはれども曙山の『にぎり水』など、何れも多少是の風潮を代表せるものならむか。

##### 五 其の批評

是の如くにして世に出でたる（假に名くれば）社會的小説は、如何ばかり成功せしや、精

しく言へば如何ばかり時代を解釋し、其の人物事件の上に如何ばかり時代精神の影響を現じ得しや。是の問題の齎らせる答案こそは、吾等を以て見れば三十二年の文壇が與へたる最も貴き教訓の一つなれ。凡そ社會的小説の作家たり得むが爲に必要な修養の何物なる事。是の修養を得むが爲には、作家の多くは其の從來の態度を一變せざる可らざる事。今の多くの作家の觀察と識見とは、到底是の種の小説家として成功するに足らざる事。一言すれば、今の作家の多くは社會的小説の作者たる資格に乏しき事——是等はまさしく不知庵、風葉諸氏の失敗が我が文壇に與へたる教訓也。

然り、我等は不知庵等の小説を失敗せりと謂はむ。不知庵の『落紅』は小學校長の失行を抉摘せる三面雜報の類に過ぎざるのみ。『かたうづら』は一個の戀愛小説として見れば、失戀の悲運を描けるところに多少の精彩あらむ、されど時代の精神によりて其の人物事件を解釋せるものとしては寧ろ拙劣陳套の詆を免れず。信仰の衝突、軍吏の醜行は描かれたり、されどこは皮相の擬似のみ。かゝる皮相の擬似を以て足れりとせば、學校教員を寫せる柳浪が『心の影』の如きも、亦た時代精神を描けりと謂ふべけむ。『電影』に到りては、政治社會の表面觀

に過ぎず。例へば流浪壯士を集めて天下の事を論ずる大政治家島根某の如き、所謂『若隱居』作者の眼中に映せるものとしてはいざ知らず、當代の思潮を籠絡して特に新舊文明の衝突を描破せむと唱へたる不知庵が觀察としては、聊か不倫の詆り無からむや。吾等は子の作を通じて明に時代の後景を看破する能はず、時代と人物との生ける關係より何等痛切の感興を被らざる也。竊に思ふに、子が批評の旨趣や太だ善かりしも、作家としての觀察と手腕とは尙ほ大いに未だしき所あるに非ざるか。『かたうづら』にまれ、『霜くづれ』、『血ざくら』にまれ、一種の陰慘なるホーソルンの小説として見れば何れも多少の成功なりと云ひ得べけむ、されど予が所謂社會的小説としては、吾等多くの贊辭を呈する能はず。

宙外の『腐肉團』は政治小説として如何ばかり當世を描破し得たりしや、吾等讀まざれば知らず。されど風葉が『政驚』の如きは、何人も拙作と貶するの外無かるべし。政黨内閣の成立を後景とし、政治運動の爲に産を破り家を亂せる老政治家を描けるところ、題目としては必ずしも不可なるに非ざるべし、されど其觀察の淺薄にして幼稚なる、到底『若隱居』作者の描ける國家、政府、政黨たるを免れず。少しく社會に閱歷あらむもの、誰かはかゝるオ

モチヤ的、政治小説に興味を感ずべき。是の如くにして尙ほ時代を描き、社會を寫し得べくむば、小説家となる亦容易のわざならむかし。「戀慕ながし」、「かつら下地」の諸篇に於て、兎に角多少の見るべき作を出だしたる風葉が、是の如き駄作を著はしたるは、畢竟其の長所彼れにありて此れに在らざればならずや。一言すれば彼れには未だ政治小説に筆を染むる資格無ければならずや。

不知庵、風葉、宙外諸子の作の外に、社會的傾向を有せるものを挙げ來らば、尙ほ尠からざるべし。例へば東京朝日新聞などには殊に是の種の小説多かりき。近くは前田曙山の連りに出せる『濁り水』、『千枚張』なども少しく品はかはれども是の類なるべし。されど是等の小説は時事に當て込みて其の人物と事件とを按配せるに止まり、其内部に於て當代の社會の生命を捉へ得たるもの少し。謂はば三面雜報に見るが如き皮相なる觀察を小説の形に書き延ばしたる迄也。

是を要するに、三十二年に於ける社會的小説は失敗せり。吾等は是の正當の失敗を悲むことをせざるべし、唯今の作家が是の事實に鑑みて社會的小説の價值と共に其の製作の困難

を自覺し、更に修養を將來に積まむことを切望するもの也。聞説く、佛のゾラ、魯のトルストイ、乃至北歐のイブセン等の著作は隱然として歐洲思想界に重きを爲すと。是れ豈彼等の作が當代文明の精神に接觸し、その根據に於て社會の生命を捉へたるが爲ならずや。彼等は哲學者にあらず、宗教家にあらず、又經世家にもあらず、而も尙ほ一代の文明を個中に解釋し、凡ての人と事とに於て時代精神の活動を看取す、是の識と是の見と争でか朝夕にして造詣し得べきものならむや。吾等は切に今の作家に望む、徒らに彼等が成功の美はしきをのみ觀て、彼等が修養の如何に深きかを忘るゝ勿れ。社會的小説の名は甚だ言ひ易し、而も「霜くづれ」、「電影」、「政驚」の類を以て是の如きものとなす勿れ。萬一是等の作の失敗を以て直ちに社會的小説其の物の失敗となし、進取の銳氣を喪ふが如きことあらば、是れ即ち日本文壇の將來に向つて永く社會的小説を咀ふ也。濟々たる文壇の諸秀才よ、諸君は今日に於てトルストイたり、ゾラたり得ざることを恥とするものに非ざるべし、さらば靜に其道に就きて大成を將來に期す、亦可ならずや。寫實小説の發達は真正なる意味に於て社會的たるに到らざれば已まざるべし。是れ吾等の固く信じて疑はざる所也。是を以て切に諸君に告ぐ。

## 六 露伴の社會的小説に對する批評

批評家に於ける時代精神論と合調して、製作界に起れる社會的小説は、其作の數甚だ多からず、多からざる作の中に於て見るべきもの亦甚だ少かりしことは、前に述べたる如し。されど是の傾向を齎らしたる氣運は、決して是等の作、是等の作家にのみ及べるに非ず、其の影響するところは寧ろ文壇の全部に浸徹せりしが如し。吾等は幸田露伴の社會的小説に對する見解に於て明に是の事實を觀取する也。

十一月の中旬、彼れは國民新聞の記者に向ひて其の文學上の懷抱を述べき。彼れは如何に世を觀じてや、凡そこの二箇年の間は、殆ど跡を文壇に絶ち『五重塔』、『新浦島』を物したる手腕を收めて寂然として聞ゆる所なかりし也。二箇年間黙したる彼が、今や當今の文壇に關して述ぶる所の意見は、一層の注意を價するものと謂ふべし。彼れは今の作家の眼界狭きを難じて曰く、

今の小説の讀者は、お嬢様には非ざれば書生、書生には非ざれば親の腰かちりのみ。作家の目當とする所の讀者豈是の如くにして已むべけむや。苟も作家として世に立たむもの、少くとも三十歳五十歳

以上の所謂世間の人に感興を與ふるの作無くして可ならむや。

又空想主觀の傾向を難じて曰く、

是の活動せる社會に親炙せるもの、争てか是の如き作家の箱庭觀察に満足するを得むや。今後の小説は如何の傾向を取るべきや、竊に想ふに、今の物よりは其の内容に於て豊富に、其の形式に於て實世間に接觸するものなるべき乎。

露伴の名を聞けば人は直ちに理想派、もしくは超自然派の小説家を聯想す、而して是の理想的、超自然的なる露伴は、今や却て實際的たれ、實世間に接觸せよと説く。文壇の氣運漸く移れるを見る也。彼れの意は必ずしも小説を社會的のみに限るに非ざるべし、されど社會的傾向を推奨し、それを以て將來の作家が當に進むべき路なりとせるは明也。是れ理想派の領袖の說として特に注意すべき點ならずや。露伴が從來の諸作は、紅葉の所謂寫實主義と絶好の對比なりき。其の『對鬪樓』、と云ひ『風流佛』と云ひ、『五重塔』と云ひ、『一口劍』、『新浦島』、『二日物語』と云ひ、空靈高遠の理想を現示せるところに製作の價値あり、作者の本領ありき。斯かる理想派、主觀派の作家にして、尙ほ且つ人に勸めて實際的たれ、客觀的たれ

と説く、批評家が千萬言にも増して、まことに好く文壇の氣運の那邊に向へるかを表明するものに非ずや、如何。

## 七 結論

是の如く觀すれば、三十二年の小説界に於ける社會的傾向の影響は、著作及び作家の上に現はれたるものよりは、寧ろ隱約の中に深く且つ大なるものありしを想はざるを得ず。吾等潜かに想ふに、露伴彼れ自らが暫く筆を文壇に絶ちしも、是の氣運に對する態度に於て多少感る所ありしが爲に非ざる乎。己れの本領を自覺せる彼れは、俄に是の氣運に動かされて其の理想的傾向を抛つが如きこと萬々無かるべきも、而も一旦の顧慮に惹かされて暫らく觀望の位地に立ちたるに非ざる乎。潜かに想へらく、紅葉が『金色夜叉』の筆路漸く重膠となれるも、亦た是の同一の氣運に對して慮るところありしが爲に非ざる乎。柳浪、天外、鏡花諸子の作に氣勢乏しく、光焰甚だ揚らざるもの、亦た是の同一の氣運に對して逆行せしが爲に非ざる乎。所謂文壇の不振と云ふもの、是の氣運に對する明白なる發聲と標的と實現とを得ざるが爲に、空しく遲疑煩悶したる痕跡には非ざる乎。

以上吾等の觀察にして大に謬るなくむば、作家が今の文壇に處するの道亦おのづから摸捉するを得む乎。所詮は社會的傾向は文壇一世の氣運也。人と、事と、社會との間の活ける關係を捕へ、時代精神によりて是を解釋するは、所謂社會的小説の極致也。文學の事素とより一規を以て律し難し、理想派主觀派の製作と作家と、吾等素とより是を尊重す。唯、淺薄皮相なる似而非寫實派に對つては、一日も早く其本領を自覺して、修養の道に就かむことを切望す。

(明治三十三年一月)

## 漣山人の『日本お伽噺』

近時の最も成功したる著作を數ふれば、漣山人の『日本お伽噺』は必ず其一に居らざるべからず。吾人教育上の見地より觀て特に是の事を言ふ。

自國の傳説を保存することの教育上極めて大切なるは言ふまでも無し。具體の表現に依るに非ざれば何物をも了解し能はざる兒童にとりて、一の『かちく山』は一日の倫理論よりも痛切に感得せらるべし。況や一國民の間に流布せる傳説は、即ち國民性情其の物の一化現とも見るべきをや。今や時流日に急にして人は唯々新事物の送迎に忙殺せられむとす。如何にして吾人の同胞及び子孫をして永く是の國性と民情とを繼續せしめむ乎、當今教育者の一大問題、實に茲に存す。吾人は是に於て我が教育者が『日本お伽噺』の正當の價値を認識せむ事を切望する者也。

お伽噺は其名の如くお伽噺のみ、見聞の新あるに非ず、學理の深あるに非ず、實に小供らしきもの也。然れども吾人及び吾人の祖先が是のお伽噺によりて如何の修養を得來りたるかを願望せば、吾人は吾人の子孫に對しても亦永く是の貴重なる遺物を世襲せしめざるべからず。是の點に於て漣山人の事業は徒らに文藝上の製作を以てのみ見るべきに非ざるべし。

(明治三十三年二月)

## 自國の作を讀まざる風

近頃の小説に見るべきもの絶て無し、好いの悪いのと言ふ丈が野暮也。ロセッチが詩はその妻の爲に作られしと聞きしが、今の小説家は何人に讀ませむとて、かゝる小説を作るにや。是に於て文字無き俗衆が講談物に走るが如く、少しく教育ありて外國文學などの趣味を解せる人は、自國の文學を手にするを恥とするの傾向あるに至れり。彼等は動もすれば曰く、吾等若し小説に渴へなば、ゾラ、ゾーデルマン、シエンキー井ッチ、凡て思ひのまゝ也、何を苦しむで今の紛々たる作家の小供らしき製作を要せむやと。吾人は是れに對して言ふべき言

葉を知らず。

恐るべき傾向なる哉。而して今の小説家の多くは是の恐るべき所以をだも覺らず、タアイもなき改良講談などの餘技に浮身を婁す也。大文豪、大傑作、是の如くにして出で得べくむば、お目出度きことはの上も無し。

遮莫、茲に世にも氣の毒なる一種の人類あることを忘る可らず、己れが職責の一部として如何なる駄作をも讀まねばならぬ、批評家と稱する者、是れ也。

(明治三十三年六月)

大皮肉呵々

### 小説の意義

例へばシエンキー井ッチが『クオ・ヴデス』を見ずや。こは今の以太利人を狂はしめたるものなりと謂ふ。羅馬帝國の末路を描きたる所はギボンが衰亡史にもをさく劣るまじく、ネロもセネカもベトロニウスも、希臘の哲學も、羅馬の文藝風俗も、基督教とペガニズムとの

衝突も、當代文明の經緯として活けるが如く現はさるゝところ、如何にも驚かるゝばかりなり。小説も茲に到れば、歴史よりも確かなる事實也、哲學よりも賢き知識也。吾人は我邦の小説家に是の種の作五六を讀ませ、其の所感を聴きたき心地す、かくても卿等は安じて其の筆を續け得べきやと。小説家諸君よ、甚だ失禮なる申分ながら、諸君は小説てふものを餘りにやすく見くびり居るには非ざるか。ハイネが詩篇は獨逸の境界を萊因河まで移せりと謂はる、諸君は其が何を意味するかを知れりや。

(明治三十三年六月)

### 少年の文學熱

少年の手に成れる文學雜誌は、今日少からず發行せられつゝあることなるが、こは寧ろ憂ふべき事也。少年は修養の時代なり、眞に其の本分を自覺せるものならむには、是の修養の爲に日も尙ほ足らずとすべし、何の違ありてか文壇の事に關り知るを得むや。今は印刷の便

利なる世とて、今夕筆を走らして利口けな事を書けば、明日は麗々たる文字となりて天下に頒布せらる。知らざるものは其を如何にもエラサウに想像すれど、多くは無一物なる白面書生が無責任なるざれ書きに過ぎざるぞかし。少年客氣の徒には、このエラサウなる所がヒドク氣に入るものにて、虚名を儕輩の間に馳せて一ツ廉の文豪になり濟す様は、笑止千萬と申す外無し。我邦の文壇如何に幼稚なればとて、まさかにかゝる大文豪の鞭撻にて左右せらるべしとも思はれず。大文豪自らにとりても、やがて目覺むるまでの夢一場に過ぎざれば、他日の悔を残すのみにて、其の身の爲には露なるまじき也。知りもせぬ西洋詩人の名前など人並に振廻はすさまは殊の外危し。

斯く謂はむは、恐らくは少年諸子の喜び給ふ所にあらず。唯、今の時弊に感じては、是の直言の無禮をも忍ばねばならず。兎角はドツチにも都合の好き事は無きものと知らるべし。

(明治三十三年六月)

### 煩瑣學風

歐羅巴中世のスコラスチック派の哲學をば煩瑣學派と譯すること行はれたり。されど吾人以て見れば、今の我邦の學風ばかり是の煩瑣てふ文字に稱へるは無し。容易しき事柄を難かしく言ひ立つるをば學問と心得る、煩瑣學風に非ずして何ぞや。常識を無視し、ひたすら文字論理の末に拘泥して故らに融通會心の道を杜絶する、煩瑣學風に非ずして何ぞや。セセコマしき小理窟をのみ尙びて、分類解拆の外に、ファンタジーの大いなる力を認めざる、煩瑣學風に非ずして何ぞや。吾人は是の煩瑣學風が方今我が思想界の一大勢力となりつゝあるを見て、轉、我が學術の前途を危むの情を禁する能はず。

是の如き煩瑣學風は動もすれば趣味を没し、人情を没し、常識を没し、亦た動もすれば人生の大本に對して其の統一的存在を打破するの恐れあり。其の結果は方便主義となり形式主義となり、ラシヨナリズムとなり、ファリスチニズムと爲る。是の學風に感染せる人は、手足に缺くる所こそ無けれ、其の心は片輪也。今の世の道德學者、教育學者の多くが、かゝる片輪



の徒なりとせば、洵に歎かはしき次第ならずや。心あらむもの須らく反省熟慮する所あるべき也。

(明治三十三年七月)

### 煩瑣學風と文學者

煩瑣學風の弊害を救ひ得べき一の大なる勢力は何れの時代に於ても文學者の手腕にあり。

今世紀の初めに於けるロマンチック派の主動者は何れも詩人なりき。されど若し今の我邦の文學者に是の事を責むるあらば、そは迂濶の極みならむかし。

詩人ハイネはロマンチック派の運動を最後まで續けたる人なりき。流石に全歐洲の文明を敵として戦ひたる勇士の事として、哲學、宗教に於ける造詣はなかく、に見るべきものありき。彼れが全集卷三に收めたる『獨逸の哲學及び宗教』を讀める人は、如何に彼れが當時の煩瑣

學風に反して戦ひたるかを認むるならむ。フキヒテが主觀的觀念を批評して、尾長猿が其の尾を料理するに譬へしが如きは、如何ばかり痛激の打撃ぞや。かゝる識見ありてこそ、自ら『人道の兵士』とも誇り得れ。顧みて我邦の文學者の没見識なるに較ぶれば、吾人はたゞただ言ふべき言葉を知らず。

學術上に於ては煩瑣學風行はれ、徳教上に於ては形式主義行はる。正しく是れロマンチック運動が思想感情の自由の爲に興るべき秋ならずや。今の世にバイロンあらば、其の惡魔の如き力を提けて起つべき筈也。もしハイネあらば、其の毒蛇の如き舌を揮つて罵るべき筈也。今の時勢に於て一人の文學者らしき文學者、詩人らしき詩人を有せざるは、日本國民の大不幸と謂ふべき也。

(明治三十三年七月)

## 人名字書中の文學者

此頃經濟雜誌社より出版せる人名字書を取りて試に森田思軒を索めしに、見當らず。次に樋口一葉を捜せしに、是れ亦見當らず。人名字書は如何なれば斯くは文學者を逸したるにや。吾人は田口卯吉氏の主幹の下に編輯せられたる人名字書の信用の爲に、殊には文學者の名譽の爲に、一言せざるべからず。

森田思軒氏が明治文壇の一文豪として後世に傳へらるべき人なることは、吾人の堅く認むる所也。苟も氏の文字を讀みたることある人は、吾人と共に爾か認むることを躊躇せざるべし。ツマラヌ近年の役者、三味線引きの末派までも、可成りに網羅したる人名字書が、是の一文豪の爲に一行半行をだも割愛する能はざりし事情は那邊に存せりや、訝かしき次第也。

思軒氏の名を逸したるはマダシモ也。一葉女史の名を掲げざりし一事は編輯者の没見識に非ざれば、人名字書編輯にあるまじき一大粗漏として、特に警告せざるべからず。明治の文學者中、何人か果して女史と對立し得るものぞ。其の「たけくらべ」、「わかれ道」に較べ得

べき著作は幾何ありや。彼れには露伴の哲學者めいたる所無く、紅葉の通人めいたる所は無けれども、觀察靈あり、文字神あり、天才高く一世に超絶せり。不幸にして夭折せりと雖も其の傷ましき記憶こそは却て其の不朽の名を美はしくしたるものに非ざりしか。人名字書が是の大名を逸し去りたるは、一大失體なりと謂はざるべからず。

さはれ思軒、一葉の如き人だに、動もすれば遺れ去られむとするの一事、亦以て今の藝苑の風氣を徴するに足らむが。文學者諸君にとりては容易ならざる疑案なりと謂ふべし。

(明治三十三年七月)

## 人の出處進退

人の出處進退にはいろ／＼複雑なる事情あるものなるが故に、一概に批評し去らむは烏滸の業なるべし。されど、局外より冷淡に觀察すれば、随分言ひ度き事も無きに非ず。

人は兎角勝手なものにて、己れ等の爲にならざることには、社會の爲、國家の爲と云ふを口實にして反對するを常とす。今假りに團十郎が役者を廢めて漁師になりたりとせば、誰かは是を惜まざらむ。己が天分を完うせざる痴者なりなど、しかつめらしく批難する倫理學者もありなむ。そは、團十郎にとりては漁師として暮さむかた、安樂ならむかなれど、是の一個人の安樂の爲に、天下の名優を没し去らむは、社會全體の爲に不利益なることなれば也。斯様な造作もなき標準にて人の出處進退を批評せんは、極めて思ひ遣りの無き仕方ならむも、兎に角一種の批評法たるを失はず。人はお互に自己の爲に活けると同時に、自己の屬する團體の爲にも活くべきものなれば、團體を標準とせる倫理には動かすべからざる根據あり。

斯かる見方より試に今の文學者を觀察せむか、當今露伴氏が文壇に遠かれるなどは惜むべ

き一つ也。人は個人として性の近き所に從ふを幸なりとせむ、只萬一『五重塔』の作者が、將基指しに日を暮らさるゝ様の事あらば、世間にとりては何ほう恨めしき極みならずや。紅葉氏は素と法科大学に入りて法律を修められたる人なりと云ふ。氏が若し法律修行を續けたらむ時、其の造詣幾何なるべかりしかは、今日に於て素より測知し得難き所ながら、氏が半途より學問を廢めて小説家となられたることに對して社會は須らく感謝の意を表すべき也。今日は兎も角、數年前の文壇より、紅葉の名を除去せりと假定せば如何。是の點に於て、氏の出處進退は宜しきを得たるものと謂はるべけむ。坪内逍遙氏が政治、哲學の専門學士として、却て『當世書生氣質』の作者となり、日本の小説史上に一改革を齎らされたることも、亦た紅葉氏に於けると同様の理由にて社會の感謝すべき所たり。何となれば、若し當時逍遙氏にして假りに學者となられ、或は政黨員、官吏などになられたりと假定せば、日本の小説界は如何なるべかりしや、覺束無き次第なりければ也。

坪内氏の事のみを申す様なれども、氏は今日文學者を廢めて専ら倫理教育に身を委ねられつゝあり。氏の如きはどの道、社會國家に必要な人物也。唯、氏が教育者たると文學者た

ると、社會にとりて何れが希望すべき事なりやは俄に決し易からじ。教育、殊に倫理教育の幼稚なる今日に於て、氏の如き熱誠あり識見ある學者が是れに従事せらるゝは素より國家の慶事なるべけれども、是れが爲に脚本家、批評家としての脊の家主人を失はざるべからずとすれば、其の得失俄に知り難からずや。自家の天分を自覺せられ、是の自覺に本いて進退せられたるべき氏の事業に就て、とやかう容喙するは無禮の業ならむも、吾人は暫らく是の無禮を忍びても尙ほ是の得失の俄に知り易からざることを公言せむと欲する也。

社會に惜まるゝ人は實に幸なる人也。然れども最も幸なる人は時としては最も大いなる不幸を社會に被らする人なることを忘るべからず。與へられたる金を取戻さるゝは、時として盗まれたるに均しければ也。

(明治三十三年七月)

## 學者と文章

近頃の學者には兎角文章を輕する風あり。何事も内容だにうるはしくば、それを表白する文章の如きは如何にても好しと思ふめり。こは文章の價値を知らざる謬見也。

凡そ何學問にまれ、數學の如き純粹の知性のみに關はるものの外は、多少は情の分子を包含するもの也。されば多くの學問は知ると同時に感ずる也。是の感情の趣味を有力に發表せむには、乾燥枯淡なる數學の解説の如き文字のみにては思ひもよらず、是非とも美文的の技術に待つ所なきを得ざる也。さるを思想だに正しくば、文字は言ふに足らずと一概に拂拭し去らむは、實に文章を知らざるのみならず、又學問を知らざるものと謂ひ得べけむ。

哲學の中にも、倫理學、教育學、宗教學、美學の如きは殊に文章に待つあるもの也。吾人は是等の學問に關する本邦學者の著書論文を見る毎に、其の文章の如何にも拙き爲に、其の懷抱の十分傳はり得ざるべきを想ひて、常に氣の毒に堪へざる也。中には井上(哲)博士の如き學識と文章と兼備へられたる人もあれど、こは寧ろ例外に屬す。我邦大學の學問は獨逸

風なりと云へども、獨逸の學者中には碌に文章も書けぬ片輪なる學者は先づ見當らぬ也。ハルトマン氏もヴント氏もなか／＼立派な文章を書く學者也。フォルケルト氏の如きは中にも文章家にて、其の著『悲壯の美』中の或部分の如きは、シヨベンハウエル以來の名文なり。美學に關する著書などは、美文としても一廉ひとかけの名文なるが多し。こはカリエル、シテルン、

エーゼル諸氏の著書を読みたらむ人の首肯すべき所也。倫理學者にも亦バウルゼン氏の如き得難き文才あり。是を我邦の博士學士達の文章拙劣、殆ど意を成さざるに較ぶれば、同日の談に非ず。文章を學者の餘技と心得る風は、お互に追ひ追ひ矯正したきものならずや。

歴史は哲學よりも更に多く文章に待つあるもの也。歴史とは古文書の綴合せの謂に非ず、過去の時代を活けるが如く描寫し、其の精神をさながらに發揮するが本旨なり。是の本旨を遺憾なく達せむには、古文書の蒐集素とより必要なが、敘述の一段に至りては詩人の想像力と文章とに待たざるを得ず。ギボン、マコーレー、カーライル、ランケ、フルードなどの著書が世に重きを爲すは、其の文章與つて力あることは言ふまでも無きこと也。我邦の歴史家中には、哲學者に於けるよりも能文の士多けれども、歴史家らしき文章を書き得る人として

は極めて少數ならむ。所詮は、事實を取調ぶるをのみ歴史家の本領と心得、想像と文章との他面を閑却したる弊ならむと思はる。

兎に角、學問と文章とは離るべからざるものなれば、我邦の學者諸君はイマ少し文章に心を懸けられたきもの也。

(明治三十三年七月)

詹 々 錄

○紅葉の文、意は筆先にあり、慧は牙後にあり。「金色夜叉」渾融の妙無しと雖も、繽紛の趣あり。露伴の作、喻へば玉石の肆に陳ぬるが如し。瑕瑜必ずしも掩はず、而も卓犖縦横、江河を決して横に荆南の野に注ぐが如し。「西行物語」蓋し近時の名品。

○一巻の古事記を繙け、繪畫、彫刻の好題目比々として應接に違あらず。我が美術家は、何を苦しむで異邦の死宗教に赴くや。佛畫を善くするは國民の名譽にあらざる也。

(明治三十二年一月)

○詩人は其の一面に於て哲學者ならざるべからず。人生の紛糾を兩斷して其の眞義を抉摘し得るもの、其の哲學的確信の致す所也。トルストイとイブセンとは詩人にして同時に哲學者なり。歐洲の文明を吞吐するの意味と魄力と、實に箇中より出で來る。

○「伽羅枕」、「新色懺悔」以後、紅葉の作は漸く剪裁の巧緻に走りて天真流露の妙味を缺く。是れ争ふべからざる事實也。露伴は「風流佛」、「五重塔」を残して、今や漸く壇站の外に逸し去る。「外科室」に世を驚かしたる後、鏡花の作、眞に評家を驚かしめたるもの幾何ぞ。「三尺角」の方向に一步を進めむ乎、彼れの遭遇すべき運命は唯一の「遺却」あるのみ。柳浪が實感の筆、獨り舊によりて健なれども、今日の覺悟を一新するに非ざるよりは、吾人は多く彼れに望む能はず。眉山は「暗潮」の筆を納めてより、作無きに等し。天外、抱月、宙外、亦當年の氣魄を存せざるもの如し。公等老ゆる、何ぞ夫れ速きや。

○人は進まずむば則ち退く也。今の文學者は、是の時勢の轉變を如何とを見る。

○今古名家の展覽會續々開かるゝは、吾人の切に喜ぶ所也。何ぞ更に一步を進めて常置美術館を建設するの舉に出でざるや。吾人は吳々も言ふ、美術を私するは、是れ國寶を土中に埋むる也。

○演劇は依然たる十年前の演劇也。條理なく、趣味なく、品位なし。今日坪内氏をして十年前の夢幻劇論を反復せしむるも、吾人は敢て陳腐なりとせざる也。演ずるものの罪乎、抑

も見るものの罪乎。

○何れの日か文壇の近時を叙して寂寥の二字を言はざることを得む。

○『紫被布』は柳浪の短所を極端まで擴充したるもの、所謂センセーショナルの惡摸本也。

天外の『眩まくら』は冗漫無味の作、往年『蝶ちやん』の飄逸なく、『改良若殿』の輕妙無し。『金色夜叉』は空しく世間の唇頭に喧しけれども、所謂る様によりて胡慮を反復するに過ぎず。餘の紛々たるものは言はずして可也。

○露伴は大作の出でざる所以を時代精神の動搖に歸す、是れ甚だ吾人の意を得たり。遮莫文壇一世の宗師を以て目せらるゝ露伴にして、是の言ある、吾人深く是れを悲む、必ずしも意氣銷沈と言はざる也。

○逍遙史劇の筆を中絶してより、劇文學は俄然として其消息を收めたり。櫻痴時に新作無きにあらずと雖も、僅に舊來の陳套を淡綴して、俗尙を迎合するに過ぎず。

○是の如き無意味、無勢力なる文壇は、何の時まで繼續すべしとする乎。抑々今の作家の全盛期は、已に經過し終りて、世は新作家、新天才に待ちつゝあるにあらざる乎。是れ必ずしも杞憂にあらざらむ。

○所謂佛敎文學は幽妙なれども強健ならず、其の淺薄なる厭世觀によりて、國民固有の樂天快闊の性情を薰染したるは、寧ろ歴史上の恨事なりと謂ふべし。織田得能氏の近著『國文中の佛敎文學』に接して、殊に是の感を深うす。

○佛敎微りせば、我邦の文學或は寂寥なりしならむ。然れども是の故を以て佛敎の効果を言ふものは、吾人與せず。畢竟國民は文學の爲に存在するものに非ざれば也。

(明治三十二年四月)

三

○人の尾崎紅葉の言として傳ふるを聞く、曰く今の批評家動もすれば文壇寂寥と言ふ、是れ小説出でずして材料に窮するを悲しむの聲のみ。雄篇傑作、豈五年十年にして出づべきものならむやと。好い哉言や。

○遮莫十年の歴史は十年の未來を語る。紅葉夫れ大言壯語を已めて、靜に修養する所あれ。五年十年或は傑作を生ずるに足らざるべし、而も天才は豫告の後に來るものに非ざる也。

○吾人は思ふて茲に到る毎に、未だ會て故一葉女史が流星の如くにして來り、流星の如くにして逝けるを悲ますむば非ざる也。嗚呼女史や、其の來る何ぞ遅かりし、其の去るや何ぞ速かりし。

○『新小説』紙上の不知庵の『霜くづれ』讀むべし。『片鶉』と等しく基督教の光明を現はしたる一種の社會小説也。唯と祕密の默契を叙する所、意餘りありて筆足らざるを惜む。

○晚翠の『天地有情』を讀む。情を托する高く、思を馳する深し、加ふるに文字豪宕にして調に一種の天來あり。優に赤門詩人の白眉たり。

○但し理義の高遠ありて情熱に乏しきを恨む。蓋し晚翠は抒情詩人としては藤村に劣る或は一等、若し夫れ叙事冥想の題案に到りては、嶄然として當代を抜く。文字の警拔を求めて往々未熟に陥るは、彼れに於て微瑕言ふに足らざるべし。

四

(明治三十二年五月)

○今日、英獨文學を専攻すと稱するもの尠からず、然れども定期の學業を終れば、其成り行きは何れも中學校高等學校に於ける英語の教師のみ。借問す帝國大學が特に外國文學の專

門科を設けたる旨趣は、果して語學教師を養成するに外ならざる乎。

○英獨文學の學士にして中學校高等學校の教師となれるものは、多くは語學教授を以て能事了れりとなし、別に本邦文學に關して毫も思念する所無きに似たり。是れ果して帝國大學が特に外國文學の専門科を設けたる精神に適せる乎。

○吾人の見る所を以てすれば、外國文學の爲に外國文學を學ぶは極めて無意義の事なるのみ、其の志、私己の好尚を滿すにあらば則ち知らず、苟も本邦文學に多少の裨益する所なくむば、國家は是の如き學者の存在を徳とせざる也。

○外國語學の教師を養成するには、自ら其道あり。若し帝國大學の志、彼れにあらすして此れにあらば、吾人は現行の學科程度を變更するの適當なるを信す。

○由來外國文學は其名空しく傳へられて、其實多く知られず、明治の文學が英獨の趣味によりて影響せられたる程度は、吾人を以て見れば、決してそが見ゆるが如く大いならざる也。多くは是れ皮相の摸倣のみ、膚淺の塗飾のみ。

○試みに西洋文學の如何なる書が我邦に翻譯せられしかを顧みよ。リットンのみ、ヂスレ



リーのみ、然らざればユーゴー、コリンス、ハツガードの斷片のみ。沙翁の劇詩にして完全に譯せられたるもの、一篇だにあらす。坪内氏の沙撒譚は意譯のみ、ハムレット、マクベスは何れも三分の一に到らずして中絶せり。

○一言すれば、沙翁、ゲーテ、シルレル、バイロン、シエレー、キーツ等諸大詩人の傑作は、一として我が邦文になされざる也。森鷗外氏が其の天品の才筆によりて、三四の獨逸詩文を譯せるは、甚だ多とすべしと雖も、所詮九牛の一毛のみ。小説に到りては政治、科學、探偵に關する淺近卑俗のもの、塵に譯者の筆に上りたれども、デッケンス、サツカレー、ホーソルン、トルストイの大作は、一篇だも顧みられざる也。

○更に是を作家に見るも、本邦の詩人小説家の十中八九は、外國文學に曉通せず。而して外國文學に曉通せるもの十中八九は詩人小説家ならざる也。彼等恐らくは外國文學の趣味を不充分ながらも解せるならむ、而して本邦文學の淺薄狹小を見て我れの彼れに如かざることを感ぜるならむ。而も彼等には海外の好尚を輸入するの筆無き也。

○是の如くにして外國文學の趣味、精神、奈何ぞ我邦に同化せらるゝを得むや。是れ吾人が、我が文學が外國文學の影響を受くる、實は甚だ少しと言ふ所以也。更に是を作品に就て見れば、思必ず半に過ぎむ。

○是に於てか吾人は英獨文學の學士に希望す、外國文學輸入の任に當るものは、今の時に於て先づ公等を推さざるべからず。内外の趣味を疏通し、沈滯鬱結せる本邦文學の前面に向上の一路を拓かむものは、公等を外にして誰ぞ。是の如き重任を負ふべき公等が區々たるリドル的語學の教授に能事了れりとするが如きは、吾人が國家の爲に甚だ悼惜する所也。

○見よ。美術界、音樂界には、幾多の秀才ありて西洋音樂、西洋美術の趣味を傳播し、扶植し、本邦藝術の進運を促したること少からざるに非ずや。文學界何ぞ夫れ獨り人無きや。

(明治三十二年五月)

五

○高等女學校長會議は、女生徒の小説閱讀を禁止するの意志を發表せり。我が小説家、感果して如何。

○高等女學校長の輩、何ぞ文學の事を解せむ。唯、彼等をして事茲に至らしめたるの事、

亦以て一般社會が小説に對する觀念の如何をトすべし。吾人が文壇の爲に潛かに憂ふるの點茲に存す。

○若し夫れ高等女學校の教育方案としては、吾人は寧ろ彼等の切々たる小量を認めずむばあらず。今の小説に何等の社會的勢力がある。是を禁止するが如きは、寧ろ小説の名譽と謂はざるべからず。

○且つ夫れ風俗壞亂の恐れあるを以て、是を禁止せりとせむ乎。吾人は寧ろ日刊繪入新聞中に今の最も下等なる小説よりも下等なる幾多の有害文字あるを認む。高等女學校長夫れ是を如何せむとする。

○勢力の上より見るも、今の多くの小説家は、人の美感を移して實情を挑發するの力だに有せざる也。是を日刊新紙が市井花柳の猥褻事を日常普通の事實として臚列するに比すれば、影響の大小、同日の論に非ざらむ。

○高等女學校長は是の如き一些事に拘泥するを止め、何ぞ一步を進めて品性根本の感化を力めざる。往年教育社會に民約論を禁じてより、教育者争ふて是を讀めり。西鶴全集發賣禁

止せられて、人争ふて是を求む。女學生に小説を禁止するが如き、藪蛇的の拙策に了らすむば幸也。

○近時少年に景慕せらるゝ大町桂月の如きもの、蓋し少矣。先に桂月雲州に入るや、都鄙の少年雜誌、等しく是を惜む。人生名を成す是の如くむば、何ぞ必ずしも處の朝野と、人の老少とを擇ばむ。

○往年蘇峰の京に入るや、彼れは其の味方を青年の中に求めたりき。其の『國民の友』の多數の愛讀者は、槌に青年學生なりし也。而して彼れは其の平民主義と共に青年の味方を失ひぬ、今や果して何の狀ぞ。

○青年の上に築かれたる勢力は、天下の一大勢力也。社會を一校舎として、青年を箇中に教育し得るの人は、古より大なる人物也。而して同時に大なる事業を成し遂げたる人物也。

○畫題の陳腐は日本繪畫の一大弊竇也。今春開く所の美術協會並に全國繪畫共進會にありても、山水花鳥其の大部分を占むるが如し。社會畫の如きは殆ど是を見ずと云ふも可也。

○往年外山博士、社會畫の缺乏を痛論して我が美術界を警醒せりき。爾來十年、尙ほ是の

方面に進歩の著るしきものあるを認めず。或は個性の表情に乏しき本邦畫風の然らしむる所ならむも、濟々たる青年畫家の、畫路頭上に一路を畫するもの無き、深く歎すべし。

○佛畫を描く、可也。吾人は唯畫家の信仰如何を問はむと欲す。

○歴史畫として畫題を宗教に取る、素より可也。唯傳襲の儀軌に法り、寛平、貞元の古式を摸倣して得たりとするもの、吾人其の何の意なるかを知らず。是れ獨り宗教畫のみに就て言ふに非ざる也。

○吾人は博物館内の美術部に摸造品多きを恨みとす。蓋し事情の已むを得ざるあるが故ならむ。然らば則ち何ぞ一步を進めて大に摸造品を増加せざる。

(明治三十二年六月)

無題録

○近刊の『リテラリー、ダイヂエスト』にキツプリングが日本紀行の一部を掲ぐ、記する所曰く料理屋の景況、曰く藝妓の服装、曰く洋服紳士の不格好、宛然としてビエル・ロチー一輩の觀察のみ。而して『日本は小兒の國也、其の大人も亦小兒の如し』と放言するに到つては、無禮も甚し。

○彼れ終りに記して曰く『斯かる國民も尙ほ憲法を有すとよ、何たる滑稽ぞや。世界に於て眞に憲法國たるの資格あるものは、英國と合衆國とのみ』と。日本彼れを知らざる乎、將た彼れ日本を知らざる乎。

○オリファント夫人の傳記を讀めば、吾人は故一葉女史を憶記するを禁する能はず。あはれ光明は一たびも彼等の上に落ちざりき。彼等は終始暗黒の中に苦悶して其生を終りたりき。唯夫人が失ふべき子を有せしは、女史が死ぬるまで家庭の樂趣を知らざるに比して寧

ろ多幸なりと謂ふべき乎。

○されど一葉女史、嗚呼流星の如き彼れが短生涯は、その脆きが如くに美はしかりき。幾多の作家は起りたり、幾多の著作は書かれたり。されど吾人は未だ彼れの『濁り江』、『たけくらべ』に並び得るものを知らざる也。

○一葉逝いてより文壇秋風あり。女性作家に到りては近時香として其の消息を聞かざるを恨む。花園女史は如何にせし、薄氷女史は如何にせし。田中夕風なる一女史ありき、潜かに望を後年に屬せしが、今や亦た那邊にあるかを知らず。

○文藝俱樂部載する所の澁柿の『脱走兵』は近時稀に見る所の佳作也。幕府瓦解の大慘劇を後景として、亡國の孤憤、人生の流離を經緯として、一場可憐の愛情を拈出す、筆路暢達、抒情亦た間々肯綮に中る、優に短篇中の上乗に屬すべし。

○お政は荒井父子の脱走を知らずして偏にお安の非道を憤れり、彼れはお安母子が人生最大の悲哀に沈みつゝあるを知らざりし也。作者這般の預件を設けて後段の悲劇を展開す。抑揚あり、波瀾あり、一氣讀過して感究まり無きを覺ゆ。

○旅行記は今年に於ける夏季文學の大部分を占めたるが如し、然れども其の二三を除きては、名勝を叙し、古蹟を記するに於て、尋常一様の旅行記たるのみ、特に精透奇抜の觀察を見ること少きを恨とすべし。

○日本の古社寺は、從來傳説に誤られ居るもの寧ろ多きに居る。古社寺の緣起と稱して寺僧等の印行するものにて殊に其の杜撰を見る也。今の人の旅行記は聞くに隨て輒ち是等の謬れる傳説緣起を寫取したるに過ぎず。何ぞ更に歴史的批評眼を放つて、從來の訛傳を一掃すること力をめざる。

○風景を叙するに當りても、漢文流の誇大文字を列ぬるの風、尙ほ未だ已まざるが如し。是の如きは、景の爲に文を行ふに非ずして、文の爲に景を假る也。文字瑰麗、音吐頗る佳なりと雖も、讀み去つて明劃なる印象を留め難し、是れ從來叙景文の通弊也。

○是の如き文人的叙景文よりは、吾人は寧ろ尋常一様の旅日記を取らむと欲す。若し夫れ篁村一輩の彌次喜太的道中記は、慥に一種の滑稽文學、亦捨て難き趣味ありて存す。

○大凡そ旅行は圖書館と共に文字あるものにとりての二大學校也。人をして人生の多趣を

味はしめ、天然の風興に感ぜしむるもの、旅行に若くは無し。有名なる學者文人の手に成れる旅行記が、吾人に對して最も有益なる教訓を與ふるは、是が爲め也。畢竟旅行記の眞價は山川を叙し風俗を記するの外、更に一隻の活眼を以て自然と人生の眞面目を描破する所に存す。今の所謂旅行記、是の如きを得たるもの、果して幾人ぞ。

○人は曰ふ「新聞記者は大臣となり得べし、安ぞ美術鑑査官たり得ざるの理あらむや」と。一場の詭言なりと雖も、又以て今の社會が藝術に對して如何の觀念を有するかを知るに足るべし。

○政治家より見れば、美術鑑査官の如きは素より言ふに足らざるべし。然れども、藝術社會に取りては、批評家の權利こそは最も貴重なる權利なれ。藝術社會の面目を蹂躪する、惡批評家の跋扈より甚だしきは無し。

○今や鑑査官問題は多くの世論を惹くに及ばずして批評家は却て藝術家に向つて爲されたるが如し。人は曰く、作品既に是の如く貧し、如何ぞ批評家の適否を問ふに違あらんやと。

○作品の優劣は其の貴藝術家にあり。批評家の適否は其の責寧ろ社會に存せずや。批評家は即ち社會の藝術的嗜好の程度也。今の世に於て批評家が如何に重ぜらるるかを知るものは、決して多きを藝術家に望むべからざる也。

○本邦の文學に於て雅號の必ずしも贅物ならざること、吾人之を認む。唯、雅號を被れば、輒ち多少責任を脱するに宜しとせらるゝに到りては、慥に弊なりと謂はざるべからず。

○嘲罵、諧謔、放言、遊蕩、若しくは自己の品位に累を及ぼすが如き行爲等、凡て眞面目に責任を負擔するを憚る場合に當りて、人は輒ち雅號を用ふ。然れども人は如何なる場合に於ても、同一の人たるべし。本名と雅號との差別によりて、責任の輕重を分つが如きは、是れ人に不義を爲し得る餘地を與ふる也。

(明治三十二年九月)

○藝術家の科學的知識に關するSS生の意見は、吾人大體に於て是を是認すべし。四脚獸が平行四邊形的に歩行し、鳥が雨量計に水浴びし、楠正成がアラビア馬に乗るが如きは、眞に笑ふべし。但し所謂理想主義と所謂寫實主義との實際上の界限如何に到りては、問題は爾

かく簡單ならず。

○何人も知る如く、赤壁賦に「山高月小」の句あり、僅々四字、誦し去つて何人も景物の眞に逼れるを想像すべし。然れども實際は然らざる也、高山の上に月ある時は、月小さく見えずして却て大きく見ゆ、是れ經驗上の事實也。

○然らば則ち、是の經驗の事實に本きて「山高月小」を虚偽なりとして排斥し去るべき乎。經驗と想像と背反する場合には、吾人は必ず想像を虚偽、非美として否定し去るべき乎。問題はずしも決し易からず。

○吾人の見る所によれば、是れ程度の問題也、精しく言へば、經驗の如何ばかり普通なるかの程度によりて決せらるべき問題也。吾人は「山高月大」の事實を経験すること極めて稀なるべし、恐らくは科學者が特殊の目的を以て是の如き事例に注目したる時に於てのみ經驗せらるべき事實なるべし。是の如き稀少、もしくは稀有なる經驗は「山高月小」の想像を非美なりとするの力無し、是れ想像なるものは、其の背後に無數の類似的徵證を有するものなれば也。

○故に審美上、經驗にして想像を打破するの力あらむが爲には、其の經驗は日常無數の事例により、吾人の常識として確立せられざるべからず。而して是の如く確立せられたる時は、即ち想像が他に打破せらるゝまでも無く、自ら其の審美上の主張を撤回する時也。

○藝術上、所謂理想主義と、所謂寫實主義との限界は、恐らくは是の如くにして初めて決定せられむ乎。科學的知識を尙ぶは善し。但し藝術の世界には、經驗以外、想像の特權あることを是認せざるべからず。

○SS生の説は、恐らくは今の科學者の藝術に對する意見と見るも大過無かるべし。吾人は大體に於て是を是認するも、是認の預件として前條の辯を爲すこと爾り。

○若し夫れ經驗の缺乏せる所に於て、是を補充するものは、所謂理想主義ならざるべからず。喻へば補正成の肖像の如き是れ也。

○今日に於て補正成の肖像を具象的に表現せむは、到底望み得べき事に非ず。是の如き場合に於ては、公が歴史上の性格上より、其の相貌を構成するの外無かるべし。

○宮城門外に立てらるべしと傳ふる公の銅像は、是の點より見て批難を免れざるべし。其

態度は暫く措き、其顔面の何ぞ一に醜怪なる。楠公像と題する無くんば、足利尊氏の像とも見えぬべし。而して作者の辯解を聞けば、是れ京地某々寺所傳の肖像に依據せる也と。

○是れ笑ふべき辯解に非ずや。楠公の今を去る幾百年ぞ、良し當時の畫工是れを似寫せりとするも、勿論不十分なるに相違無し。楠公を見たる人、或は是を以て追憶の資となさむ。今日の人をして依りて以て其相貌を想像せしめむは、土偶によりて上代の人物を揣摩するが如けむ。

○公の相貌果して具體的に知る能はずとすれば、何ぞ怪しけなる典據によりて、故らに公の性格に相應はしからざる異形の面貌を造りける。何ぞ公の歴史上の性格と事蹟とに鑑みて、一個の理想的相貌を現せむとは力めざりける。惜みても餘りあり。

○楠公像は一例のみ。誤解せる寫實主義の弊を説かむが爲に、特に茲に一言を費せり。

○哲學雜誌が敬で和田守某の書翰を掲載せるは、何等の醜態ぞ。彼れ一個の山師のみ、品位ある學者の齒すべき者に非ず。哲學雜誌なるもの何ぞ自ら重ぜざるの甚しき。

○『記憶術の發明者として世人を驚動せしめたる和田守菊次郎氏は、過般高島翁の易學に證明を與へられたるが、更に翁より氏の書翰を寄送せられたれば左に載録せむ』。是れ日本の哲學界の代表者たる哲學雜誌記者の言ならむとは。

○『余は社會道德の壞敗を憂ひ、易占を以て世に神あるを知らしめ、神人の間を媒介して化造の恩澤を受けしめむと欲す、凡百の君子慎みて之れを思ひ、和田守氏の書翰に就いて顧みられむことを請ふ』。是れ高島氏の附書、而して是の如き閑文字の爲に敬みて八頁を割與したるは八十頁の哲學雜誌なり。

○前島密氏が電氣の藝術的表現に就て苦心せられ居ることは、吾人の傳聞せる所也。

○標號は遂に標號たるを免れざるべし。電氣と云ふが如き複雑なる勢力を、一個の藝術的製作によりて表現せむと擬す、是の『表現』に向て多きを望む能はざるは勿論なるのみ。

○標號藝術に於て成功したる事例は、歴史上極めて稀に見る所也。而して是の成功の程度は、藝術の種類と對境の性質とに職由す。今日繪畫又は彫刻によりて、電氣と云ふが如きものの標號を造らむとす、吾人をして言はしむれば、是れ勞して功無き也。ミケランジェロが『天然間の萬物一として體現し得ざるもの無し』と謂へるは、是れ彼れが一家言のみ、以て

後葉の則となすに足らず。

○本邦人が滑稽的藝術に於て成功すべきや否やは頗る疑はし。機智としては多くは淺薄なる地口のみ。滑稽文學の上乗なるものは、一九的にあらざれば三馬的のみ、團珍（團々、珍聞）の萃むるところは、晝に於ても、文に於ても、多くは拙劣なるカリカチュールのみ。ユーモルに到つては殆ど是を見ず。

○避暑旅行已み、紀行文學終りて、詩人小説家の筆を執るべき秋は來りぬ。而して文壇の光景依然たり、依然として寂寞たり。

○明治の文壇は逍遙を以て創まりき、而して今や逍遙は育英の道に潛念し「牧の方」以來、未を壇站に着けざること一年有半。人をして空しく望河の情に堪へざらしむ。

○逍遙に次で起ちたるものは一葉亭なりき。「書生氣質」の後を承けて新寫實主義の旗幟を明にしたるものは、彼れの「浮雲」なりき。今や彼れ亦深く藏して空しきが如し、文壇の先輩、何ぞ早く遷れ去らんとする。

○「夏木立」の一篇を以て、小説界に新文體を齎らしたる美妙、久しく振はず。「國民」紙

上、飛影の名によりて小説を草するもの、彼なりといふものあれども、意氣、素より往年の如くならず。「胡蝶」、「いちご姫」時代の全盛を顧みれば、恍として隔世の如し。而して年々、塵に十年を経たるに過ぎざる也。

○寫實主義の順風に乗じて、幾年の覇を文壇に稱したる紅葉、彼れの昨今も亦頗る疲瘁に堪へざるものあり。「金色夜叉」、稿を起してより既に三年、未だ成らず、而して成れるものは、量に於て柳浪が三月の作にも及ばず。或は洗鍊の工あるべしと雖も、而も「伽羅枕」、「二人女」時代の元氣を消耗せるは掩ふべからざる事實也。

○而して「金色夜叉」は如何の作ぞ。見るべきものは其の第一篇のみ。人に眞情の流露無く、事に自然の開發無し、徒らに文辭の洗鍊を事とするも、遂に感興の索然たるを如何すべき。寫實主義を以て起りたる紅葉が、是の「金色夜叉」に於て、却て形式主義に陥りつゝあるは、亦掩ふべからざる事實也。

○如何にして是の形式主義の圈套を顛脱すべきかは、即ち彼れの將來を決すべき一大問題也。今のまゝにして其の進路を續けむか、彼れのマスターピースは「伽羅枕」、「二人女」の



類にして己まんのみ。

○露伴も亦逍遙、二葉亭と共に、今や埒外の人たるが如し。眠れる乎、養へる乎、抑、彼れは詩人としての彼れの天分を如何せむとせる積りなる乎。彼れは一葉と共に慥に明治文壇の天才也。『風流佛』、『五重塔』、『新浦島』を書ける彼れは、決して是の如くにして己むべきに非ず。

○一葉女史の死は、明治文壇が被れる最も大なる損失なりき。彼れの作は造るに非ずして生む也。芽の發する如く、花の咲く如く、生まるゝ也。彼れは慥に人情の幾微を解し、且つ捉へたり、是を以て彼れの作には生命あり、活動あり。若し明治文學の産物として後代に傳はるべきものあらば、彼れの作必ず其の隨一ならむ。

○一時所謂撥鬢小説を以て鳴れる浪六の作は、今尙ほ太平新聞紙上に見ることを得べし。然れども彼れが今日の名は、寧ろ『三日月』の餘韻のみ。撥鬢小説を以て起りたる彼れが、撥鬢小説以外、新に向上の一路を求め得ざりしは、深く恨とすべき也。

○紅葉門下の秀才は、指を鏡花、風葉に屈すべし。風葉、文字の才あり、觀察の才あり、

勉めて怠らずば、進境見るべきものあらむ。唯、其の文字は流麗を銜ひて散漫となり、觀察は精緻を濫りにして冗漫となる、緊縮一番せむことを要す。

○彼れの近業『かつら下地』は、苦心の作と傳へらる。然れども惡作也、其弊は書き過ぎたるにあり。佛人の諺あり、曰く『人を倦ましむる秘訣は總てを語るにあり』と。

○學識を銜ふの風は、作の全部を擧げて虚偽のものたらしむ。製作の根蒂に於て一點の虚情あらば、藝術の第一義は既に失はれたる也。吾人は特に是の言を以て今の青年作家に呈せむと欲する也。

○吾人が乙羽の紀行文に取る所は、虚情無き所にあり。彼れは觀たる通りに描き、感じたる通りに述ぶるの外、其の他を知らざる也。文字の瑰麗なるものあるにあらず、觀察の奇拔なるものあるに非ず、而も尙ほ人をして卒讀を覺えざらしむるは、畢竟虚情無きが爲め也。

○紅葉が『煙霞療養』の如きは、『金色夜叉』を草したる筆を移して紀行文に擬したるもののみ。或は評して曰く、露伴と紅葉との差別は、其の紀行文に於て最も善く表はれたりと。

○舊硯友社以外、又所謂新進作家以外、超然として雄を一方に稱するものを濫柿となす。

澁柿の作、概ね堅實にして釋氣なく、觀察亦た閑々精談、叙事の文最も讀むべし。而して出す所の作、何れも不佳ならず。殊に近時全く浪六調を脱したるは、殊に多とすべき也。

○天外、作なきこと幾月。近時人の傳ふるを聞く、來る十一月を期して三冊續の一長篇を公にし、以て世に問ふべし、是れ彼れが一世一代なりと。吁天外、年幾何ぞ、何ぞ二世一代を言ふことの早きや。

○見渡せば明治文壇の將來も、今日の儘にては餘りに好望なりと謂ふを得ざる也。吾人の作家諸子に望むところの酷なる、亦已むを得ざる也。

(明治三十二年十月)

## 三

○最早や歳も暮になつて、何事も新年にと心も空の有様である。文壇の風光も年と共に改まれかとは、おしなべての希望であらう。名のある作家は何れも一二の新作を公にするらしい。兎も角喜ばしい事である。

○さるにても柳浪が『富士新聞』に載せつゝある『水がはり』の書き振り、あれは如何したことであらうぞ。最早九十何回續いても一向事が運ばぬ。如何いふ縁か吾輩は毎朝是れを

讀むで居るが、思ひ出して見ると跡に残つて居る記憶が一日の雜報にも足らないのである。餘り人を馬鹿にして居るでは無いか。

○其れもその筈、お早うムいます、昨日もお天氣で、又今日もお天氣で、誠に結構な事で、何時もお變りなく、こむな調子な書き振りでは、人一人の一生を書くには五十年も懸るだらう、それまで作者先生も何時もお變りなければ好いがと洒落たくもなる。

○是は戯れとして、今の作者の多くには是の如き弊は決して少なくないのである。我輩は敢て注文する、もすこし縮めて貰ひたい、百枚のものならば七十枚に、七十枚のものならば五十枚に、一體の事柄をずんと緊縮して貰ひたい。我輩は斷言する、今の多くの小説にとりては是の如き緊縮は實に容易の事である。誰がお早う、お天氣を訓はりにわざ／＼小説を買ふであらうか。我邦の小説家も二十世紀が眼前に來て居るのを知らぬでもあるまいに。

(明治三十二年十二月)

## 四

○鏡花の『湯島詣』はたしかに三十二年の文壇に於ける掉尾の作であつた。『新小説』の

記者が溢るゝばかりの同情を有つて褒めちぎられた言葉も、<sup>かたが</sup>強ち溢美で無いと云ふことを吾人は認めるのである。

○主人公たる蝶吉の性格は、兎に角成功を以て描かれた。而して其の描かれ方が従來の鏡花には多く見なかつた程に際立つて寫實に傾ける事も、殊に注意すべき事實である。

○『新小説』記者は、是の寫實の傾きを以て鏡花の一進歩とせられたが、是れは考へ物ではあるまいか。彼れが如き作者に所謂寫實の風の加はるは果して祝すべきことであらうか。

○吾人は彼れの作の自然に離れ、寫實に遠かることを強ちに咎めなかつた。唯、自然に離れかた、寫實に遠かりかたの如何にも無理なところがあるのを難じたのである。吾人の美意識の赴くところは、決して自然又は具象と云ふが如き一面のみではない。自然を超越せる處にも吾人の理想として渴仰するものが多々あるのである。所謂天地の祕密と云ひ、人生と宇宙との幽玄なる交通と云ふが如きは、何れも是の一面の渴仰を著した言葉に過ぎないのである。潜かに思ふに鏡花の本領は此れにありて彼れに在らざるのではあるまいか。

○吾人は鏡花が『湯島詣』に於て、力めて寫實に赴ける痕跡を明に認めるのである。が、

作全體の精神と是の寫實とは如何程までに調和して居るかを考へると、吾人はこの寫實に對して多くの讚辭を呈し兼ねるのである。喩へば雪舟の山水に北齋の人物を點じた様な不調和、喩へば能役者が壯士芝居を眞似た不統一が明に現はれて居るのである。是れをしも寫實の功として褒むべきであらうか。

○されば鏡花に對して彼れが自家の本領を自覺して、猥りに淺薄なる寫實を銜ふ無からむことを吾人は望むのである。良し『湯島詣』は佳作であるとしても、其の佳作たる所以を其の寫實なるところに存すとせば、それは大いなる間違であると云ふことを自覺する様に、吾人は鏡花に望むのである。

○吾人は眞正の寫實小説は、吾人の所謂社會的小説に到るべきものなるを信するものである。併し是を鏡花の様な作者に望むは能役者に壯士芝居を眞似よと勸むると一般ではあるまいかと恐るゝのである。

○鏡花が實世間に對する觀察に乏しいことは、神月梓の描寫によりても明に見ることを得るのである。神月は文學士だと言はれて居る。大學の寄宿舎の有様などは煩はしきまでに實

際を描いて居るが、扱て文學士たる神月はマルデ傀儡の如きものでは無いか。彼れを大店の若旦那としても、今様の丹次郎としても、乃至は濟生學舎の書生としても、毫も差支は無いのである。例へば是の文學士は蝶吉のワキとしての外は生存の意義も事業も何も無いでは無いか。斯様な文學士がマア何處に在るであらうぞ。

○寄宿舎の有様の如きは、一度でも友人を訪問すれば直に分るであらうが、さて人物の寫實に到つてはなかく左様に容易なものでは無い。是の如き幼稚な觀察を有せる鏡花に對つて寫實の成功を褒むるのは餘り可哀相であるまいか。

○吾人はくれぐれも天才ある鏡花が邪道に迷はぬことを切に祈るのである。

(明治三十三年一月)

五

○皇太子殿下御慶事の紀念として東京市民は愈々一美術館を建築して獻納することに決せり。例の祭禮的騒動に無益の金錢を費やすを止めて是の恒久の事業に出づ、社會の一進歩として見るに足る。

○美術館の建築は、御慶事の性質に關して特に其の體を得たるに庶幾し。公會堂の建設も必要ならざるに非ざるも、是の度は美術館のかた然るべし。

○されど東京市民の決議したるは建物なり。是の建物に入るべき美術品を如何にすべきか。○我邦の美術は久しく全國に散布し、今に於て其の所在を知るに苦しむもの尠からず。是を蒐集する事、既に容易に非ず。

○夫の株券を所有する代りに美術品を所有するものは寧ろ與し易し。何となれば彼等は値段次第にては何物をも容易に手離すべければ也。

○唯、鑑賞の誠意なくして、偏に私有を喜ぶものは、是を美術館に致すこと容易の業に非ず。今の富豪の多くは蓋し是の類ならむ。而して最も難儀なるは、是の輩の有する所、往々にして稀代の逸品なるにあり。

○如何にして美術品を收容すべきかは、今より考究し置かざるべからず。吾人の希望を陳べしむれば、富豪をして其の所有品の保管を美術館に托せしむるに若くは無し。唯、困難なるは我邦の富豪が果して是の如き公共心を有し得るや、否やにあり。

○然れども是の如くするに非ざれば、完全なる美術館は遂に成立し難からむ。古寺院の佛像寶物等の如きも亦適當なる方法によりて、其の保管を美術館に托せしめざるべからず。

○而して更に吾人の希望を述べしむれば、恐れ多き事ながら、例へば奈良正倉院御物中の美術品の如きも、御差支無き限りは、是の美術館に保管の榮を得せしめられたきもの也。是の如くせば、國民も亦公共心を奮ひ起して、續々保管を依頼するに到らむか。

○さるにても建物の建造費三十五萬圓は餘りに小規模ならずや。吾人は國家の永遠の爲を思へば三百五十萬圓も亦必ずしも多しとせざる也。

○藤村隠れ、晚翠去りてより中央の詩壇漸く寂しからむとす。近時帝國文學に載する所のものの如きは概ね紛として近くべからず。

○文を作り詩を賦する、何ぞ妨けむ、唯一時の客氣に乗じて風流めかすは斷じて弊也。

○學生時代に詩人にして、一家を爲せば輒ち俗人となり、オクビにも詩を言はざる者、此比として皆是れ也。是の輩花と云ひ戀と云ふ、吾人其の何の謂たるを知らず。

○學を以て身を立てむとするものは、須らく浮華の文字を弄ぶを已めて其の學に専心なるべし。吾人文科大學の諸子に向つて特に是の惡まれ口を言ふ。

○洋行者の夥しきこと今年の如きは無かるべし。行先は言ふまでもなく巴里大博覽會也。成るべく多くの同胞が海外に航海して其の見聞を擴めむことは至極望ましきことなれども、田舎者の東京見物の如く、生かぢりの通を振舞はすことのみ習ひ來らざらむことも、亦等しく望ましし。

○今回の巴里博覽會に於けるピカー氏の設計は從來の方法を一新せるものなりと聞く。内國博覽會に於てすら完全なる設計を案じ得ざる我が邦人は、特に是の點に於て學ぶ所無かるべからず。

○自著と爲して翻譯を公にするは賞讀すべきことに非ず。森氏が、「審美綱領」の廣告の如きは、素より書肆の猾策なるべきも、知らざるもの或は累を氏に及ぼさむ。

○文學者の講談は飽く迄講談改良の爲になさるべし、是を以て文學に代用するあらば、是れ文學の墮落なりと知るべし。

(明治三十三年四月)

藝術家の科學的知識『無題錄二、(七九九頁)』參照

S. S. 生

太陽記者足下、藝術家の所謂理想主義なるものは暫く之を了せりとせむ、唯予輩科學者の眼より見れば、幾多の馬鹿々々しき誤謬は、常に理想主義の名によりて行はれつゝあり、是をしも尙ほ藝術の特權と許し去るべきか。

上野櫻ヶ岡に於ける西郷侯の側にある犬の四脚は『バラネログラム』に立てり。四脚動物の歩行が、常に梯形に於てすることは、三尺の童子も知る所にあらずや。彫刻競技會に遊馬の縮型あり、其中の多くの馬も亦『バラネログラム』的に奔れり。眞に噴飯すべし。

八月中旬の萬朝報の懸賞小説『無究』と題するものの中に、烏が天文臺の雨量計中に水浴びすとの意味を書せり。苟も雨量計の構造を知れるものは、是の如き記事を読んで抱腹絶倒せざるを得ず。

斯かる例は余輩の日常見る所也。今の藝術家はイマ少し科學上の知識を有するに非ざれば、少くとも普通教育ある人士の嗜好に應ずる能はざる也。記者幸に是の意を以て今の藝術家に訓ゆるところあれ。

第 三 期

## 文明批評家としての文學者

本邦文壇の側面評

予、人のニーチェを語るを聞く毎に、其書に接するの暇無きを恨みしや久し。頃來閑に乗じて彼れが二三の著書を読み、其の要領を會するを得しが、初めは其説の太だ意表に出づるものあるに驚きぬ。抑、歴史を尙ぶ進化論と、平等を旨とする社會主義とが、殆ど思想界の上下に貫盈せる今の時に當りて、奇矯大膽、時には殆ど突梯不稽とも見らるべき彼れが如き説の如何なれば科學、哲學の中心たる獨逸には興りたる。今や『フリードリヒ・ニーチェ』の名は獨逸青年の間に魔語の如く響き渡り、『フラウ・ゾルゲ』の五十一版を出だせるズーデルマンを初めとして、文學者中にも彼れが影響を被れるもの尠からずと傳へらる。科學を蔑如し、歴史を無視し、漫りに不稽の空想を臚列して幽玄神祕を衒ひたるらしき彼れが如き説の、如何なれば斯くは一世の人心を鼓動し得たりとするや。予は其の當に然るべき所以を想ひ

て、つらつらニーチュエの名の空しからざるを悟りぬ。蓋し彼れは哲學者と謂はむよりは寧ろ大いなる詩人也。而して詩人として大いなる所以は、實に彼れが大いなる文明批評家 *critic* たる所に存す。

ニーチュエは殆どあらゆる方面に於て十九世紀の文明に反抗せり。哲學界に於てはヘーゲル以來、科學界に於てはダル井ン以來、一代の思想を殆ど残り無く風靡し來りたる歴史發達説も、彼れの眼中には僞學者の俗論に過ぎざるものとなれり。以爲らく、十九世紀末の吾人は歴史の多きに勝へざる也。主觀を没し人格を虐げ、先天の本能を無視するものは歴史也。個人自由の發達を妨げ、凡ての人類を平凡化し、あらゆる天才を咒咀するものは歴史也。——彼れは是の如き證據より多くの學者を嘲りて僞學者と呼び、『凡ての活力あるものの障礙、凡ての疑惑に沈むものの迷信、凡ての弱者に對する道德家、凡ての高きに向て進むものの足枷、凡ての清新なる生命を望みて進みつゝある獨逸人の前途を沮害する沙漠』は即ち是等の僞學者なりと罵り、『新舊信仰』の著者たる博士ストラウスの如きは是の如き僞學者の好摸本として標榜せられたりき。是の如く人格の獨立の爲に歴史發達論を否定したるニーチュエ

は、更に論歩を進めて民主主義と社會主義とを一撃の下に破碎し、揚言して曰く、人道の目的は衆庶平等の利福に存せずして、却て少數なる模範的人物の産出に在り。是の如き模範的人物は即ち天才也、超人也。即ち是れ無數の衆庶が育成したる文明の王冠とも見るべきもの也。されば若し衆庶にして、自ら自己の爲に生存すと思はば是れ大いなる誤り也、彼等は唯、是の如き天才、超人の發生を助成する限に於て其の生存の意義を有するのみと。——彼れは、是の人道の理想を認めず、却て是に背馳せる方針に出づるの故を以て今の社會、國家、學術の凡てを非認し、翻つてルソー、ゲーテ、シヨペンハウエル、ワグネル等の人物を擧げて真正なる文明の指針是に在りとなし、所謂超人は學者に非ず、識者にも非ず、又歴史的に發達し來れる如何なる人にも非ず、實に是れ一個の藝術家、作家なりと斷じぬ。彼れの説は是に到りて現時の民主平等主義を根本的に否定し、極端にして、而も最も純粹なる個人主義の本色を發揮し來りたるを見る。さはれ、歴史無く、眞理無く、社會無く、國家無く、唯、個人各自の『我』あるを認むるもの、十九世紀末の思想に對して何等の對比ぞや。遠くは『ロマンチズム』の運動も、近くはヘンリー・マッケーの無政府主義も、ニーチュエが是



の個人主義の極端なるに較ぶれば、尙ほ遙に緩漫なるを覺ゆ。而して吾人の最も注意すべきは、是の如き思想が獨逸現代の人心を搖撼したることの豫想外に深大なるの事實に在り。

是に於て吾人は文明批評家としてのニーチエが偉大なる人格を歎美するを禁ずる能はず。

彼れは個人の爲に歴史と戦へり、眞理と戦へり、境遇、遺傳、傳説、習慣、統計の中に一切の生命を網羅し去らむとする今の所謂科學的思想と戦へり。徒らに外面皮相の觀察を事として精神的生活の幽微を解せざる今の心理學と、認識論の如き一部煩瑣の研究に陥りて、本能と動機と感情と意志とを遺却し去りたる今の哲學とは、彼れの所謂の偽學として排斥する所也。彼れは青年の友としてあらゆる理想の敵と戦へり。彼れは今のあらゆる學術の訓へ得るよりも更に大なる實在の宇宙に充滿せるを認めたり。同時に是の實在を認識し、其の秘密に到達せむには、今の所謂の學術道德の甚だ力無きを認めたり。彼れは其の豫言者の眼によりて其の方法の何ものなるかを知りぬ。彼れが當代の文明に反抗して其の神怪奇矯なる個人主義を唱ふるに至りしもの、亦眞に己むを得ざりしならむ乎。人は言ふ、彼れの書、險難にして解すべからずと。蓋し彼れは素と哲學者に非ずして詩人也、而して彼れの歌へるものは

## 二

山に非ず、河に非ず、恐らくは彼れ自らも解する能はざりし天地人生の幽微也。語妙に意徹せざるもの蓋し亦自然の勢のみ。唯、靈なるもののみ能く靈を動かす。そが十九世紀の重荷を自覺し初めたる當代青年の中に無數の味方を贏ち得しもの、亦決して偶然に非ざるを見る也。

ニーチエに關しては暫く是の如きを以て足れりとせむ。唯、文明批評家としての彼れが偉大なる品性と高邁なる識見とは予が特に我邦文學者の注意を乞はむと欲する所也。

我邦、文學者を以て自ら居る者甚だ少からず。されど『詩は人生の批評也』と云へるアーノルドが語を眞に會得せる者果して幾人ありや、予は實に是を疑ふ也。獨逸の學者中には藝術を以て哲學に配し、精神生活の最高位を以て是に擬せしもの少からず。我邦文學者中、眞に這般の消息を解するもの幾人ありや、予は實に是を疑ふ也。予は街上に爛醉して車夫馬丁と格闘したる知名の小説家あるを耳にせしことあり、而も一人の當代文明に反抗して清新なる理想を歌ひたるものあるを聞かざる也。彼等の所謂の詩歌と云ひ、小説と云ふもの、多くは、予を以て見れば到底戯作のみ、無意義の文字のみ。彼等の胸は未だ人生に對して開かれ

ず、耳あれども聞えず、眼あれども見えず。何ぞ其の作る所の主義なく、識見なく、精神なく、光焰無く、理想無く、殆ど小兒輩の落書と擇ばざるを怪まむや。詩人ニーチェの名が如何にして史上に鏤刻せられたるかを見よ。予は我邦文學者が文學に對する覺悟を一新せむことを希はざるべからず。而して更に見よ、是の如きは獨りニーチェのみに非ざる也。

## 三

輓近歐米の文學者にして其名を一世に擅にせるもの、曰く米のホイットマン、曰く魯のトルストイ、曰く那のイブゼン、曰く佛のゾラ、皆是れ文明批評家也。一代の文明を抱擁して自家の理想中に化育せむとしたる文明批評家也。ホイットマンの事は予嘗て論ぜしことあり、讀者の中或は是を記憶する人あらむ。十九世紀と亞米利加の文明とありて而して吾が詩あるもの、眞に己むを得ざる也。てふ彼れが語は、誠によく彼れが詩の面目を發揮せり。實に形式主義、方便主義に墮落せる十九世紀末の文明と、平等の虛名に眩惑して却て民主自由の咒咀者となりたる北米合衆國の缺陷とは、彼れが詩是れを暴露して殆ど餘すところ無し。『生命に渴へて而も其の泉を得ざりし理想の兒』は、さながら『ハムリン』の小兒

が捕鼠翁の笛聲に赴けるが如く、踊躍して彼れに隨ひぬ。トルストイ伯が當代文明の最も大膽なる批評家なることは何人も知る所ならむ。曾てルソーが自然に還れと説きしが如く、彼れが理想は十九世紀の文明を逆倒して原始基督教の禁欲主義に還没せしむるにあり。彼れは國家の威嚴を認めず、帝王の尊貴を認めず、自ら稱して世界の公民と呼ぶ。魯國政府が發賣を禁止したる『我宗教』の一書、眞に彼れが肺腑を暴露せり。彼れが思想の『アナクロニズム』は素より學者の批評を價せざらむも、而も魯國文明の彈劾批評としては何物か能く彼れが書の痛快に及ぶべき。イブゼンはニーチェと等しく個人主義の宣傳者也。ゾラが境遇 *Misère* に依りて個人を説明せむとするが如く、イブゼンは個人によりて翻つて境遇を規定せむとせり。是を以て彼れが詩は意志の詩也、理想の詩也。『ブランド』の主人公は實に是の勇猛不退轉の意志の化現とも見るべきもの也。彼れにありては凡ての事『萬事』か、然らざれば『皆無』也。彼れは讓歩を知らず、況や屈辱をや。彼れは是の本來の意志を貫徹し、實現するところに人生の極致ありとなし、隨て人は生れながらにして戰死すべき運命を擔へるものと爲せり。而して是の如き強健なる意志と崇高なる理想とは、イブゼンの母國たる那威人の

特に缺如せる所、即ち彼れが詩は「スカンヂナヴィア」文明に對する公然の反抗とも見るべきもの也。不幸にして母國は未だ彼れの眞價を認むるに至らず、彼れが勢力は今や却て南の方獨逸聯邦に擴がり、ニーチニと相應して獨逸文壇の風色を一變せり。ゾーデルマンの如き實に彼れが偉大なる影響を代表する一人なり。佛のゾラ將た儼然たる文明批評家也。彼れを目して單に寫實家とするものあらば、是れ未だ彼れを知らざる者のみ。「ナナ」や、「ラキエレー」や、「ラルジャンヌ」や、將た「倫敦」、「巴里」の連篇や、何れか佛國文明の病處を批評したるものに非ざるべき。彼れは實にチーグレルが言ひし如く、寫實家の假面を被れる「シムボリスト」のみ。其の本來の面目に於ては、ニーチニ、イブゼンと多く異なる所あらざる也。

## 四

吾人は我邦の文學者が切に這般の事實に對して熟慮するところあらむを希ふ。想ふに是の如きは一端の事例のみ。輒近歐米の文學者にして盛名を一世に擅にするものは、殆ど凡て文明批評家なりと謂はむも不可無き也。彼等は其の理想に於て、將た其の詩風に於て各々趣を異にすと雖も、而も時代の精神を代表し、若しくは批評し、若しくは是に反抗し、文明の

進路に率先して億兆の師表たらむを期するに於ては則ち一也。本邦の所謂る文學者は果して是の如き事實を如何と見るや。彼等の多くは耳あれども國民の聲を聴く能はず、目あれども時勢の風潮を見る能はず、一代の民衆が空しく光明に憧れて暗中に煩悶する所のものを捉へて、「見よ、爾等の理想茲に在り」と呼ぶ能はざる也。彼等の多くは社會を知らず、國家を解せず、況してや十九世紀の世界文明をや。彼等の多くが一代の文明と風馬牛なる、其の豆大の眼孔に映じたる貧少なる閱歷を糊塗し、輒ち呼で詩歌と云ひ、小説と云ひ、我れこそは文學者なりと稱す。抑々彼等の多くは文學者なるものを如何なるものと心得居るにや、抱腹絶倒せざらむと欲するも豈得べけむや。吾人嘗て我邦の文學者に向て時代の精神に觸接せよと説きしことありき。而して彼等は即ち同音にして言へらく、「願はくは所謂る時代の精神の何物なるかを説示せよ」と。あゝ何ぞ其の厚顔にして愧ぢざるの甚しきや。文學者を以て自ら任ぜる彼等に向て却て文學者の覺悟を説く、既に是れ百歩のハンデキャップ也。而して彼等自ら慚づる所以を知らず、尙且つ斯かる奇問を發す。若し吾人にして是の如きもの即ち時代の精神也と説示せば、厚顔なる彼等恐らくは更に問はむ、「然らば如何にしてそを描

くべき乎」と。嗚呼彼等は吾人に向て「文學者と爲るの法如何」と問はずむば已まざらむとする也。吾人豈恨み無きを得むや。

## 五

我邦斗筭の文學者を以て歐米現代の名家に配す、素より不倫の詆を免れずと雖も、而も詩人小説家としての覺悟に關しては、予其の同日にして論すべきを信ずる也。實に一代の文明を批評し、若しくはそを敵として戦はむ程の者は、當に其の識見の高邁なるのみならず、其の氣魄の雄大、凛として秋霜烈日の如きもの無くむばあらず。一分世に阿ねるの意あらむ乎、是れ既に批評家に非ずして詔諛者也、世に訓ふるに非ずして却て訓へらるゝ也、時勢に率先するに非ずして却て追隨する也。是の如くにして社會の劣等なる讀者を籠蓋し得たりとて、何處にか貴むべき所あらむ。文明批評家は己れの信ずる所に非ざれば動かさず、己れの信ずる所を貫徹せむが爲には輒ち一世を敵として戦ふを辭せざる氣魄あり。利害の打算は彼れの知らざる所、彼れは推歩せずして跳躍し、而して其の意志の満足は實に其の至高の報酬たり。是の覺悟あるもの初めて文明批評家たり得べき也。

吾人は茲に顧みて我邦文學者の多くが、氣節なく、徳操なく、飄々片々として時好に投せざらむことを是れ怖るゝの薄志弱行を遺憾とせざるを得ず。依て以て虚名を得、錢利を貪るの外、彼等に於て毫も著作せざるべからざるの必要無し。彼等は唯々官吏たらず、商人たらざる代りに、假りに文學者となれるのみ。理想の重荷を擔へる胸の如何ばかり苦しきかは、彼等の未だ曾て知らざる所也。是の如くにして詩人たり、小説家たらむと擬す、洒落本、浮世草紙の戯作者と相距ること果して幾何ぞや。

去て是をホットマンに見るに、彼れは其の詩に於て慥に北米合衆國を侮辱せり。而して其の詩集の一部を抹殺すべしとの衆論に對して揚言して曰く、是の如くむば吾れ悉く吾が詩を火にせむのみと。意氣何ぞ夫れ壯なるや。トルストイ伯は「吾れは魯國の民に非ず、魯國政府に對して何の負ふ所無し」と公言せり。原始基督教の理想を復活せむとする伯にとりて、是れ實に已むを得ざる宣告なりき。其の「イワン・デウラック」は魯國の軍隊政治を難じて頗る痛快を極め、其の「燭」は公然弒逆を論じたり。「吾宗教」の發賣を禁止したる魯國政府が是の如き著述を黙過したるは寧ろ奇怪とや稱すべけむ。遮莫、全世界の恐れとなれる魯

國の權力を以てして遂に其の一步を枉けしむる能はざりしトルストイ伯の偉大なる人格は、吾人の歎美するを禁する能はざる所也。文學の嚴肅なる意義は吾人又イブセンに於て是を見る。彼れにありては詩は即ち彼れの意志也、理想也。「ブランド」を公にせむとするや、彼れ書を其の友ローラ・キールに贈りて曰く、「詩の第一義は自己自ら自己に忠なるにあるのみ。我れは我れにして他の何物にも非ず、是を以て欲せざるべからざるものを欲す、已むを得ざる也、詩即ち是れのみ。或は彼れを撰び、或は此れを擇ぶ、赴く所は虚偽あるのみ」と。「ブランド」は實に、是の如くにして成りたりき。其の人を動かして剴切痛激を極むるもの眞に所以ある也。請ひ問はむ、優柔媚悅を事とする我邦の文學者、這般の事例に對して果して何の顔色かある。

凡そ文學者に要するもの學殖然り、識見亦然り、而して最も得難きものを是の氣魄となす、是を以て眞正の文學は古より傑士の事也。彼れにして若し處を換ゆれば、或は教の爲に血を流すの義人となり、或は義を見て難に趨くの國士となる。夫の紛々たる遊蕩兒、無賴漢にして偶々穿俞の技を弄ぶもの、果して何爲るものぞや。

六

是の如きは暫らく言ふを已めむ、恐らくは言ふて甲斐無きことなれば也。唯我邦文學者の多くが僅に彫琢の末技を恃みとして無學無識に安じ、絶えて修養の意志無きに到りては、切に警戒する所無かるべからず。

今は全く局外の人と爲れりと雖も、予が初めて文壇に評論の筆を執りしより最近數ヶ月前に至るまで、前後殆ど六年の久しきに亘れり。予は是の短かからざる年月の經驗により、文壇の事情を知る上に於て通常人よりも多少の便宜ありたるを信ず。予は評論家の本務として是の間に現はれたる殆ど總ての著作を一讀せり、而して常に所謂文士の進退徂徠に注目して、出來得べき丈け文壇の消息に精しからむことを力めたり。是の如きは實に予にとりて最も苦痛多き事業なりしと雖も、而も亦最も必要なる勤務なりし也。予は是のあらゆる經驗の名によりて公言するを憚らざる也、今の文學者には修養の念慮無しと。若し彼等にして修養を怠らずと謂はば、是れ疑も無く修養の道を誤れる也、即ち吾人の所謂修養に非ざる也。試に見よ、最近十數年の間に出でたる新作家の數、十を以て算ふべし、而して彼等の十中の八九

は今や殆ど見る影も無き姿となれるに非ずや。彼等の多くは其の出場の初期に於てこそ多少注目すべき著作をも出だしたれ、其の貧少なる思想觀察を餽釘し補綴して僅に一時を彌縫することの度重なるに及びては、如何に幼稚なる社會と雖も永く是に勝ゆべくもあらず。時勢進み人心移るも、彼等は是に適應すべき所だも知らず、況や是に率先し、況や是に超越するをや。流石に事漸く昔日の如くならざるを看取するに及びて、強ひて新境地を開拓せむと焦心するも、想淵れ筆溢りて如何ともすべからず。是に於て彼等の中未だ名を成さざる者は、已むを得ず舊様に據りて胡盧を描き、其の既に少しく名を成したる者は、高く自ら標置し、事に托して容易に筆を執らず、ひたすら既得の虚名を失墜せざらむことを是れ慮る。而も這般の兒戲を弄しつゝある間に、大勢漸く推移して又計の施すべき無きに至らむことを知らざる也。予を以て見れば、是の如きは、今の文學者の大多数が其の先輩たると後進たるに論無く、踵趾相接して辿りつゝある所の一様の徑路也。而して自ら覺らず、且夕の計に汲々として自ら得たりとするを見ては、眞に人の心を傷ましむ。

## 七

去て是れを輓近歐洲の小説家に見るに、其の品性識見は暫く言はざるも、其の修養の深大なる、眞に歎美すべきものあり。試に思へ、『アンナ・カレニナ』の如き、『名譽の負財』の如き、『ジャック』の如き、『播種者』の如き、若しくは『クォー・ヴヂス』、『フラウ・ゾルゲ』の如き小説の作者たり得むものは、果して如何なる學殖、修養を要すべしとするや。例へば『クォー・ヴヂス』の作者の如きは、羅馬衰亡の事情に通ずることに於て、多くギボンにも劣ること無かるべく、基督教の歴史に精しきは勿論、兼ねて希臘、羅馬の宗教、文藝、哲學にも通曉せざるべからず。又魯國近代史の精髓を了解し、其の土地と人民と、併せて英、佛、獨、魯、諸民族の民族心理とに明なるものに非ざるよりは、決して『播種者』の著者たること能はざるべし。吾人は素より學識と文學とおのづから別材なるを信ずと雖も、多く學び深く識る者に非ざるよりは、決して讀むべき著作を出だす能はざるを思ふ。我邦小説家は這の事例に就て須らく三思する所あるべき也。

有體に言へば、其の名稱こそ東西齊しく『文學』なれ、同じく『小説』なれ、其の實質に就ては、彼我日を同じうして語り得べきに非ず。我邦の小説家にして若しズーデルマン、ヨ

一、カイ、シ、ン、キ、ー、井、ッ、チ、等、と、其、の、事、業、を、共、に、す、と、思、惟、す、る、も、の、あ、ら、ば、是、れ、大、い、な、る、誤、り、  
 ならむ。彼等は互に單位を異にし、地盤を異にし、平面を異にす。

吾人は我邦に於て政治小説の名を聞かざるに非ず、されど彼等が政治上の觀察批評は日刊新聞の雑報にだも及ばざる也、穉氣滿幅、眞に人をして憫笑に堪へざらしむ。吾人會てヨイカイの『綠書』を讀みて魯國現代史を讀みたるよりも多大の知識を得たるを覺えき。實に是の武斷國の皮相の文明と、根本の野蠻と、戰慄しながらも常に反抗する其の農民と、鐵の如く頑堅なる社會及び宮庭の組織の爲に、常に其の高尙なる理想の實行を沮害せらるゝ無力なる帝王と、凡て躍如として是の一書に描破せらる。先に擧げたるメリマンが『播種者』も亦多く是に劣るまじき也。吾人は是の如き作品を讀みたる後、我邦の所謂る政治小説に對して、如何の批評を下すべきかに惑はざるを得ず。實に二三子の著作の如きは、殆ど兒戲に齊しきもののみ。

吾人は我邦に於て寫實小説の名を聞くや既に久し、されど彼等の所謂る寫實とは果して何を意味するぞ。眞に其實を寫して誤らずむば、世間何物か一部の小説ならざるべき。ドー

テ一の『ジャック』の如きは、其の傍話中に多少の傳奇的分子あるを外にして世間平凡の事例に外ならず。『サッポー』亦然り。トルストイ伯の『イワン・イワノ井チ』の如きも單に一病者の陰深なる苦悶を描寫したるの外、毫も他奇ある無し。而も是等の作、何れも痛切深刻、たしかに一部人生の幾微に入るものあり。吾人は是の如き意味に於て果して一寫實小説を有するか。吾人は遂に我邦小説家の所謂る寫實を尊敬する所以を知らざる也。數月前、都下の一新紙が當代知名の寫實小説家に關して傳へたる一記事は、今の我邦小説家の所謂る寫實が、如何なるものなるかを説明せるものなりき。其の略に曰く、某氏（小説家の名）は横濱市の裏面の未だ社會に紹介せられざるものあるを遺憾とし、自ら是を踏査せむが爲に同地に赴き、數日間滞在すべしと。數日間の觀察によりて看破せらるべき一大都市の秘密とは果して何物なるか、吾人未だ是を審にせずと雖も、又以て我邦小説家の覺悟の那邊に存するかを知るに足らむ。會て聞く、ゾラが其の『人非人』を著はさむとするや、人物事件凡て鐵道に關するを以て、爲に數年間の準備を累ねたりと謂ふ。吾人は名家の功を成すの偶然ならざるを想ひて、轉て我邦小説家の淺薄不用意を恨とせずむばあらざる也。

吾人は又社會小説の稱謂の下に、境遇遺傳の感化を描かむとしたるものあるを見き。世人或は呼で深刻小説と云へり。されど吾人を以て見れば、深刻小説はむしろ慘酷小説と呼ぶべきなりき。精神病通なるゾラが其のナ、を描き、ルセーを描き、ルーボー、ミサールを描き、ジャック、フロラ、スヅリーンを描きしが如き深刻は、得て見出だすべくもあらず。彼等は唯々抽象的に事象の輪廓を描き、而して覺束なき自家の社會觀を其上に貼附したるに過ぎざるのみ。是の如き著作によりて小説家の名譽を博するを得ば、天下何者が小説家の如く多幸なるものあらむや。

## 八

吾人は文明批評家としての文學者を論じて圖らずも罪を我邦小説家に得るに到りぬ。深く是を遺憾とすと雖も、而も本邦文壇の爲に謀るもの、勢ひ茲に出でざるを得ざる也。吾人は今の我邦文學者の多くが、是の如き憐むべき状態に存在するに拘らず、高く自ら標置して大文豪、大小説家を氣取るの癡態を傍觀するに忍びず。夫の丙丁童子に擁せられて、先生を以て自ら居る者の如きは、眞に人をして絶倒せしむ。知らず彼等は何物を以て何人に誇らむと

する乎。試に彼等の愛讀者が如何なる種類の人なるかを想へ。吾人の知る限りに於ては、少しく教育あり、識見あり、趣味ある者の百中の九十九は、彼等の作を手を觸れむともせざる也。彼等が其の褒貶に一喜一憂する所の所謂批評も、多くは文學の何物なるかを解せざる。黄吻書生の惡戯のみ。少しく名ある學者が彼等の爲に眞摯なる批評をものし、が如きは、吾人の殆ど耳にせざる所也。是の如く國民に度外視せられつゝありて、而もそれを覺らざる彼等は、却て日本讀書界の全體を占領せるが如く思惟し、自己の作の世に行はれざるを見ては輒ち社會趣味の高下を口にす、滑稽も是に至て極まれりと謂ふべし。

吾人をして今の文壇の爲に計らしめむか。吾人は何よりも先に本邦文學者が文學に對する覺悟を一新せむことを希はざるべからず。彼等が戲作者氣質を擺脫せざる限りは、一切の助言も水泡のみ。吾人は是の目的に對する一方法として切に歐米輓近の詩人小説家の傑作を翫味することを勸告せむ。文明批評家としての文學者が、如何の修養、如何の品性を須要とすべきかは、特に彼等の注意を要すべし。

吾人は想ふ、若し我邦の小説家にして、イブゼンの『ブランド』を読み、トルストイの



『アンナ・カレニナ』を読み、ズーデルマンの『フラウ・ゾルゲ』を読み、ヨーカイの『グリーン・ブック』、シエンキー井ツチの『クォー・ヴヂス』を読み、而して眞に是を解したるには、復び安じて従來の著述に従事すること能はざるべし。然り吾人實に其の然らむことを想ふ也。

嗚呼、ニーチは一詩人のみ。而して獨逸の思想界は現に彼れが爲に動かされつゝある也。寧ろ突梯とも見らるべき彼れの個人主義が、爾かく一國文明の大動力となれるを見ては、吾人は切に文學藝術の勢力、實に科學哲學に幾倍するものあるを思ひ、更に是の點に於てうたゝ文學者の崇高偉大なる天職を覺悟せむばあらざる也。吾人は我邦文學者に勸めて強ちにニーチ、イブゼンの先蹤を履ましめむとするものに非ずと雖も、而も彼等が是の如き天職を自覺するの途に就て、本邦文學の體面を一新せむことは、吾人の希望して已まざる所也。

(明治三十四年一月)

### 作文論

如何にして文章を作るべきか、予は是迄幾度となくこの疑問に接したり。然れども予素より文を能くする者に非ず、實は問者と等しく是の疑問の中に在る者也。唯、年來筆硯に親みれば、平生の經驗に徴して些か心に會する所無きに非ず、敢て自らは實にすと云はざるも、尙ほ以て青年子弟の參考に資するに足らむと思ふ。乃ちこゝに作文の論をつくる。如何にして己れの所思を忠實に現はすを得むか、これ文を作るもの、筆を落すに先ちて熟考すべき第一義たるべし。己れの使用する所の文字、語句、己れの言ひ現はさむとする所の觀念を代表して果して遺漏なきか、遺漏なきと同時に又果して過剰なきか。文章の要、實に茲に存す。是の第一義を失はむか、是れ既に文章無き也。如何ばかり美はしけなる辭藻を如何ばかり巧に累ねたりとて、畢竟狂言綺語のみ、遊戯文字のみ、事に臨みて寸毫の益無き也。予は是の點より見て世の所謂文章家の文字を厭ふもの也。其の文を美にし、其の語を壯にせむが爲に、動もすれば事を假り、情を矯む。一見欽ぶべきが如きも、幾もあらずして其の

弊に勝へざるを覺ゆ。是に反して、些の矯飾なく、單に己れの所思を忠實に現はさむことを力めたるものは、文字如何に拙きも、尙ほ真情の掬すべきものあり、以て讀む者の心を動かすに足る。猶ほ便佞にして辭令に巧なるものよりは、朴訥にして禮を解せざる野人の、事に臨みて巧を成すが如けむ。

所謂る文章家の弊は、予、漢學者もしくは漢文の素養深きものに於て特に多きを見る。本邦の文章が漢文に負ふ所多きは言ふまでもなし、隨ふて苟も文章を作らむ者の一通りの漢文に通ずるを要するは素より論なし。唯、漢文の通弊は餘りに形式的なるにあり、文法、語法等の餘りに定着せるにあり、換言すれば吾人の觀念の極めて複雑にして變化多きに應對してそれを忠實に表現せむには、餘りに大まかに、又餘りに頑固なるにあり。是れ或は漢文を操縱する能はざるが爲にして、漢文其物の罪にはあらざらむも、而も大かたの漢學者が是の弊に染まざる無きを以て見れば、普通の人にとりては、やがて漢文其物の弊なりと見むも妨げなかるべし。漢語は其の影壯重にして力あり、場合によりては缺くべからざるも、其多くは吾人の言ひ現はさむとする觀念に比べて誇大鋪張に過ぐるもの多し。是を以て作る人は始より文字

通りに解釋せらるゝを望まず、讀む者も亦始より其の間に矯飾あるを預想す。是の如くむば作者、讀者、互に虚偽を以て相交はるなり、達意を旨とする文章の第一義を去る頗る遠しと謂はざるべからず。

されば予の思ふ所を以てすれば、漢文的語句は今日現に使用せらるゝよりも遙に節減せらるゝを可とすべし。精緻なる景物の記述、或は細心なる學術上の叙論等に於て殊に其の要を見るが如し。一定の形式に投じて其の思想を行ふの風は、時に不測の危険を招くことあるべし。吾人の思想は他人の心を以て考ふる能はざるが如く、他人の文字によりて表はさるゝを得べからず。唯、自己の言葉のみ自己の思想を發表して能く遺憾なかるべし。まことの文章是に於てか成る。

予は漢語使用の節減を望むと共に、本邦古文の擬似を事とする所謂る國文家の文章にも嫌らざるふし多し。文章の種類多き、素より一律にして規約し難しと雖も、例へば王朝以前の古文辭を摸倣するが如きは、如何なる場合に於ても成功せる文章を成す所以に非ざるが如し。源氏物語は古今の名文と稱へらる、されど所謂る國學者を外にせる國民の大多數と共

に、其の妙味を解し能はざる予の如きものより見れば、晦澁冗漫の悪文字に過ぎざるのみ。古文の妙は國文學者の翫味を妨げず、たゞこれを今日に施し、擬似摸倣以て得たりとするの弊風はつとめて除去せむことを要す。今の人の思想は今の世の文字もて初めて現はし得べき也。

若し予一己の嗜好に本づきて論斷するを許さば、おしなべて今の文を學ぶものにとりて、王朝以前の古文は殆ど用ふる所なかるべき也。世人は古來の因襲に基きて、漫りに源氏物語の工妙を言ふと雖も、平家、太平記の如きは今の人の普く解し得らるべき更に工妙なる文辭には非ざるべきか。世人は僧侶の文章にはあまりに注意せざれども、例へば日蓮の遺文の如きは獨り鎌倉文學の偉觀たるのみならず、今日の人尚ほ則を取り得べきほどの名文章なりと想はるゝは如何に。是を源氏などの讀みがたく解しにくゝ、今世の趣味を去る頗る遠きに較ぶれば、文を作るもの特に留心するの價値あらむか。

是を要するに、今の文章はおしなべて文字に食傷せり、無意義、誇大鋪張の文字の多きに勝へざる也。修辭學は學者の研究にまかすべし、たゞ予は修辭の既に餘りに過ぎたるを憂ふ

る也。今の世に國語改良の聲高し、されど國文改良も亦是れに劣らざる一大問題には非ざるべき乎。將來の文章に對する予の希望一にして足らずと雖も、詮ずるところ忠實の二字に歸着すべし。文を作るもの、自己に忠實なれ、文字を以て自己の思想を拘束する勿れ。思想ありて而して文字あるを忘るゝ勿れ。須らく文字を使用すべし、決して文字に使用せられざれ。良心は道德の上の言ふべきものは。自己に忠實ならずして徒らに言綺語麗を喜ぶものは、是れやがて文藝上の良心なきもの也。是の如き僞情一點どもあらば、千萬言の大字も一紙半錢の價値無けむ。

(明治三十四年三月)

## 姉崎嘲風に與ふる書

嘲風兄足下。去年三月、君が西航の首途を横濱に送りたるの日、予は西の方嶺を踏えて駿州に入り、清見潟の海樓にやどりて離別の悶を遣りたりき。是の夜月明星稀、一灣の風露、恍として夢の如し。中宵欄に倚りて靜に君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。越えて六月、偶々官命あり、將に君を追ふて西歐に游ばむとす、發するに臨み、病俄に起りて果さず、即ち今茲陽春の候を以て程に上らむことを期しき。期に及ぶや、病の故を以て再び果さず。幾もなく三月十二日の君が書を領しぬ。其の首に謂へらく、恐らくは是の書母國に達する頃、君は既に印度洋上に浮べるならむと。あゝ予又何をか謂はむや。病軀山河に親みてより殆ど一歳、愁思徒らに繁くして風物日に荒涼たり。今や身忽忙として相移り、際遇漸やく異らむとするも、平生憂を同じうするもの、君と予と先世何の契縁かある。天涯五千里、望み茫として遙なるも、希くは尙ほこの區々の消息を傳ふるを得むか。嗚呼君よ、予は實に

感慨思念を併せて君に致さむと欲する也。

## 二

足下よ、足下の知る如く、予が生涯は書窓の裡に過ごされたり。あゝ足下よ、予は何時かで讀書子たらざるべからざる乎。予を以て是を見る、讀書は徒らに人の憂患を増すあるのみ、生を養ひ、天を樂むに於て多く爲す無き也。夫の徒らに知識を趁ふものは、猶ほ徒らに金錢を蓄ふるもの如きか、愈々得て而して愈々足らず。終始欲求の限りなきに苦みて、遂に安するところを知らざるもの、彼れと此れと何ぞ一に相似たるや。予は世の所謂る學者なるものの生涯のまことに果敢なきものなるを想はざるを得ざる也。あゝ足下よ、されど果敢なきことは他の上にのみ在らざりき、予も亦是の如き學者たらざる能はざるを如何せむや。

若し予をして恣に其の好む所に従はしめむか、願はくはかの江山に放浪して餘生を無爲の間に樂まむ。予年僅に三十有一、尙ほこの老餘の言を爲すは、人生の憂患むしる既に多きに堪へざるを覺ゆれば也。願みれば弱冠情を解してより、恨愁切りに身に逼り、興會未だ到らざるに、身世茫茫として青春早く既に暮れなんとす。つらく往を觀じ、來を想へば心潛かに

平ならず、洵に已むを得ざらむ乎。唯、世事意の如くならず、繫累よもに塞る、今に及びて四方の事に當らむとするも、時既に晚れたり。茲に病軀を挺して一生を書窓の裏に閑却せむとするもの、予に於て又如何ともするなき也。足下よ、人生の心事何ぞ夫れ一なり難きや。あ、予も亦夫の學者と共に營々として生死すべき也。

然れども足下よ、願はくば予を以て薄志弱行の徒と爲す勿れ。既に學者を以て立たむとす、不肖と雖も、聊か自ら負ふ所あり、豈徒らに先人の後蹤を追ふて匱釘補綴を是れ事とすべけむや。成敗今に於て豫じめ知り難きも、冀はくは多く意に介せざれ。男子苟も風雲の意氣あらば、天下の事深く憂ふるを須るんや。

## 三

嘲風兄足下、今の本邦の學界に於て其の最も不備なるものを擧ぐれば、日本美術史の如きは髓に其一也。足下よ、予が殘敗の生を以て斯學に致す、可ならむ乎。

試に足下の爲に近時予が遭遇したる一事例を語らむか、思ひ必ず半ばに過ぐるものあらむ。今春のことなりき、元祿美術の研究者として、予は當時の大立者たる光琳の事蹟に就て

探討するところありたりき。而して予が少からざる努力を以てして、辛やく到達し得たる結果が、予が最後に閱讀したるルイ・ゴンス氏の光琳傳に優ること甚だ過ぎざるを發見するに及びて、予は憮然として長息するを禁じ能はざりき。嗚呼ゴンス彼れ何者ぞ、身は西歐に生れて天涯に越在す、風土好尚素とより同じからず、極東の美術に就て見聞するところ略々知るべきのみ、而も尙ほ是の如し。鑑識の明、研究の精、寧ろ驚くに堪へたらすや。予が搜索し得たる光琳に關する事蹟一二にして足らずと雖も、悉く皆零碎斷片のみ、一篇の評傳として見らるべきもの、一も是れあるなし。最も驚くべく且つ怪むべきは、本邦畫人傳中最も完全なりと稱せらる、黒川氏の扶桑名畫傳の如きすら、是の元祿時代の代表的美術家の爲に一行も記するところ無きこと是れ也。顧ふに光琳は名目上法橋の僧位を有す。この書其の師本阿彌光悅を記し、其の弟乾山を收めながら、光琳自身に就て言ふところ無かりしは、蓋し一切の僧侶を度外視したる本書の、國學者的偏見に憑據せるものならむ。あ、足下よ、緇衣を纏ひ、僧侶を冠するの故を以て、明兆、雪舟の如き人物を畫人傳中より排斥するが如き美術史家は、何れの國にか其の匹を見出だし得べしとするや。予は是の一事實を以て本邦人が

美術史に關する觀念如何を推測するに足るべきを思ふ也。足下よ、今の所謂鑑賞家の多くは、予を以て見れば扶桑名畫傳の著者の更に小なるものに過ぎざるのみ。

名は即ち鑑賞家と云ふも、實は一種の骨董家、一種の好古家のみ。彼等が古書に於ける知識は洵に當今の珍とするに足る。彼等は能く時代の今古を考へ、能く流派の異同を辨じ、又能く製作の眞贋を別つ。例へば歴山大帝の乘馬の黑白を論ぜし西洋史家の如く、葛飾北齋は飲酒家なりしや否や、と云ふが如き問題は彼等が最も得意の壇場たり。然れども彼等には歴史なき也、批評なき也、人文史上の考察なき也、審美學上の研究なき也。

足下よ、足下の専門とする所の宗教哲學の上より觀察すれば、日本の佛教史の如き、今の僧侶の關知するところのものより、更に一重大の意義を有し來らむ。予は本邦の美術學者が是と同一の運命に接するの日も亦遠きに非ざるを想ふ也。足下よ、予を以て漫りに壯語するものと爲す勿れ。試に見よ、『國華』は本邦美術雜誌中の巨擘と稱せらる、而して其の批評眼の如何に幼稚なるよ。『國華』の批評家にとりては古代美術は殆ど如何なる場合に於ても犯すべからざる證據也。彼れにとりては古色は即ち賦彩の極致、簡朴は即ち技巧の理想、而

して古來の傳説は即ち批評の典據也。あゝ是の如くにして藝術批評の局に當る、婦女童幼も尙ほ是を能くせむ。想ふに『國華』記者の没鑑識の如きは深く咎むるを要せざらむ、彼れは今の所謂美術鑑賞家の一代表者に過ぎざるのみ。

予が今の美術學者に希望するところ一にして足らずと雖も、其の第一着として大に歴史的研究の精神を喚起せむことを希はざるべからず。蓋し一個の共存同業の經營する歴史は素と是れ一體たり。個人の行爲が自我の發現に外ならざる如く、國民の活動も亦國民の性格を表現せずむば已まざるべし。即ち一國民の經營する諸般の文物はそれごとく小天地的に是の國民を表現するものと見るを得む。例へば聰明なる動物學者が一個の齒片によりて、時に是の齒片の所有者たる動物の形態を想像し得るが如く、活眼ある歴史家は、一基の彫像によりて、是の彫像を産出したる國民及び時代を看破せむこと、強ちに望み難き事に非ざるべし。畢竟政治や、宗教や、文學、美術、風俗や、同一國民の活動と異りたる形式によりて表現せるものに外ならざるを以て、美術の歴史は是等政治、宗教、文學によりて説明せらるゝ如く、亦翻つて政治、宗教、文學を解釋するものならざるべからず。是の人文史的地を離れて美術

の發達を了知せむは、予を以て見れば決して望むべからざる也。

足下よ、日本の美術は、其の統一に於て、其の繼續に於て、其の美術たる價值に於て、其の他凡ての點に於て、歐洲美術と對峙して多く遜色あるものに非ざる也。埃及や、波斯や、印度や、曾て其の美術を有しき、而もそが他邦の文物に及ぼしたる影響を外にしては、今日殆ど歴史上の意義を有せざる也。支那は美術上日本の導師たりしことありしが、唐宋の盛時一度び去りてより、藝苑長へに振はず、遂に我が雪舟をして、唐土學ぶべきもの山川のみと嘆せしめたりき。今日一千年以上の儼然たる歴史を有し、尙ほ有望なる進路を將來に有するもの、渾圓球上實に我日本と歐洲とあるのみ。風土別れ、好尚同じからざるも、是の二者は世界に於ける美術發達の二大潮流を代表するものと謂ふべき也。足下よ、予が今の學術界に於て特に重きを本邦美術の上に置き、其の歴史的研究を推獎する所以のもの、決して偶然に非ざるを見るべき也。

## 四

足下よ、願はくば予を以て己れの好む所に偏するものと爲す勿れ。予は本邦美術に關し

て、今の學界の注意を喚起するところの寧ろ足らざらむを憂ふ。乞ふ、更に數言を費さしめむ乎。

今の世、アリアン民族以外に國するもの少からずと雖も、儼然として獨立國の體面と實力とを保有し、世界の一大勢力として二十世紀以後の競争場裡に馳騁し得るの望あるものは、獨り我が日本あるのみ。是を人種競争の歴史上より觀察すれば、近世の大事は、主としてアリアン、チュラニアン二民族の勢力の消長に外ならず。而して是の競争史上の敗者たるチュラニアン民族の力漸やく支へざるや、競争の部位次第に西より東に移り、今や世界の勢力は極東の分野に奔注し來りたり。是の時に當りてチュラニアン民族の文明を代表して是の競争場裡に立てるものは言ふまでもなく我が日本也。凡そ權力競争の裏面には必ず文明の競争あらざるを得ず。見來れば、印度以東、南洋以北の東半球の文明を二千年の歴史中に綜合し來りたるチュラニアン民族の最後の代表者は、實に人類の史上に於て最も重大なる地位を保てりと謂ふべき也。

予は日本の美術が是の間にありて實に稀有なる位置を有するを見る也。足下よ、印度以西

の凡ての邦國の美術が歐洲美術史の中に流注したるが如く、印度以東の凡ての邦國の美術は、間接又は直接に日本美術史を構成する勢力たらざるは無き也。希臘佛教式の健陀羅美術は、佛法の東歸と共に支那、朝鮮を経て早く既に我邦に入り來れり。大唐の藝術が天平、平安の二朝を風靡せしは言ふまでもなし。鎌倉より足利の時代に及びては、宋元の影響より遠く盛唐の餘波を復活せり。豊公征韓の役は八道の文物を黃土に委棄したりと雖も、其の繼承者たる日本の手によりて、半島の工藝永く存続せらるゝを得き。徳川時代に到りては、近くは明清の勢力あり、遠くは西洋の感化あり。下て明治維新の開國と共に、西歐の風尚痛く本邦の藝苑を動かし、本邦美術の將來に向て最も重大に、且つ最も有望なる影響を與へたるは、吾人の親しく目撃しつゝある所也。足下よ、是の如く觀來れば、日本の美術史は取も直さずチュラニアン民族の具體的文明史なり。而して政治上の日本が、チュラニアン民族最後の勢力を代表するが如く、日本の美術史は、歐洲美術史と對峙して、人類の美的活動の二天發展を表示するものと謂ふべし。足下よ、日本美術史の意義また決して淺少ならざる也。

足下先に送り來れる伯林時報によりて、予はキールに於ける獨逸帝の演説を詳知するを得

たり。其の主意の存する所は人種競争の目的を赤裸々に現示したるに外ならず。曰く、異教徒の文明は、其の程度種類の如何を問はず、遂に滅亡せざるべからず、是の目的を達するは基督教國民の天職也と。是の如き政略的詭辯は素より多く意に介するに足らざるも、今の西洋學者の多くが是と同一の見地によりて、異人種の文物を批判するの態度を取れるに到りては、實に陋隘の極と謂はざるべからず。足下よ、試に英佛獨の學者の手に成れる世界美術史と題する書籍を繙讀せよ、名は則ち世界と謂ふと雖も、實は歐洲美術史のみ。アリアン民族以外に於て吾人の有する美術史の如何なるものなるかは、彼等の殆ど全く知らざる所也。予は信ず、世界に於ける各個の民族は其の到達すべき文明に關して各々特異の理想を有すべし。是を以て人類全體の上より見る時は、或る特殊の國民、又は特殊の民族が好尚する所の特殊の理想を以て、他の國民、又は他の民族の文物を批評する唯一の標準となさむは、畢竟謬見なりと謂はざるべからず。予は又信ず、若しこの世界に人道の理想なるもの存せりとせば、そは何れの國民、又は何れの民族にも偏倚せず、あらゆる人類のあらゆる特質を包括し、調和し、玉成したる所に存すべき也。足下よ、予の見る所を以てすれば、すべての歴史



的研究は、是の見地よりして初めて至大の興會と最高の價值とを有すべし。

日本美術史の研究は、是の點より見て更に重大なる意味を有し來れるを見る。世界の文明を二分して其の一を保てる日本國民が將來人道に寄與する所のもの、素より一にして足らざらむも、而も美術は如何なる場合に於ても其の最も貴重なるものの一たるを失はざるべし。足下よ、是の如きは、予が日本美術に對して有する抱負也、信念也。而も本邦人の自ら自己を知らざるや、是の重代傳來の貴寶に關して、一も研究するところなく、遂に名譽ある文學博士末松謙澄君をして一外人アンデルソン氏の日本美術史を翻譯するの奇觀あらしめたるは、予の潛かに心外とする所也。足下以て如何となすや。

## 五

嘲風兄足下。足下東京に在るの日、時に緣日の市場を散歩せしことあらば、必ずや破れたる三味線を抱きて、哀を行人に求むる幾多の乞丐兒を路傍に見しならむ。あゝ自己の生き甲斐もなき生活を續けむが爲に、路人を樂ましめむとするは如何に悲しき境涯ぞや。時として彼等は其の技藝によりて哀を求むるの身なるをも忘れ、何時しか自己の歌曲に感動して興會

自ら禁する能はず、徐ろに行人をして其の樂みを羨ましむるものある也。あゝ足下よ、漫りに夫の乞丐兒を憐むを已めよ、予が現下の境遇また太だ是に似たるものある也。

予や誤りて文壇の人となりてより茲に六年、身世幾度びか變轉して、而も尙ほ是の惡因縁と絶つこと能はず、茲に再び評論の筆を本紙(太陽)上に執るに到りたるは、予の寧ろ恨事とする所也。凡そ評論なるもの、もと達人高士の事たり。短才寡聞予が如きもの、徒らに世を亂り人を惚はすに終らむのみ。是を過去の經驗に考ふれば、一は一非多くは我執の偏見、一時の妄念、徒らに人の詆りを受けて、身に一毫の益あるなし。今に於て當時の事を思へば、慚汗覺えず背を潤すもの少しとせざる也。而して當時自ら悟らず、文藝の批評に關して一家の識見を有せりと自信し、縦横忌憚なく其の所信を告白して、自ら其の意を得たりと爲したりき。識者は寧ろ其の穉氣を愛したらむも、予豈今に及びて其の過ちを再びするに忍びむや。然れども足下よ、忍び難きことをも忍ばざるべからざるは予が現下の境遇也。予は内外のあらゆる障害あるにも拘らず、再び身を挺して茲に評論の筆を執らざるを得ざる也。唯、際遇の人を移す、知らず識らずの間にあり。かの乞丐兒が自己の歌曲に興會して一時其の身の

衰れなる境遇を忘るゝことあるが如く、評論の筆亦時に予をして其の業を樂ましむることあるべき乎。予は今に及びて是の如き時の速に來らむことを祈るの外なき也。

六

足下よ、既に評論家として立ちたる予は、評論家たるの任務を盡すに於て自ら遺憾なからむことを期せざるべからず。所謂る評論家の任務とは何ぞや。通常世人の解するところは概ね左の如し。

第一、文藝に關する理論的知識を一般社會に播布するは文藝批評家の任務なり。文藝の事、時に幽玄高遠、多年の研究を待て始めて了得するもの少からず、名品大作に於て特に是を見る。若し批評家の解説なかりせば、一般社會は永く其の光明に接するの期なからむ。ラスキンは公衆を無知なりと罵りたるの故を以て、數々不遜の詆りを受けしと雖も、英國の社會は藝術の教育に於て永く彼れを徳とせざるべからず。批評家は須らく一般社會の無學を豫想すべき也。

第二、現代の作家に對しては、批評家は須らく兩様の態度を取らざるべからず。其の前途有望にして、將來文藝の發達に裨益する所あるべしと想像せらるゝものは、無知の俗論に反して宜しく回護獎勵の道を取るべく、是に反して一時の僥倖によりて虛名を博したる偽作家は、宜しく是を貶黜して、社會文藝趣味の崩落を未然に防がざるべからず。評論の筆には兩面の刃あり、己れの信ずる所を執りて假借する所なかるべし。

第三、既に社會の教育者を以て自ら任ずる批評家は、時に社會の好尚に反對して不人望なる眞理を吐露するの勇氣なかるべからず。批評とは畢竟自己の理想に違ふて事物を誘導し、若しくは改造するの謂なり。一分自己の所信に稱はざらむか、彼れにありては一の戦あらむのみ。自己の理想を妨ぐるもの、彼れにとりては即ち是れ眞理の敵なれば也。是を以て文壇の俗論に歡迎せらるゝは、眞正の批評家に於て極めて稀に見るところ、彼れは時に一世を敵として戦ふの否塞に陥ることすらある也。

第四、彼れは文藝に關する一切の知識を有せむことを要す。然かも文藝の事、古今を貫き、東西に涉りて際涯無し、其の一切に通曉せむは素より望むべからざる事に屬す。是を以て批評家の任務おのづから一業一門に偏倚する、亦已むを得ざらむ乎。

第五、同情の範圍を擴張するは、文藝批評家の任務を果すべき修養として缺くべからざる也。是の如き修養が意志の力によりて如何なる點まで成功し得らるべきかは、各人天賦の性格によりてのみ決せらるべきを以て、素と言論の限りに非ずと雖も、而も同情力の多少が、多くの場合に於て批評の運動を左右するの力あるは争ふべからざる事實なりとす。蓋し文藝の事概ね人間の感情に基く、是の感情に同應するの力無くむば、批評の第一義は既に失はれたりと謂はざるべからず。夫の自己の狹隘なる人格に籠居して、一切を是非せむとするは、是の勢力如何は暫く措き、文藝社會にとりて最も危険なる批評家と謂ふべき也。

第六、彼れは如何なる場合にも飽くまで自己に忠實ならざるべからず。彼れの公言する所のものは彼れ自身の眞に思ひ、眞に感じたる所のものならざるべからず。是を以て彼れは權勢に阿ねる能はず、威武に屈する能はず、情誼に惑はざる、能はず、直前邁往、たゞ其の所信を執りて毫も動くこと無かるべし。既に己れに忠なるもの、亦己れと共に進止せざるを得ず、是を以て彼れは其の思想好尚の變遷に遇へば、輒ち是を公言して憚ること無かるべし。夫の反覆の詆りを受けむことを恐れて、終始先言に拘泥し、自ら知つて其の非を遂ぐるもの

は、外より見て定見ある者の如きも、實は既に虚言者のみ、眞正なる批評家の爲すべき所に非ざる也。蓋し人の一生は發達の連鎖也。發達は變化を意味し、變化は時に矛盾を意味す、夫の矛盾を恐れて緘黙する者は、死するまで發言の機會無かるべし。個性の發展に基ける思想感情の轉移は寧ろ必然の經過のみ、決して反覆を以て批難せらるべきに非ざる也。

足下よ、予が文藝批評家の任務に就て解するところ略々是の如し。然れども漫りに理論を列ぬるは何人か是を能くせざらむ、唯々問題は予の如きもの果して是の如き任務に堪へ得べきや否やにあり。足下よ、予不明にして自ら知らずと雖も、遂に惑ひなきを得ざる也。

## 七

先に挙げたる六箇條の任務は、高才達識の人と雖も尙ほ是を難むすべし、下愚移らざる予が如きもの、如何ぞ企て及ぶを得むや。況や、設令ひ予をして幸に學博、識高からしむるも、この個性の動かし難きもの、遂に所謂批評家の本分と相容れざるものあるを如何せむや。

足下の知る如く、予は矛盾の人也、煩悶の人也。予が今日までの短き生涯は、實に是の矛盾煩悶の中に過ごされたり。予は是の苦痛を解脱せむが爲に予の爲し得べかりし殆ど總ての

方法を盡したり、然れども其の効果として見るべきもの一もあらざりき。予が得たる些細の知識は、予に光明を齎らさずして、却て暗黒を與へたり。予は意志の鍛錬によりて是の疑案を解決せむと努めしが、予が感情は是の目的に對して餘りに強かりき。予は幾度か思ひき、寧ろ一切の欲求を解放して、其の爲すがまゝにあらしめむ、我れに於て其の獨を樂しむ、亦可ならずやと。然れども吾が心流石に疚しかりき。畢竟悟らむが爲には吾が情、強きに過ぎ、迷はむが爲には吾が知、明なるに過ぐ、予は是の中間に佇徊して、遂に其の適歸する所を知らざる也。足下よ、悪夢に魘はれたる夜は眠らざるに等し、予は實に是の十數年の歲月をかかる煩悶の間に過ごし、人生の負荷、寧ろ其の重きに堪へざるを覺えたり。而も予は幸に絶望せず、歎嗟せず、何時かは光明の天地に遭遇するの日あるべきを信じて、靜に其の修養に勉めたりき。今や齡既に而立に及びて青春將に暮れなむとす、而して矛盾と煩悶と、依然として元の如き也。あゝ足下よ、是を如何かすべき。

今や再び茲に評論の筆を執らむとするの予は實に是の如き人たる也。社會は是の如き人より如何なる批評を期待し得べしとするや。凡そ批評家は學殖と共に常識無かるべからず、其

の心能く人を容れ、物に同じ、八面玲瓏、滯滞する所あるべからず。其の人物は須らくベーコンの如く、アヂソンの如く、ヘヅリットの如く、ハマートンの如く、レッシングの如く、マシユー・アーノルドの如く、坪内逍遙氏の如かるべし。然るに予は詩人として沙翁よりは寧ろバイロンを取り、ゲーテより寧ろハイネを好み、批評家としては、レッシングよりは寧ろシヨベンハウエルを高しとし、テインよりは寧ろレックを大なりとす。足下よ、人は其の性の近き所に従ふ、是の如き好尚を有するの予が、批評家としての態度は果して爾かく信賴すべきものなりや。世人恐らくは足下と共に是を危まむ。觀來れば予と所謂る批評家と相距ること頗る遠しと謂ふべし。足下よ、是を如何かすべき。

然らば則ち予に一言の辯なき乎。曰く否。予は矛盾の人也、煩悶の人也、而して又我執の人也、主觀の人也。是の如き人、當代の文藝に對して毫も爲すある能はざる乎。曰く必ずしも然らざらむ。たゞ其の爲す所の所謂る批評家と太だ相近からざらむのみ。足下乞ふ、少しく忍で予の言ふ所を聞かむ乎。

## 八

足下よ、所謂る批評家の任務は既に是を説きぬ。然れども茲に人あり、吾れは批評に就て何の考ふる所無し、吾れは唯、吾が好む所に從て是非の判断を下すのみと言ふものあらば、予は彼れが發言を否定すべき何等の理由をも有せざる也。足下よ、予は是の如くにして文壇に立つ能はざるべき乎。

今の人動もすれば曰く、批評は客觀的ならざるべからず、一個人の習癖を擺脫したる没理想のものならざるべからずと。其の意極めて分明。唯、是の事あるが爲め漫りに主觀的立言を貶せざるべからずとの理由は、予の認むる能はざる所也。足下よ、若し文藝の批評に於て客觀の極致を求むれば、其の定着する所は、遂にテインが所謂る歴史論に終らむのみ。「藝術批評家として、吾が唯一の義務は事實を表示して、是の如き事實が如何にして生起し來れるかを説明するにあり。科學は一切の事物に對して平等の慈眼を有す、憎悪なく褒貶なく、是非なき也」。是の如きは實にテインが批評の主義なりき。既に理想を没す、是れ好悪なき也、既に好悪を絶す、何處にか審美の判断ある、餘すところは一の記實あるのみ、一の歴史あるのみ。

み。批評上、客觀主義を尙ぶものは勢ひ茲に至らざるを得ざるべし。足下よ、是の如きは標準科學に臨むに記述科學の通則を以てするもの、謬戾言ふまでも無からむ也。

然らば則ち人道に對して廣く同情を表するを以て客觀主義と解すべき乎。是れはた程度問題のみ。テインが所謂る平等の慈眼を以て一切に對せざる限りは、吾人の表示し得る同情は、少くとも吾人自らの個人性によりて制限せられざるを得ざるべし。所謂る客觀主義は如何なる程度までの制限を許容せむとするや、誰か是の如き間に答へ得べきものぞ。畢竟客觀主義なるもの、予を以て見れば殆ど無意義に近し。若し何等かの意義ありとすれば、それは多數主義、人氣取主義に外ならざらむのみ。夫の務めて好悪の情を蘊し、褒貶の意を藏し、可もなく、不可もなく平板無爲の間に成るべく多數の満足を失はざらむとするもの、寧ろ陋ならずとせむや。大に罵る能はざるものは、亦大に褒むる能はざる也。文藝の發達は趣味の問題也、好尚の問題也、吾人の力行に待つあるもの殊に多しとす。夫の客觀主義なるもの、遂に歴史主義たる能はずして、既に一分の是非を許さば、何が故に更に十分の褒貶を憚るや。抑、何が故に所謂る主觀主義、理想主義を嫌ふこと、しかく蛇蝎の如く甚しきや。

主観主義は他方より見て個人主義也。而して文藝の史上に於て最も強大なる勢力を有せしものを實に是の個人主義と爲す。人動もすれば沙翁の名を擧げて客観詩人の勢力を代表せしめむとす、吾人必らずしも是を拒まざるべし。唯沙翁の大を許さば何故に同時にバイロンの大を許す能はざる乎。沙翁の如きは寧ろ千歳稀有の一人のみ、學で達し得べきに非ず、彼れに於て事例を援引せむとするは、寧ろ自ら計らざるのみ。翻てかのバーンスに見よ、シレーに見よ、若しくは彼のビョルネ、ハイネに見よ、『少年獨逸』の基礎は實に是等主観詩人の個人主義に基けるに非ずや。テニソン、テージョース等の名は大陸に於ては殆ど無意義のみ。而もバイロンの盛名は現にチュートン民族を振盪しつゝあるにあらずや。平板和樂なるロングフェローは北米の國民詩人なりと稱せられき。然れどもホイットマンの勢力が如何に是を壓倒したるかを見よ。是を現代の詩人に見れば、ニーチエ、イブゼン、トルストイ等の個人主義が、殆ど中部歐羅巴の文壇を風靡しつゝあるは世人の熟知する所の事實也。人或は其の存續如何を疑はむ。然れども強大なる個人の意力の現はるゝ所、其處には必らず永遠の生命あり。見よ、ムーアによりてアナクレオンを味ひたる英吉利人は、更にオマイル、カイ

アムを波斯の古墳より起さずむば已まざるに非ずや。

更に是を批評家に見む乎、予は主観主義、理想主義の上に立てる批評家によりて、最も強大なる勢力の發現せられたるを見る也。カーライルを見よ、彼れの説くところ、所謂穩健着實の境を去ること頗る遠く、其の矯激なる點に於て、其の偏僻ある點に於て、客観主義者流を欽ばすべき何等の長所を備へざりしにも拘らず、其の勢力の如何に大なりしよ。彼れの勢力は實に英國人が永遠に感謝すべき所のものたる也。ベーコンの如き、マコーレーの如き、若しくはミルの如きは、アングロサクソンの平明なる常識を代表したるに過ぎずと雖も、カーライルに到りては實に破天荒の才なりき。又夫のロマンチズムの諸文豪に見よ、凡そ文藝の歴史中に於て、詩人の勢力一代の氣運を搖かしたる是の如きは他に多く類例を見ざる所、而して彼等の多くは何れも最も急激なる主観的批評家なりし也。チークは詩人として、シレーゲルは理論家として、シライエルマッヘルは説法者として、各々其の理想の爲に戦ひたり。彼等の理想は畢竟個人の神聖を認むる所にあり。彼等は、世に創作の權能あるもの、唯不羈獨立、天才豊富なる『我』のみなりと爲し、一切の法則、彼れによりて生ぜらるゝとなす。

即ち是れフ・ヒテの主觀的唯心論に加ふるに更に神祕的性質を以てしたるもの、遙にスチル  
 ネル、ニーチエ等が個人主義の前驅として見るべきもの也。是の如くにして上はフ・ヒテよ  
 り下はハイネに到るまで、五十年間の歐洲文藝界は、佛蘭西に於ける政治的革命と同一の機  
 運を経験したりし也。

兎にも角にも、文藝界に於ける主觀主義の勢力が遙に客觀主義に勝れるものありたるは、  
 予を以て見れば炳焉たる歴史上の事實也。然れども、是の如き歴史上の事實あるの故を以て、  
 一切の主觀主義を擧げて是を推獎するは予の意に非ざる也。夫の無學無識の徒、一時の好惡  
 に任せて漫りに褒貶を弄するもの、今の時寧ろ其多きに過ぐ、予は決して彼等に黨同するも  
 のに非ざる也。往年佛蘭西にブルードンと稱する美術批評家あり、「美術の原理及び其社會  
 的運命」と題する一書を著はして當時の藝術界を搖撼せしことありき。彼れ公言して曰へら  
 く、予は繪畫、彫刻、又は音樂に就て何の研究し若しくは自得する所なし、是の點に於ては、  
 予は最大多數の俗人と毫も異なる所無し。然れども是等の俗人は其の好惡を宣言し、其の意  
 志を以て美術家を強ゆるの權能あるもの也。彼等の判斷は必ずしも正確ならざるべく、彼等

の趣味は時に多大の醇化を要すべし、然れども彼等の宣言は尙ほ至高の判決也。彼等は如何  
 なる場合に於ても下の如く公言し得。美術家よ、吾等は敢て命令す、吾等の命令に従ふは爾  
 の任務也、若し爾の美術にして吾等の所望に副はざらむか、其の作の優劣如何を問はず、吾  
 等は是を擯斥すべし。——ブルードンは是の如き方法を以て藝術批判の原則となし、公々然  
 として當時の藝苑を横行せりき。予は茲に彼が所謂の原則の誤謬を指摘するの邊なし、唯、  
 極端なる主觀的批評主義の一事例として讀者の注意を喚起するに止めむ。主觀主義も是に至  
 りて寧ろ其の弊に勝へざるを見る也。

是を要するに、主觀主義には一定の規準無し、其の勝劣は唯、是を提唱する人物の如何に  
 よりて分るべきのみ。一定の規準を立し、萬人をして依據する所あらしむるを得ざるは、髓  
 に主觀主義の一缺點也。而も文字以外、繩墨以上、個人天來の理想を發揮して、清新なる生  
 命を藝術界に注入するの一事は、亦髓に主觀主義の一長所也。予は再び言はむ、主觀主義其  
 物には何等の定價なし、唯是を唱ふるの人によりて初めて價值を有し來る、超人を理想と  
 する個人主義は、ニーチエの人格によりて初めて成立すべく、意志の發展を極致とする個人

主義は、イブゼンの個性を待ちて初めて意義あり。一度び偉大なる人格の強烈なる意志によりて傳道せられたる主觀主義は、時に一世の民心を把住して所謂時代の精神を作ることある也。

嘲風兄足下よ、予は文藝上の主觀主義、もしくは理想主義に對して、實に是の如き抱負を有する也。予が是の矛盾と煩悶と我執と偏癖とを以てして、尙ほ且つ評論の筆を取らむと擬するもの、足下予が意を諒とせむ乎、又は其の愚直自ら計らざるを笑はむ乎。

## 九

嘲風兄足下、予は餘りに空論に走りたるが如し。然れども足下よ、予は今に於て特に足下に語るべき多くの事實を有せざるを如何せむや。足下の近書、予に要むるに本邦文壇の現状を報すべきを以てせり、而も予をして強ひて今の文壇を語らしむる、是れ殆ど皆無を語らしむるに等し。足下よ、予が答は兩言にして盡すべし。曰く、今の文壇の狀勢、足下が一年前に見たるところと、毫も異らずと。

足下よ、本年一月の本誌上「太陽」に掲けたる「文明批評家としての文學者」と題せる拙論

は、足下既に一讀の榮を給ひしならむ。予は是の論文に於て主として今の我が小説家を警醒せり。十九世紀末の一大思潮たる個人主義の勢力を代表せるもの實に三四の文豪詩人に外ならざること、隨て文學藝術の力、時に科學哲學に幾倍するものあること、隨て文藝の士が文明の批評家として有すべき信念抱負の極めて遠大なるべきこと、是等の事項に關し予は今我が邦小説家に對して愷切なる注意を與へたりき。予の意が如何ばかり我が小説家に解せられしかは審ならずと雖も、最も明なる事實は彼等がそれを喜ばざりしこと也。如何に自然の徑行なるよ。彼等自ら信じて名譽とせる所のもの、予はすべて是を虛榮なりと嘲れり。彼等自ら信じて文學者の本分を盡せりとせる所のもの、予は指して兒戲に均しと罵れり。予は今作家の真相が依然たる舊世界の戯作者なるを指摘し、是の戯作者氣質にして擺脫せられざる限りは文藝界の前途唯、闇黒あるのみと激語せり。足下よ、夫の茫茫焉として兒女童幼の喝采の中に詩神の桂冠を夢みつゝある彼等が、是の如き言を喜ばざるは極めて自然の事ならずや。然れども予は初めより今の多くの作家を以て予の言に警醒せられ得べきものと思はざりき。而も能はざるを知りて尙ほこの侃諤を敢てせしむるものは、後に來るべき多望なる青年



文學者の爲に聊か先轍の戒を遺さむが爲なりき。足下よ、去るものをして速に去らしめよ、新教育と新文明と新理想との間に保育せられたる青年文學者の場に上るに非ざれば、文壇の事殆ど絶望のみ。其の出處に見、其の經歷に見、其の修養に見て、今の多くの作家は到底新時代の福音を傳へべきものに非ざる也。

足下よ、予は到頭文壇の悲觀者に終らざるべからざる乎。頃日、足下送る所のズーデルマンの『エーレ』を読み、遙に獨逸の劇界を想望すれば、神往殆ど禁ぜざるものあり。顧みて郷國の佳信、一も足下に傳ふべきものなきを思へば、恨何ぞ堪ゆべけむや。

十

足下よ。藝苑の落莫是の如きを致したるは、素より時勢也。而も予は今思想界の無趣味、沒理想、實に是が近因たるを思はざるを得ず。願はくば卑見を致して足下の教を乞はむ。足下よ、最近數年間に於ける本邦思想界の趨勢が倫理的、教育的に傾きつゝあるは争ふべからざる事實也。文科大學が年々出すところの卒業生中、其の最多數を占むるものの一は常に倫理、教育の學士也。精神科學の研究を目的とする會合又は團體中に於て最も多數を占むる

も亦常に倫理、教育の學會也。新刊雜誌、著譯書に就て見るも、倫理、教育に関するもの最も多きに居る。夏期講習會に於て村夫子の間に最も歡迎せらるゝものも亦常に倫理、教育の講師也。倫理なる哉、教育なる哉、今の本邦思想界は倫理と教育とを措いて、一日も存立し難きものの如し。足下よ、是れ果して何の現象ぞ。

本邦道德の頹廢は吾人の等しく憂とする所也。其の救済の目的を以て起りたる倫理、教育に関する研究及び運動は誰か是を歡迎せざらむや。方今倫理、教育の學者、運動家、幾百千人ありとするも、予は是等の人々に向て憂國の士たるを拒むものに非ざる也。只予を以て是を見る、彼等の所謂倫理、所謂教育の餘りに偏狹に失する無からむや。角を矯めて牛を殺すは痴人の事たり。予は彼等が憂國慨世の美名の下に、是の痴人たらざること希はざるを得ず。

予を以て見れば、彼等の多くは倫理、教育が人生の爲に存するものなるを遺却して、却て彼等の所謂倫理と教育とを以て人生を律せむとするもの如し。彼等が倫理、教育の理想を説いて村夫子に示す所のもの、甚だ鹿爪らしからざるに非ず、唯疑ふ、彼等自らは如何

ばかり人生を解し得たりとするや。宗教の冥想なきものは、人生を解すべからず、文藝の趣味なきものは、人生を解すべからざる也。一枝の野花を以てソロモンの榮華よりも大なりとするの消息を了するものに非ざれば、人生を解すべからざる也。彼れは歴史に於て無数の自己を認めざるべからず、彼れは哲學科學が吾人に訓へ得る所のものよりも、人生なるものの意義更に高く且つ遠きものなるを悟らざるべからず。一言すれば、彼れは最も完全なる意味に於て、「人」たることを要する也。是の如き人にして初めて倫理と教育とを語るべし、何となれば倫理と云ひ、教育と云ふ、畢竟人生を解釋して其の理想を現示するものに外ならざれば也。

足下よ、現今我邦に於て所謂教育家、倫理學者の多く如何なる種類の人なるかは、足下既に知了せる所ならん。彼等は人生の事すべて哲學上の冷刻なる思索によりて解釋し得らるべしと信せる也。彼等は五六の西洋倫理書の素讀によりて、人生の理想輒ち解し得たりと爲し、茲に學說の異動を辯じ、社會の進化を説き、個人と國家との關係を明にし、更に將來の道德に關して論斷するところ、人をして耳聞目睹の感あらしむ。彼等は是を以て自得の眞理となし、論文に著書に、到るところ其の説を公告し、工業家に遇へば則ち工業道德を論じ、

商業家に遇へば則ち商業道德を説き、其の狀恰も一切人生の指針、藏めて是の胸に在りと爲すもの如し。あ、足下よ、彼等の多くは實に是の如き徒なるのみ、何ぞ其の云爲の偏狹、固陋、乾燥無味なるを怪まむや。蓋し彼等の所謂の道德は極めて簡明なるのみ。是の多面多趣なる大いなる人生より一切の宗教を省き、一切の文藝を去り、一切の趣味を卸け、一切の理想を没し、餘す所のもの即ち道德なりとする也。其の村學究的、道學先生的なる、寧ろ當然のみ。

足下よ、予は茲に道德の價値を詳論するの違なきを憾とす。唯予の信する所を以てすれば、道德全能主義は由來東洋民族の痼疾なるが如し。吾人自ら製作したる道德を全能なりと妄信するの日は、即ち是れ方便主義、偽善主義の勝利を得たるの日也。予は想ふ、道德全能主義の自繩自縛に過ぎざるを認め、道德の支配者が其の根柢に於て個人に外ならざることを明にし、更に人間本然の要求を無視するものは如何なる場合に於ても人生の目的を沮害するものなることを痛切に覺悟するは、あらゆる道德の根本たるべし。是の根本に對する覺悟にして誤らむか、寧ろ道德なきを可なりとせむ。

足下よ、今の日本の社會は舊道德の過渡期に際す。是れ從來久しく方便主義の桎梏に苦みたる吾人が、大に其の本然の要求を發言すべき好時機に非ずして何ぞや。彼の村學究と道學先生と、果して何爲るものぞ。何を苦みてか其の煩瑣、冷淡、無趣味、沒理想なる彼等が所謂道德主義を以て吾人を累はさむとする。予は今の時に於て道學先生の倫理運動よりは寧ろロマンチズムの勃興を希望せむ。庶幾くは我が思想界の面目、爲めに一新せらるゝを得むか。

然れども足下よ、悲しい哉、是の如き希望はながく現實せらるゝとき無かるべし。道學先生は依然として其の所謂の道德を講ずべく、村學究は舊によりて其の所謂の教育に當るべく、而して社會は彼等の影響によりて益々其の煩瑣と冷淡と無趣味と沒理想とを加ふべき也。嗚呼足下よ、薔薇花は沙漠に咲かざるなり、本邦文藝の前途亦遠い哉。

十一

嘲風兄足下、予は未だ言はむと欲する所の半ばをだも言はざる也。唯、紙幅限りあり、更に後來を期せむ。予、近來文辭に遠かりてより、平生の惡文、更に甚しきを加ふ、足下を累

泣  
欲  
得  
人

はす實に大なりと謂ふべし。晚翠兄近日西歐に遊ばむとす、足下と相見の日、談若し予が事に及ばば、幸に日本湘南の海涯に、病軀を抱いて舊友を憶ふものあるを忘るゝ勿れ。是の文を草するの夕、海靜かに風和らぎ、伊豆半島の夕照、恰も紅を流せるが如し。あゝ舊知の山河、亦新粧を呈し來る、人生獨り何ぞ舊によりて落莫たる。時下北歐の風物恐らくは人に佳ならず、幸に加餐せよ、頓首。

(明治三十四年五月)

## 現代文章私見

## 一 序 言

先に、予は作文に關する私見の一端を述べたりき。頃日、讀者の一人書を寄せて謂へらく、高論は則ち了し畢むぬ、たゞ後進の子弟、法を現代の文章に求めむと欲せば、それ何人かを師とすべきと。けに理なる問なり。想ふに本誌の讀者中、是れと同一の疑惑を抱けるもの尠からざるべし。即ちこゝに私信に答ふるに開書を以てす、事必ずしも徒爾に屬せざらむを信する也。

然れども人各々見る所あり、吾れを以て直ちに他を律せむは抑々危し、況むや事文藝の嗜好に屬し、關はるところ皆悉く現代の人、加ふるに知交亦其の半ばに居る、一是一非、予に於て必ずしも容易の業に非ざる也。願はくは讀むもの、予が言を以て直ちに他を評價せるものと爲すなく、たゞ暫く其の好む所に従ふものと見て可也。

## 二 雪嶺、蘇峰、及び矧川

今の青年子弟の文を稱するもの、曰く雪嶺、曰く蘇峰、曰く矧川。今の時に於て文名を青年者流の間に擅にしたるもの、蓋しこの三人に及ぶもの無からむ。予は先づこの三人に就いて見る所を述べべし。

雪嶺の文素と漢文より來る。是を以て法度の備はれる、邊幅の整へる、略々漢文の體を失はざるもの如し。成語を恒例し、典故を臚列するところ、往々其の弊に勝へず、讀む人をして徒らに拮据、教牙の感を起さしむるもの無きにも非すと雖も、森嚴の中おのづから洒脱あり、重厚の間時に奇矯あり、若し夫れ一氣乘じ來れば、才思空湧、論鋒犀利、筆端疑ふらくは風雨を捲き來る。而も奔放の中、檢則あり、縦横意の如くならざる無くして、而して章句の法尙ほ嚴として存するを見る、喻は駿馬の急坂を下るが如けむ。疾驅飛ぶが如しと雖も、四蹄石に着く處、歩々力あり。彼の氣焰大に昂りては輒ち散漫雜糅の弊に陥るものとおのづから其の撰を異にす。是れ雪嶺の文の學び易からざる所也。

蘇峰の文は才子の文也。一介無名の書生にして忽ち天下の文體を風靡したるもの、奇才に非ずむは爲し能はざる所也。『將來の日本』の一書、今日より見れば必ずしも珍とするに足

らずと雖も、十五年前の當時にありては、眞に破天荒の文字なりし也。爾來、蘇峰の文は時と共に進歩し、其の冗漫は漸く簡勁となり、其の浮誇は漸く沈重となり、其の穉氣は漸く老蒼となりたれども、畢竟依然として才子の文也。文品何となく輕薄にして篤厚の風に乏しく、ま、平板の思想を飾るに造語用句の技巧を以てするところ、識者潛かに是を惜む。是を以て理到り意徹するに、其文未だ能く人を動かすに足らず、蓋し情に於て迫らざる所あれば也。

今蘇峰の文を以て雪嶺の文に比せむか、彼れは理に長じ、此れは氣に勝つ。彼れには觀察の奇警あれども、風雲の意味に乏しく、此れには氣節の高潔あれども、理義の徹底は則ち未だし。彼れは常識に基くを以て動もすれば平板に陥り、此れは意氣を尙ぶを以て往々奇矯に走る。見れば、二者の文、畢竟二者の性格に外ならざる也。

蓋し雪嶺は氣節の士也、蘇峰は功利の人也。昔者錢虞山、才富み學博く、名聲噴々として一時の文柄を操りき。然れども彼れ身は勝國の大臣を以て新朝の官爵を受け、而して外節士に附いて却て口舌を以て人を欺かむとせりき、是を以て遂に後世の指斥する所となる。想ふに蘇峰の進止亦た虞山に似たるころなしとせず、是れ予輩の潛かに彼れが爲に悲む所也。

蓋し文を論ずるに人を以てする、必ずしも當れりとせず、唯其人によりて其文を品するに及びて、情偽是非、更に一段の分明を加ふるものあり、是れ節行の亦た文士に重すべき所なるか。雪嶺は一寒士、十數年來名利の外に立ちて偏に其の名節を砥礪す。人物文章共に傑然として重きを爲す、又偶然に非ざる也。

然りと雖も、予は必ずしも雪嶺を揚げて蘇峰を貶せむと欲するものに非ず。人各々長ずる所あり、一是一非、尙ほ盡さざる所あるを見る。蘇峰は常識に明にして、觀察の才あり、是を以て新聞記者としては當代の第一人と稱するも、予決して其の過褒に非ざるを信ずる也。

今の時、都下大小の新紙無慮二十有餘、其の記者として多少の名あるもの亦少しとせず。然れども、彼等の多くは一業一門の記者たるなり。政論に巧なるものは是れあり、法律經濟に精しきものも是れあり、教育、文藝、宗教に通ぜるもの、社會問題に明なるもの、各々其人に乏しからず。而も、是等各方面を包括して等しくインテレストを有し、是に關する意見を具體的に發表し得るものは、今の世に於て一蘇峰あるのみ。是の點より見れば、彼れは天成的新聞記者なりと謂ふべし。是を雪嶺の議論の往々迂遠にして時務に適せざるに比すれ

ば、寧ろ同日にして論すべからざるを覺ゆ。

若し夫れ矧川に到りては、予は寧ろ彼れの文名の如何にして去かく盛大なりしかを怪まむと欲する也。彼れが著『南洋時事』は、蘇峰が『將來の日本』に次で尤も多く青年に愛讀せられたる書籍なりき。然れども今にして是を見る、果して何の奇かある。雜誌『日本人』載する所の彼れの論文の如きも、今にして考ふれば、桂月、天隨の、一輩に劣ること數等のみに非ざりし也。『日本風景論』は、慥に彼れが獨得の著書、着想の奇警なるもの無きにしも非ざれども、素より蘇峰、雪嶺の文字と並び稱せらるべき價值あるものに非ず。而して近年讀賣紙上に間、掲ぐる所の地理紀行の文章の如きは、文情小品更に下落せるを見る。概して言ふ時は、矧川の文、理徹せず、情迫らず、瀟灑は則ち是れあるも、大抵散漫の詆りを免れず、動もすれば瓦礫雜投、その醇駁に勝へず、是に於て推塚の弊あり、裝飾の弊あり、穉氣紛として近くべからざるに到る。畢竟彼れが文の如きもの、今日斗を以て量るべし。青年者流が今日尙ほ特に彼れを稱する所以のもの、果して那邊に存するか、予の解する能はざる所也。

三 政論家の文章

雪嶺、蘇峯の外、今の新聞記者中、文名あるもの尠からず。陸羯南、朝比奈知泉の如きは蓋し其の尤なるもの也。

羯南の文、人をして呂東萊の時文を聯想せしむ。文路暢達、毫も窘促の態を留めず、漢文の格ありて而して古ならず、時文の理ありて而して今ならず、おのづから一格を成す。語嚴肅、意悠揚、例へば名將三軍を指揮して平野に戦ふが如し。其の態度の正々堂々たる、現代政論家中稀に見る所なり。唯其の變に臨みて迫らず、機に應じて移らざるや、往々にして單調平板の弊あるを免れず。是を以て法言懿則は則ち聞くべきも、辯難攻撃は則ち未だし。是を雪嶺に比すれば、謹嚴は則ち過ぎて、洒脱は則ち及ばず、沈鬱は則ち餘りありて、飛動は則ち足らず。若し夫れ窮通開閉の機變に應じて、出沒變幻の奇工を弄するが如きは、羯南遂に雪嶺の敵に非ず。

知泉の文は辯難攻撃に長ずるを以て著はる。其の理を構ふる精核、其の論を立つる嚴峻、縱横博辨、毫も缺隙を留めず。其の敵に接するや、冷酷にして一步も假借するところなく、其の勢に乗するや、千乘萬騎の奔馳するが如く、英氣颯爽、傍ら人無きが如し。蓋し朝才也。

た、知泉の文、刑名理法に是れ走りて、往々強辯附會の嫌あり、是を以て文意窘迫、人をし  
て面を背けしむるもの無きに非ず。畢竟嚴酷に過ぎて肅穆の風を缺く、理は則ち争ひ得べ  
むも、情は則ち動かし難からむ。彼れが文を評して戰國策士の文と謂ふもの、蓋し大過な  
るべき也。

羯南、知泉の外、沼南あり、涙香あり、春汀あり、石川幹明氏あり、池邊吉太郎氏あり。  
何れも新聞記者中の能文家也。

沼南の文は猶ほ其の辯の如きか。論理精密、文字平明、奇構なく、奇趣なく、混々として  
些の停滞を見ず、理究まり意達して而して後已む。乾燥無味の嫌無きに非ずと雖も、亦一種  
の異材たるを失はずと謂ふべし。

涙香の文は人多く知らざるもの如し。而も其の文の暢達奇矯なる、今の新聞記者中、多  
く其の倫を見ざる所也。彼れが文、語句に於て整はざる所ありと雖も、委曲周匝、能く其の  
言はむと欲する所を言ふ。夫の空文虚辭を排列して遂に無意義の文章を作爲するものと同日  
の論に非ざる也。加ふるに論理精明、文に一種の奇構あり、常に讀者の注意を喚起して卒讀

を覺えざらしむ。唯惜むらくは、達意を旨として修辭を力めず、是を以て文品少しく野鄙な  
るを免れざることを。

春汀は人物評を以て其の獨擅となす。其の月旦は悉く現代の人物に關するを以て、其の言  
を婉にし、其の辭を微にし、力めて鋒鋷を露はさざらむとするところ、尤も學び易からずと  
なす。加ふるに其の文悠揚にして迫らず、靄然として情の掬すべきものあり、夫の奇怪自ら  
悦ぶものに較ぶれば文品遙かに高し、蓋し時文の最も正體に近きもの乎。春汀近時報知社に  
入りて其の論説を擔當す、而も太陽載する所の月旦評に較ぶれば殆ど別人の手に成れるが如  
し。彼れが本領此れに在りて彼れにあらざるを見るべき也。

石川幹明氏は時事新報の記者也。彼れは巨人福澤諭吉氏の背後に潛みしを以て、其の名殆  
ど全く顯はれずと雖も、近年時事の論説欄に表はる、文字は、概ね此の人の手に成れりと云  
ふ。其の文、平明和樂、兒女翁嫗も尙ほ是を解し得べし。理に偏せず、情に走らず、一に常識  
上より打算し、諄々として人に接す、所謂る福澤流の最も純粹なるもの也。所謂る福澤流の  
文章は文字の奇なく、章句の工なく、たゞありのまゝの事理をありのまゝに言ひ表はすのみ。

是を以て理通ぜざるなく意貫かざる無し、而して其の影響は實に普く國民の上下に亘る。かの所謂る文章家の文字が、小數によりて既味せらるゝに較ぶれば其の勢力の大小、日を同じうして語るべからざる也。

池邊吉太郎氏は東京朝日の主筆にして、其の往年佛京巴里にあるや、鐵昆崙の名を以て文名を日本新聞紙上に轟かせし人也。人は謂ふ、往年の文章、今の氏に於て認むべからずと、予を以て見れば則ち然らず。現時の東京朝日の論説は、都下の如何なる新聞紙に對するも、決して遜色無かるべき也。氏の文字雪嶺の奇峭なく、蘇峰の才思なく、羯南の儀容なく、知泉の精悍なしと雖も、意眞にして語朴、邊幅を飾らずして氣格おのづから老蒼なるもの、氏に於て獨り是れを見る。今の文を言ふもの、かの四人を説いて而して池邊氏に及ばず、區々たる文名、素より氏に於て増減するところ無かるべきも、而も世評の没鑑識は深く遺憾とすべき也。

以上述べ來りたるところは所謂る政論家の文章に係る。大凡そ政論なるものは、事概ね眼前口頭の實務に關するを以て、雅致詩情に乏しきは其の免れ難きところ、恐らくは曠世の大

文豪を以てするも、多く施すところ無かるべき也。是を以て政論によりて文名を成せるもの古より甚だ多からず、想ふに文章の妙はまた文藝の範圍内に求むべき乎。

然らば則ち我邦文學家の文章は如何。

#### 四 逍遙

文學者中にて文名最も高きものは、先づ指を坪内逍遙と森鷗外との二君に屈すべし。

逍遙の文は、一概にして論すべからず。人若し君が大學卒業當時の著述なる『小説神髓』の文章と、早稲田文學時代の文章とを較ぶれば、其の體裁の上に少からざる相違を認むべし。更に早稲田文學時代の文章と數年以來の文章、例へば倫理教育、歴史畫に關する諸論文とを較ぶれば、其の間に亦多少の變化を認めざるを得ず。是によりて見る時は、君の文體は明治十八年頃より今日に到るまで少くとも三段の變遷を經由せりと觀るを得むか。即ち小説神髓の時代にありては主として馬琴に負へるもの如く、早稲田文學時代に到りては是の馬琴摸倣の段階より進で却て君が獨得の文體を發揮したるものと謂ふべく、而して數年前、君が文學界より教育界に轉じたる頃よりは、其の文も亦君が教育主義の影響を受けて更に別種の體



裁を成し來れるもの如し。

君の文體は是の如く三段の變遷を經由せりと雖も、それが本來の面目は流石に掩はるべくもあらず、其の眞摯なる情想と周到なる注意とは到る所に現れたり。其の用語は常に妥當にして毫も誇大鋪張の病を見ず、語法亦た常に嚴肅にして一絲亂れず。間、滑稽酒脱の趣あるも法度おのづから其の間に備はりて少しも散漫の弊に陥らず。時に檢束餘りありて放縱や、足らざるの憾なきにしもあらずれども、諄々として理を窮め、切々として情を責むるところ、極めて力あり。漫りに大言壯語して他を威壓せむとするものに比すれば、文品遙かに優るものあるが如し。而して極めて平明の文字を以て艱深の理義を穿ち、着々として肯綮に中るところ、庖丁牛を解くの概あり、游刃常に餘地あるを以て、文情詩趣亦おのづから油然而たり。蓋し空文によりて空理を闘はすは君の常に避くるところ、是を以て如何に抽象の事理と雖も一たび君の筆に上れば忽ち其の體形を具し來り、人をして耳聞目睹の感あらしむ。比擬提喻、是の間に百出して、讀む者又高遠なる理窟三昧に彷徨するを覚えざる也。時文百家、君に於て獨り這般の妙を見る。

\*

而して吾人の最も君に服するは、其の能く人の言に聽き、人の理を容るゝところにある。是の如きは寧ろ君の性情に屬すと雖も、是の性情ありて文章亦一段の品格を高うせるを見る。夫の豫じめ成心を挟みて他に對するもの、言論未だ外に交らざるに、排攘の勢既に内に成る、是を以て論理窮屈、氣勢徒らに張りて文品愈々低く、蕩然として情の人を動かすもの無し。君の文は即ち然らず、辯難攻撃に際して能く對手の言ふ所に聽き、力めて其の理に同ぜむとして而して同する能はざるに及びて、乃ち徐ろに反對の態度に出づ。而も尙ほ他に許すに一家の見地を以てし、強ひて自己に同じきを求めず、唯々務むる所は理窮まり情徹するにあり。其の氣度の寛裕なる、流石に老大家の風ありと謂ふべし。

### 五 鷗 外

若し夫れ森鷗外は其の文體に於て、其の論法に於て、其の理想に於て、其の批評家なる態度に於て、其の他殆ど凡ての點に於て、逍遙と甚だ同じからざるものあり。而も逍遙と並びて當代第一流の文豪たるの一事は則ち相同じ。

鷗外の文は謹嚴を以て鳴る。其の文字は漢文の嚴正を襲いで拮据の病なく、國語の婉曲を

似して冗漫の嫌なく、章句の法、巧に和漢を折衷して是を行るに、一家の文脈を以てす。渾然として斧鑿の痕を留めず、文品甚だ高し。蓋し君が天才の然らしむるところ、最も學び易からずと爲す。而して所謂る君が一家の文脈なるもの、主として歐文より來れるもの如し。紆紆曲折、縱橫自在、文華四もに飛び光彩四邊を拂へども、一條の理義綿々として其の間に貫通す。その理を折くや幽微、論を行るや森嚴、加ふるに閑、詩趣あり、風韻あり、措辭の巧あり、造語の奇あり、人をして卒讀を覺えざらしむ。

君の文、抽象の理を述ぶるもの多し。是の種の文章にありては宛然として君が獨逸學者の風度を見る。是れ逍遙が英國派の學風を受け、好で淺近の事を假りて高遠の論を爲すに比すれば、二君の面目おのづから明なるものあり。君既に好で抽象の理を述ぶ、其の語義ま、根深にして解し難きものある、蓋し已むを得ざらむか。加ふるに君が學語の製作に關して一家の見地を有するや、其の用ふる所の文字往々世上に流布する所のものと同じからず。之を以て君の文に慣れざるもの、動もすれば晦澁不明を以て評するものあり、吾人潛かに君の爲に是を憾とす。殊に近時の譯述に係る美學上の論著にありて是の憾み特に深きが如し。

然れども是の如きは毫も君が文章の價值を増損するに足らざるべし。人或は君の文、謹嚴に過ぎて洒脫の趣無きを言ふ、是れ或は然らむも、而も恣に全きを望まば何ぞ必ずしも一二にして足らむや。一代の大家、君の如きは、人唯、須らく其の長所に見て自ら學ぶ所あるべき也。

#### 六 逍遙と鷗外

今試みに逍遙、鷗外二君の文章を對比すれば、彼れは平明にして記述に長じ、此れは精嚴にして論議に通ず。彼れは事を假る淺近、力めて具體の事を説き、此れは論を構ふる高遠、好で抽象の理を談ず。彼れは常識に基きて成るべく通俗ならむことを力め、此れは學理に據りて必ずしも難解を嫌はず、彼れは時に偃臥して洒脫の言を弄べども、此れは終日危坐して肅敬の容を類さず、彼れは諄々たり、此れは昂然たり。若し夫れ批評上の態度に至りては彼れの尙ぶ所は記實也、經驗也、沒理想也、此れの重する所は談理也、考察也、理想也。其の傾くところ、彼れは客觀的にして此れは主觀的、彼れは包有的にして、此れは超絶的也、兩々相對峙して其の獨擅の地歩を占むるところ俄に他の軒輊を許さざるものあり。明治文壇の

二君に負ふところ蓋し小少ならざる也。

### 七 青年文學者の文章

逍遙、鷗外の二君は文壇の耆宿也、然れども若し吾人に許すに歴史上の見地を以てすれば、文學者としての二君の事業は、過去に於て其の大半を終れるもの如し。逍遙君、教育に隠れてより既に數年、鷗外君亦た京を去りてより往年の意氣復び見るべからずとせば、文壇の將來は事實に於て二君の繼紹者たる青年文學者の手に委ねられたりと謂ふべき也。知らず、青年文學者中二君の後を享けて遜色なきものありや否や。

今の青年文學者の文名あるもの一にして足らず。曰く抱月、曰く梁川、曰く桂月、曰く天隨、曰く劍峰、曰く嶺雲、曰く鯉洋、曰く臨風、十指殆ど屈し盡して遺算尙ほ多きを覺ゆ。是等の諸君は皆是れ一時の選、素より傍人の上下を容れずと雖も、試に少しく吾人の見る所を述べむ乎。

抱月は早稻田出身第一の文章家也。逍遙が馬琴の摸倣を力めしことあるが如く、君にも亦逍遙の擬似を事とせし時代ありき。「早稻田文學」發刊の當時に於ける君が文を細想すれば

思ひ半に過ぎむ。然れども逍遙が幾もなく馬琴の圈套を脱せし如く、君も亦永く逍遙の踏襲者に非ざりき。近時、君の手に成るもの、おのづから一家の體裁を具へ、儼として峙立するところあるを見る。凡そ君の文、謹嚴にして典雅、精練にして簡機、殊に修辭の巧を稱すべし。彼の明堂辟雍を造るもの、門階戸席、皆程式あり、一楹一廂と雖も妄りに移易すべからざるもの、取りて君の文に喩ふべけむか。唯惜むらくは檢束に過ぎて氣焰に乏しきを。其の幽微の理を論ずるものにおいて、語平明、意透徹、推開轉折の間に於て錯綜の妙を極むるところ、故大西操山の遺風を見る。蓋し君の如きは優に當代の文章家を以て許すべきものなるべし。同門の士にして文名あるもの綱島梁川ありと雖も、君に較ぶれば一籌を輸せざるを得ざるべし。赤門出身者の文を能くするものを擧ぐれば先づ指を桂月に屈せざるべからず。桂月の文は素と氣を以て勝る、一氣乗じ來れば雄健横絶、離奇天矯、萬馬亂れ奔り、風雨俄かに到るの概あり。理必ずしも精核ならず、説必ずしも妥當ならざるも、意力あり、情熱あり、生氣筆端に溢れて光芒四邊を拂ひ、讀む者をして心驚き目眩み、恍として端倪に遠あらざらしむ。是の如きは學むて得べからず、眞に天賦の文才なりと謂ふべし。但し其の氣に任せ情を恣に

するや、往々奔放に過ぎて放縱に陥り、鋪張に過ぎて浮誇に近づき、沈靜醇雅の趣に於て少しく缺くる所あるを恨みとすべし。君が才氣の横溢と詞藻の豊富と、和漢文學の蘊蓄とを以てして、尙ほ是の病を見るは、蓋し多忙の間に筆を落して沈潛未だ足らざるの致すところか、否乎。

劍峰、嶺雲、鯉洋、天隨は何れも漢文學の學士也、是を以て其の文亦た主として漢文より來る。

劍峰の文は正々堂々たり、喩へば名將六師を率ゐて關を出づるが如し。布置章法秩然として一絲亂れず、錯落奔放の奇趣乏しきも、文字は醇正にして鉅麗、事理は明瞭にして切當、蓋し漢文の正體に近きもの乎。嶺雲の文は佚宕橫肆、好で怪奇を弄す、齊整は劍峰に如かさるも、淋漓は則ち過ぎ、才氣は桂月に及ばざるも、奇峭は則ち優る。鯉洋の文は太だ嶺雲に似て少しく及ばざるもの乎。

若し夫れ天隨は新進文章家として現下隆々の名聲ある者、其の文、雄健自在、豪氣洋溢、縱橫の姿態を盡す。唯、君は餘りに漢文漢詩の素修に富めるを以てか、其の用ふる所の文字語

法、亦餘りに支那的なるに過ぐ。動もすれば無用の典故を援引して却て文義の散漫を致し、不急の對句を臚列して論理の朦朧を招くところ、寧ろ勞して損ありと謂ふべし。其の弊の及ぶところ人をして往々其の文字の爲に枉ぐるに非ざるやを疑はしむ。吾人君の爲に潛に是を惜む。要するに君は桂月と共に赤門文士中の最も能文にして且つ最も健筆なるもの也。唯其の健筆に乗じて文を作ることの餘りに多きに過ぎむことを憂ふ。多作必ずしも濫作に非ずと雖も、推敲沈思の一段に於ておのづから缺くる所あるを免れず。天隨たるもの、其の才器に顧みて須らく自重することあるべき也。

臨風の文は漢文の素養ありて而して漢ならず、國文の蘊蓄ありて而して和ならず、其の間一分の俳味を帯びて瀟洒輕妙の姿態あり。蓋し亦一體たり。桂月は情に熱し、抱月は理に拘はり、天隨は文に役せらる、唯夫れ臨風は能く情を解して執着せず、理に明にして拘泥せず、而も風韻あり、雅致あり。蓋し風流才子の文か。若し夫れ其の弊を擧ぐれば、輕妙餘りて重厚の風に乏しきを惜むべしとせむ。其の史論、亦一家の體裁あり、夫の乾燥無味なる史料編纂先生と甚だ異なるものあるを多とすべし。往年の著、『日本地氣論』の如きは識見文章共

に、矧川が『日本風景論』に優る數等のみに非ざる也。

以上は青年文學者中、文名既に世に籍けるものに就いて言へる也。是の外、其名未だ甚だ高からざるも望を將來に屬すべきもの尙ほ少からず。是の文、彼れを取り此れを捨つ、必ずしも褒貶の意を寓するものに非ざる也。

### 八 結 論

現代の文章に就いて予の見るところ概ね此の如し、讀者顧みて自ら悟了する所あるべき也。終りに唯一言青年諸子に告ぐべきあり、文章の基く所は其の人の品性也。文字は學び得べく、體裁は倣ひ得べく、唯其の氣格、神髓に至りては遂に其人の品性に頼らざるを得ず。是を以て品性の修養は作文の第一義也。是れをこれ務めず、徒らに粉飾彫琢を是れ事とするものは畢竟戯作者流の餘技のみ。然れども文章も亦一種の技術なるを以て技巧の習練に待つある、素より言を須るす。唯是の場合に於ても亦徒らに老人の模倣を事とする勿れ。己れ能く先人に如かむと欲せば、亦等しく先人の學びたる所を學ばざるべからず。予は今の青年諸君が文を見るの甚だ輕からむことを憂ふる者也。

(明治三十四年五月)

### 笹川臨風が「奈良朝史」の首に書す

臨風兄足下、高著奈良朝史に關して、卑見を徵せられたるは予の光榮とするところ也。されど予は素より史に明なるものに非ず、何を以てか専門史家たる足下の下問に答ふべき。筆を執りて聊か踴躍するところ無きを得ず。

奈良朝は蓋し本邦歴史中に於て最も興味ある一時代也。政治は茲に初めて其の體制を具へ、文學は茲に初めて其の端緒を啓き、美術は茲に初めて其の精華を發揮し、宗教は茲に其の空前絶後の偉觀を呈したり。而して外來文物の輸入日尙ほ淺きや、國民固有の性情尙ほ其の潑刺たる活力を失はず、内外勢力の交貫錯雜の跡、史家にとりて好箇の題目たらずむばあらず。足下の是の書、能く是の複雑なる契機を捉へて大處の觀察を愆らず、讀むものをして耳聞目睹の感あらしむ。眼光紙背に徹するものに非ざるよりは、誰か是を能くせむや。予は足下の達觀活識、夫の子々たる史料編纂先生と同じからざるものあるを見て深く是を喜ぶ。

世の史家概ね曰く、奈良朝の文物は漢竺の模倣のみ、唯夫れ平安朝に於て初めて日本固有

の面目を見得べしと。予の見るところ聊か是に異なるものあり。蓋し國民の性情、古と今と素より同じからず、特に何れを以て固有とすべきかは暫く別箇の疑問となさむ。唯若し吾人の祖先が古代に於て有せし所のものを以て我が國民本來の特性と爲すべくむば、奈良朝の文物の如きは、最も明に是の特性を表現したるものと謂ふべし。試に見よ、奈良朝の佛教は平安朝の佛教の如く厭世趣味を帯びざりき。其の轉讀せられし經典の最も重なるものは、金光明經と最勝王經となりき。聖武天皇が總國分寺として東大寺の大造營を企て給ひしも、其の目的は國家鎮護にありき。畢竟奈良朝の佛教は現世教なり、而して現世の福祉以外に求むる所無きは、古事記、風土記、祝詞に現はれたる日本民族の特性に非ずして何ぞや。奈良朝の文學は萬葉集を以て其の代表者となす。而して萬葉集收むる所の和歌は格調雄大、氣象剛健、其の情緒は快濶にして和樂也。是を古今以下の歌集の纖弱、憂鬱、多く婦女子の涙痕あるものに較ぶれば、果して孰れが能く我が祖先の性情を發揮せるものぞ。予曾て古事記を讀みし時、其の歴代の歌謠一として花鳥風月を歌へるもの無きを以て、本邦固有の性情が平安朝以下の文學と甚だ近からざるものあるを思へり。予は萬葉集に關して精緻の研究を遂げた

るものに非ずと雖も、其の歌咏の中に花鳥風月の小題目に拘泥せるものとは、予の曾て記憶せざる所也。果して然らば奈良朝の文學は最も我が祖先の性情を代表せるものに非ずや。美術に關しても予は同一の立言を爲し得べしと考ふ。天平朝の彫刻の如きは、其の儀軌、形式の如何は暫く措き、少くとも其の精神氣格の雄大、快濶なる點に於て、紀記、萬葉の風尚を傳へ得て甚だ適切なるを覺ゆ。是を王朝後期に發生せる纖弱枯弱なる諸流派に較ぶれば、國民性情の權化、彼れにあらずして寧ろ此れにあるを觀る也。足下以て如何となすや。是の書、奈良朝の文華を叙述して殆ど餘蘊無し、唯其の美術に精しからざるを少しく憾とすべきのみ。佛法東歸の勢力が我が奈良朝に於て其の高潮に達したるが如く、漢竺の美術は我が天平の時代に於て其の英華を煥發したるの觀あり。是れ豈本邦史上に特筆大書すべき事項に非ずや。今日寧樂の舊都、健陀羅美術の殘影を留めて餘光尙ほ焯々たるもの、嘗に好古者の鑑賞に資すべきのみに非ざる也。健陀羅の地は即ちスキュタイ民族の故國にして、曾て歐亞二文明の交渉の地に當る。今日東大寺法華堂の觀音像にアポロ・ムザゲートの遺照を見出し得べしとせば、天平美術の意義亦決して淺小ならざるを見る。足下の是の書、是の一段の

注意を缺きしの觀あるは、予の少しく憾とする所也。

足下先に『元祿時勢粧』を著はして江湖の喝采を博したり。想ふに奈良平安の二朝を以て徳川時代に比擬するを得ば、天平は猶ほ元祿の如き乎。而して綱吉將軍と聖武天皇と、桂昌院大夫人と光明皇后と、何ぞ一に相似たる。而して天平を以て元祿に比すべくむば、萬壽長元は猶ほ文化文政の如き乎。十一代大御所の豪華と法性寺入道の榮華と何ぞ相似たる。聞説らく、足下近日元祿時勢粧に次で化政時勢粧の著あらむとすと。然らば則ち奈良朝史に次で平安朝史無かるべからざる也。

予嘗て奈良に遊び、藥師寺の高塔に登り、三笠山より四方一帯の地、堂塔相望み、梵唄讚誦の聲且暮に響くの狀を想像して神往禁ぜざるものありき。今茲に足下の書に接し、更に舊の情に堪へず、即ち恣に所思を陳して下問に答ふること是の如し。足下果して首肯するや否や。

(明治三十四年七月)

## 『元祿時勢粧』を讀む

(元祿時代の側面觀)

元祿は文藝復興の時代也、社會革新の時代也。元和偃武以來六十年の平和やうやく戰國の創痕を癒やして、茲に清新の氣運を喚起せむとする時代也。若し爛眼なる史家の文章を能くするものあらば、是の時代の如きは眞に好箇の題目たらずむばあらず。頃日笹川臨風一書を著はして當時の文物社會を叙述し、略々其の由來發達を論究して、題して『元祿時勢粧』と云ふ。吾人平生是の種の著作無きを恨とせるもの、茲に一言なきを得ざる也。

元祿時勢粧、何ぞ其の標題の瀟洒にして、夫の所謂る史家先生の撰ぶところに異なるや。按ずるに時勢粧の文字は、太平記第二十一に天下時勢粧とあるに基くが如し。其の文によりて其の意を察するに、所謂る時勢粧とは營り政治軍國の大事を誌すのみならず、普く當代の人情世態を描寫するの謂か。『元祿時勢粧』の著者また是の意を體せしもの如く、其の記述するところ、法政文教より人情風俗に至るまで細大網羅して餘すところ無し。第六章以下、

江戸と上方とを比較し、太平の粧飾を説き、廓の音つれと若衆姿とを描き、歌舞音曲を叙し、元祿美人相を論ずるところ、殊に著者が如何に人情世態に重きを置きしかを察するに足らむ。時勢粧の標題亦是に於て其の意義を全うせるを見る。吾人は先づ著者が這般の着眼、夫の滔々たる史家先生と異なるものあるを歎ぶ。

元祿時代を以て文藝復興期としたる著者の識見も亦吾人の概ね服するところ也。唯美術工藝に關しては復興と云はむよりは寧ろ革新と稱するの妥當なるを覺ゆるのみ。後半風俗世態を叙するところ、巧に事例を點綴して委細を曲盡す。殊に著者が素修の深と探討の勞とを見るべし。其の流麗にして洒脱なる著者が一流の文體、また是の間に處して、一段の光彩を發せるが如し。唯惜むらくは叙事餘りに簡略なればにや、往々人をして名辭の送迎に遑なく、爲に其の意義をして生吞活剝に終らしむるものあるを。想ふに讀者の多くは吾人と憾を同じうするならむ。

是の如く、吾人は大體に於て著者の所見に服すと雖も、尙ほ一二の言を加ふべきものあり。元祿を以て太平和樂の時代と爲し、是の點より當代の社會を説明せむとしたる著者の見地は、吾人強ちに是れを否定せずと雖も、吾人は同時に是の時代の裏面には尙ほ戰國の遺風あり、文藝、美術、風俗の上に現はれて尙武、剛健のやゝもすれば殺伐の風尚をさへ成したるを認む。是の一面の觀察が多く著者の筆に上らざりしは吾人の潛かに遺憾とする所也。

蓋し元祿は今日世人の思惟する如く爾かく太平無事の時代には非ざりしなるべく、其の人情風俗亦恐らくは爾かく優柔佚蕩を極めたるものに非ざりしならむか。史を案するに元祿の前に明曆あり、而して明曆三年には江戸の城市邸宅の殆ど全部を焼き盡し、二日間に十一萬に近き燒死者を出したる大火ありき。爾來江戸市街の復舊工事を如何にすべきかは幕府上下の最も苦心したるところなりき。加ふるに時の將軍たる犬公方の放縱なる施政と蕩樂とは益々其の困弊を甚しからしめたるに相違無し。上野根本中堂の大建築は叡山を摸して是の間に經營せられ、服部南郭をして玉樓金殿高多少、不庇貧民七尺身と憤慨せしめたりき。國用多端にして内帑の漸く支へざるや、惡貨の鑄造は容赦なく始められ、銀銅半ばを占むる金貨と、銀二銅八の銀貨との濫發は經濟社會を甚だしく攪亂せしめたり。是に於てか物價暴かに騰り、人情日に險惡となり、偷盜詐欺の徒世間に横行するに到る。木枯言水が「犬吠えて家に人な



し『葛紅葉』と歌へるもの、蓋し當時の實況なりしならむ。

是の如く世に事多くして人の心穩かならざる時代なりければにや、當時の文藝風俗の一面は、多く殺伐剛健の氣象を現はせるが如し。近松の著作中最も數多くして且つ最も世人に歡迎せられたるものは所謂る時代淨瑠璃なりき。國姓爺、曾我の如きものが如何ばかり當時の風尚に投ぜしかは、天の網島に踏利天の例を引けるを見て略々想ひ知らるべけむか。守景、一蝶の畫風の飄逸奇雋なるは更にも言はず、横谷宗珉、後藤通乘、奈良政隨等諸金工の作にさへ、一種剛健の氣風の安永以下の製作に見るべからざるものありと云ふに非ずや。其の風俗を見るも、狭斜の巷に遊客の氣嫌を取るを職業とする習間だに鬚髯いかめしく生やしたることは、鬚の十、鬚の無休などの例にて知らるべし。腰に大刀をたばさみて道を行くに、六法を踏みたるも當時の風なり。元祖團十郎が隨市川の荒事を以て名聲を馳せたるもこの時代也。水木結、吉彌結の優美はありけむも、水木辰之助が槍踊りと云ふものも其の風姿の勇壯想ひ見るべからむか。這般の事例によりて想像すれば、元祿時代の一面には、吾人の所謂る尚武剛健、もしくは殺伐の風氣尚ほ存せりとせむも、強ちに不當の説に非ざるべし。

吾人は又著者が將軍綱吉の生母たる桂昌院夫人の事に關して毫も言ふ所なかりしを遺憾とす。若し元祿を以て天平に比し、常憲院を以て聖武帝に擬すべくむば、桂昌院夫人はまさしく光明皇后にも較ぶべき也。夫人が其の絶世の才氣と將軍の生母たる權威とによりて、當時の施政に如何の勢力を有せしかは、著者の素より知了したるべきところ、殊に夫人が佛法の信者として、かの護持院の隆光等を役し、盛に堂塔伽藍の造營につとめたるの事蹟は、美術の歴史上にとりては見廻すべからざる大事なりとす。例へば大和の法隆寺、唐招提寺、東大寺の如き古代の伽藍佛像が、今日尚ほ依然として存立するは、夫人の營繕與つて最も力ありき。吾人は著者が這般の消息に就て毫も顧みる所なかりしが如きを憾とするもの也。

然れども恣に全きを求むれば、天下何物か瑕疵なからむ。以上の批難は良し批難たるの價値ありとするも、素より本書の定品を増損するに足らざるべし。方今史料編纂先生ありて而して歴史家なし、著者の如きは大處を誤らざるの史眼あり、過去を活現するの史筆あり、向來勤めて怠らずむば造詣測り知るべからざるものあらむ。其の後年の著述に較ぶれば、本書の如きは蓋し言ふに足らざるものならむのみ。

(明治三十四年七月)

## 土井晚翠を送る

去月十五日横濱を解纜せる日本郵船常陸丸は土井晚翠を載せて西航の途に上りぬ。この文の世に出でぬべき頃には、君は紅海の岸に沙漠の月を眺めむか、蘇西の渚に古國の跡を偲ばむか。

心あるものにとりて旅行ばかり大いなる教訓を齎らすは無し。そは自然の興會、人生の趣味、歴史の回顧、すべて旅行によりて活ける知識となり得べければ也。さればにや、古より大なる詩人の生涯の少からぬ部分は旅行の中に費されたりき。ゲーテは伊太利の漫遊より歸りて自ら其の詩想の頓に進めるを驚けりとさへ傳へらるゝに非ずや。吾れは品性あり、學殖あり、詩情ある晚翠が能く這般の消息を解し得るの期、遠きにあらざるべきを疑はず。

君は詩人也、詩人として生死すべき人也。往年君の仙臺に赴く時、吾れは英語の教師に果つべき君ならぬを信じたりき。今や君職を辭し、自ら資を抛ちて遠く歐洲に遊ぶ、發するに臨み、君の近作を輯めて『曉鐘』の一篇を公にし、其の首めにゲーテの句を題して曰く、

「吾れにして能く歌ふ能はざらむか、是れ吾れに命なきに等しき也」と。是ある哉君、壯なる哉君、歌へ、大に歌へ。理想を歌ひ、人道を愛し、進歩を信じ、無窮に進む、是れ詩人たる君が天職也。想ふにサンタクロースの煙波長へに依稀として、ワイマールの古國舊によりて縁ならむ、古哲をしのぶ君の情や如何に。サンベルナル峰高きところ、トラスチベルの水深きほとり、古今の感慨、君が俯仰に任さむ。行けや君。

(明治三十四年七月)

## 大橋乙羽を悼む

乙羽子病に罹りてより百餘日、去月一日を以て終に不歸の客となりぬ。同じく三日谷中の養福寺に葬祭の式を営みぬ。風雨を冒して會するもの數百人。一代文藝の士來り列せざる無かりき。紅顏瀟酒の才人も今や冷土一杯のあるじとなり果てては、死後の萬戸侯も生前一盃の酒に如かざらむ。あはれ死者にのみ篤き人の心こそうたてけれ。

さはれ乙羽子はけに惜まるべき人なりき。小説家としての子は素より紅葉、露伴の諸先輩に及ぶべくもあらず、詩歌を能くし、俳諧に巧なりしが、是れによりて名を後世に留めむには尙ほ多大の修養を要したりき。唯夫れ紀行文の文學者としてぞ子が獨擅の事業なりける。私人としての子が性格は率直にして飾らず、洒脱にして拘らず、義に固く、情に厚く、能く親み、能く恕せり。されば子と親交あるもの、子が人と爲りに服せざるは無かりき。加ふるに子は事務を處理する上に殆ど天稟とも稱すべき才氣ありしを以て、出版社交の事業に盡したるところも亦尠からず、随ふて知交上下に遍く、文藝社會に事ある時の如きは、子の幹

旋に依頼する所甚だ多かりき。往年の文學美術家懇親會の如きは、實に子が首唱に起りしものにして、子は是れによりて今の藝苑に於ける小黨分立の弊を救はむと欲したるなりき。而して吾等の最も子に感謝すべきことは、子が其の力の許す限りに於て文藝の士を庇保せむと力めたるにあり。

子は素より豪富の身にあらずと雖も、子が管掌せる出版事業が今の文藝社會に影響する所の勢力は甚だ大なるものありき。自ら文學者たる子は、今の文學者の境遇に對して常に深厚なる同情を有し、出版事業として許し得る限り、務めて其の便宜を計りたるの事實は、吾等の平生親しく見聞せし所也。大學出身者の中にも子を徳とするもの尠からざるべし。されば子は何時しか隠然として文學者と出版者との間を疏通するの地位に立ち、子自らも亦甘じて是の地位を守りたりき。今の文藝界は是の如き好意を有したりし乙羽子の名に對し、亦宜しく好意を以て記憶すべき也。吾等は是の點よりして文藝界の爲に深く子の遠逝を悼まざるを得ず。

而して乙羽子の短かき生涯は、又少年子弟の爲に好模範を遺したり。子の幼時は小學校の教

育をすら満足に受くる能はざる境遇に過され、東京に出で、硯友社の仲間入りをなせしまでは、西奥の邊陲にありて商家の小僧なりき。子が學問はかゝる間に於て爲されたるものなりき。東京に出で、一個の文學者として多少の名を成すまでも、或時は一日三錢の食料を得て苦學せしことすらありしと云ふ。吾等は這般の事實の殆ど立志篇中の説話として恥かしからぬものあるを見て、子の人物に對して一段の尊敬を加ふるを禁する能はず。世上の少年諸子は須らく人生多少の成功も決して偶然にあらざるを悟了すべき也。乙羽子は身自らは是の如き苦境にありければにや、他の薄倖を憐むの情も亦おのづから篤く、才子の不遇なるものに遇へば喜ではを庇護したり。吾等は現に今日知名の小説家にして曾て子の家に賓客たりし一二の事例を目睹せり。

あ、乙羽子既に逝きぬ。歳僅に卅有三。茲に徒らに其の生前の事業を追懐するは、蓋し又人生の恨事たり。

(明治三十四年七月)

## 明治三十四年の文藝界

### 一 吾人の批評は無遠慮也

爾力めて己れに直かれ、然らば即ち人にも直からむ。吾人の奉ずる所の批評主義は唯是れのみ。今の小説家、新體詩人、批評家、著述家諸君の多くは是の文を讀みて恐らくは忿怒せむ。然れども諸君にして吾人に對する諸君の忿怒の今に始まりしことならざるを憶はば、自ら顧みて苦笑するの外無かるべし。

有體に言へば、吾人は毫も今の文壇に信賴せざる者也。如何なる新著述ありて其の世評如何に喧しきも、吾人は始めより多くの價値を措かざるを常とす。吾人は生來決して是の如き意地悪き者に非ざりしが、文藝批評家としての多年の經驗は吾人をして知らずく斯かる習慣を馴致せしめたるを如何ともする無き也。敢て告ぐ、吾人に同情あれと要むるは無益也。吾人は却て文の今壇の如何なる作家に向ても先づ吾人に同情を要求するの權利を得來れと言

はむ。是を以て吾人の批評は飽く迄冷酷也、大膽也、無遠慮也。怒る者をして欲するがま、に怒らしめよ、笑ふ者をして欲するがま、に笑はしめよ。他の褒貶によりて喜憂するの時代は吾人に於て既に遠く過ぎ去れり。其見る所、今の衆俗と同じからざるは吾人の寧ろ歎ぶ所也。

## 二 表紙挿畫は恰好の代表者

三十四年の文壇を最も好く代表するものは書籍の表装と雑誌の挿畫となるべし。街上の書店陳列する所の幾十百の新刊書は装釘の美なること、たしかに一種の觀物也。著書出版者が表紙の圖案賦彩に苦心して互に新奇を競へるの狀歴然として見るべし。然れども仔細に觀察すれば、唯是れ新のみ、唯是れ奇のみ。一見俗目を喜ばしむるのみ、毫も重厚高雅の趣無く、其の趣味の輕佻浮靡、寧ろ太だ厭ふべしと爲す。而して著者は清新を誇り、讀者は其の奇拔を喜び、相傳へて靡然として一時の風を爲す。吾人より見れば殆ど兒戲のみ。雑誌の挿畫の如きも亦然り。妄りに洋風の皮相を摸して頻りに新様を衒ひ、形似なく、骨法なく、明清なく、漫然東西を混じて歸適する所を知らず、たゞ怪奇を求めて斬新を誇らむとす。其の風格

の浮薄なる、装釘の意匠と正に好一對たり。

表紙挿畫の美を以て其の書を賣らむとす、既に卑むべし。其の意匠畫風の爾かく輕浮を極めて而も尙ほ其の清新を誇らむとするに至りては、著述出版者流の趣味好尙の太だ俗惡なるを想ふべし。宜なる哉、其の内容の亦爾かく輕佻浮薄を極めたるや。

三十四年の文壇を知らむと欲するものは、先づ其の表装と挿畫とを一見すべき也。

## 三 紅葉、露伴を葬れよ

中村春雨の『無花果』、菊地幽芳の『己が罪』、徳富蘆花の『思出の記』等は、昨年の小説中に於て最も名高きものなりき。されど是等は從來の陳套腐爛なる群著作の間に、出で、稍新面目を現せしと云ふの外、特に多大の推獎を値せざるものなりき。『無花果』の如きは着想に於てこそ多少の見るべきものありしが、描法措辭の幼稚なるは素より、其の全篇を貫通せる理想は尙ほ太だ淺薄なりと謂はざるを得ず。『己が罪』が大體に於て重厚の趣あるは嘉みすべしと雖も、結構陳腐にして文章甚だ冗漫、加ふるに性格の研究尙ほ大に足らざる所あり、

傑作を以て許すべからざるや論無し。『思出の記』は平板に過ぎて無味に近かり。一種清新の理想の其の間に現はるゝもの無きに非ずと雖も、畢竟尙ほ穉氣あるを免れず、老成深實の境を去ること頗る遠しと謂ふべし。是等の作家何れも尙ほ春秋に富む、或は將來に於て多大の造詣あるべきも、現當の著作に對して多くの讚辭を呈するは吾人の能くする所に非ず。而して顧みて方今の文壇が、是等をしも尙ほ傑出の作として僅に將來の希望を繋ぐとするを見て、吾人は轉々惆悵の念に堪へず。

遮莫、今の小説界は方に局面一轉の時機に切迫せり。紅葉、露伴一輩の所謂る先進大家の如きは最早や度外視して可也。彼等は舊時の小成に安じて既に新進の氣力を失へり。時勢の急潮に後れて最早や實力の競争に勝へざるを見るに及びてや、高く自ら標持して偏に既得の虚名を失墜せざらむことを恐る。醜且つ陋と謂ふべし。今後の文壇は最早や彼等に求むる所無かるべし。彼等を大家と呼ぶは不可ならず、然れども其上に歴史的の三字を冠することを忘るべからず。後進作者は決して彼等の門下に赴く勿れ。『紅葉露伴』てふ小理想が如何ばかり今の青年作家を中毒し、萎縮せしめたるかは今の文壇の宜しく熟考すべき問題なりとす。

今の時、青年作家の爲に計るに、其の理想を高大にし、其の意力を雄偉にするより急なるは無し。吾人は、くれぐれも是の事を以て今の文壇に戒告せむ。

#### 四 悪寫實流行の例(天外)

今の小説家が文明の大勢に通せず、學術、政治、宗教等の事歴に對して馬牛相關せざるが如きは暫らく説くを要せざらむ。唯々今日著名の作家すら、其の自己の專業たる小説著作上の覺悟に於て極めて愚昧なる意見を有するに至りては一言の價值あるが如し。試に一事例を擧げむ。

小杉天外は小説著作上一種の意見を有すと稱するもの也。其の昨年中出だす所の作、必ず寫實小説の四字を標榜し、揚言して曰く、小説の要は有りの儘に事物を寫せば足る、作者の空想の導くところ、讀者は須らく隨伴して不滿無かるべしと。是の如き無意義なる主義の上に『戀と戀』を初めとして幾多の新作は公にせられたり。就て是を讀むに、其の所謂る寫實なるものは、唯々當面の事物を無意義に描寫して遺漏なからむと期するもの如し。其の當

然の結果として、之を外にしては讀者の注意を散し、是を内にしては事相の統一を失ひ、精緻は煩瑣となり、丁寧は冗漫となる。是の如くにして作者の所謂空想に隨伴を命ぜられたる讀者こそは實に迷惑の限りと謂ふべし。天外は抑々如何にして斯かる没分曉なる寫實主義の上に自家至重の專業を寄托し、剩へ是を自家製作上の覺悟として公言するの旨舉に出でたりしか。吾人の思料し能はざる所に屬す。所謂寫實主義を奉ずる天外の一輩よ、暫らく吾人の説く所に聽かむか。

仔細に自ら省みて吾人の經驗を檢覈せよ。而して或る利那に於て吾人に印象を與ふるもの何物なるかを考へよ。そは所謂寫實派の好で表現する如く物象の全形體なるべからず、吾人の注意力は一利那に於て爾かく當眼の全現象に通じて精緻なる觀察に勝ゆるものに非ざれば也。言ふまでもなく近圍の情況は臚ろけながら吾人の感覺中に入ることを妨げず、而も一定の利那に於て、吾人が明確に感受する所の印象は極めて單純なるものならざるべからず。而して吾人の所謂經驗は念々利那に於ける是等單純なる印象の連鎖に外ならざるを以て、彼の具存的事物の精緻なる記述を以て寫實の本意を達せりとする輩は、取りも直さず吾人の經驗に反對せる非寫實主義を取れるものと謂はざるべからず。天外の如きは自ら自己の言語の意味をすら了解せざるものと謂ふべし。

這般の理論は本題の旨趣に非ざるを以て多く言ふを已めむ。吾人は今の文壇に流行する惡寫實派の摸本として暫く天外を推し來りたるのみ。紅葉門下の諸作家及び柳浪の如きは、特に吾人の言に耳を傾けて可也。

### 五 進歩せざる新體詩

短歌集及び新體詩集の出版の多かりしこと昨年の如きは從來未だ曾て見ざる所也。其の最も主なるものを擧ぐるも新體詩には、晚翠の「曉鐘」あり、藤村の「落梅集」あり、泣菫の「行く春」あり。短歌には鳳晶子の「亂れ髪」あり、鐵幹の「紫」等あり、服部躬治氏の「伽具土」あり。其の他唱歌には「鐵道唱歌」を初めとして、「勅語唱歌」あり、「東京唱歌」あり、「楠公唱歌」あり。近時又「文典唱歌」の刊行を見る。雜誌には「片袖」、「春草」の如き詩歌専門のものもあり。其の他青年文士の手に成れる新體詩集少くとも七八あるべし。

然れども是れ唯、外觀の盛大のみ、作詩其物の價値に至りては多く言ふに足らざる也。『曉鐘』は往年の『天地有情』に比して特に進境を示せるものに非ず。『落梅集』、『行く春』、また『若菜集』、『暮笛集』に比して寧ろ遜色あるを見る。唯、藤村の格調舊に依りて優麗典雅を極むるを多とすべきのみ。『亂れ髪』は一時奇才を歌はれたれども、浮情淺想、久しうして堪ゆべからざるを覺ゆ。鐵幹の詩、一家の風格あり、居然として新派の雄鎮たりと雖も是れはた當年一様の鐵幹のみ。『鐵道唱歌』の凡調は兒童の口こそ囃されたれ、素より大方の鑑賞に入るべきものに非ず。『文典唱歌』の類に至りては俗惡無味、詩の墮落も茲に至つて極まれりと謂ふべし。其他青年文士の手に成れるもの如きは、多くは淫靡なる戀愛を歌ふに輕浮なる調子を以てせるもの、言奇語麗を以て俗目を喜ばさむとするところ、忌むべく厭ふべし。見來れば百千の詩篇、畢竟流水の鏤刻のみ。唯夫れ尾上柴舟の『ハイネ詩集』の譯の如き、聊か推獎を値すべしとせむか。

## 六 皆無の新著述

嘗り小説と新體詩とのみならず、文藝に關する何等注目すべき著述の吾人の記憶に残れるものとは殆ど一も是れある無し。浩瀚なる史籍は預約出版によりて陸續世に出でつゝあれども、歴史其物の著述は皆無也。史料は盛に編纂せられつゝあれども、吾人が其の恩恵に浴するの日は果して幾十年の後なりや知るべからず。字書、類書、教科書、編述は吾人數に是に接したりと雖も、學者が其の獨特の見地に據り、時勢に率先して警拔なる批評を公にせしが如きは、吾人の絶えて見ざる所也。名著綱要と云ふが如き出版は之れあれども、誰れありて名著其物を出だしたるもの無し。國學者は依然として訓詁的也。洋學者は依然として紹介的也。新時代の精神と提携して進歩的態度を執れる大研究の如きは、今の學者の想ひも寄らざる所なるが如し。

三十四年に現はれたる紛々たる駄書の名の如きは吾人茲に擧げざるべし。たとひ強ひて記憶の中より喚び起して茲に特筆大書するとも、彼等は間も無く再び『永遠なる遺却』の中に埋没し去るべければ也。



## 七 小兒輩の時文評論

時文評論の如きも特に言ふを要せざる也。嗚呼今の如き文壇に立ちて眞面目に議論し、眞面目に批評するが如きは、少しく心ある者の得て堪ゆる所に非ざるべし。凡そ新聞雜誌に時文を評論するもの、多くは黄口の少年のみ、素より人に訓ゆるの學殖あるに非ず、事を論ずるの識見あるに非ず。況して觀心修證の覺悟の如きは彼等の絶えて知らざる所、たゞ口耳三寸の學に依り一時の意見を述ぶるのみ。彼等能く其の知らざる事を論じ、能く解せざるの理を争ふ。例へば佛蘭西文を讀む能はずして佛蘭西文學を論じ、獨逸語を解せずしてゲイテ、ニイチエを批評するが如きは、彼等の最も得意とする所也。其の輕佻にして耻を知らざる、深く憫むべしとなす。是等小兒輩の事、素より毫も齒牙に懸くるに足らずと雖も、是の如き浮薄の學風の起因する所、那邊にあるかを考ふれば、吾人は今の官私立學校の管理者に向つて特に警告する所無くむばあらざる也。

## 八 見るべき論文

昨年中に表はれたる論文の稍々見るべきものを挙げむか、先づ指を登張竹風の「ニイチエ論」に屈せざるを得ず。ニイチエの説の是非は暫く措き、其の難解なる幾多の著書を涉獵して、かゝる明瞭通達なる長論文を編述するの努力は頗る多大なるものと謂はざるべからず。從來ニイチエに關する叙述論評は世に少からざりしが、多くは淺薄なる英文雜誌の翻譯の類に過ぎず。其の精細の點に於て、其の確實の點に於て、竹風の是の論文と同日にして論ずべきものに非ず。吾人は是の十九世紀末の一大產物たるニイチエを殆ど遺憾なく我邦に紹介したる事に對して竹風の勞を多とせざるを得ざる也。

ニイチエの説に關しては世上種々の批評あり。是の事に關して吾人は暫く何事をも言はざるべし。然れども一事の最も明瞭なることは、世のニイチエを論ずる者の多くが、殆ど全くニイチエを知らざる事也。吾人は是の點に於て今の學風の缺點の最も分明に暴露せられたるを認むる也。嗚呼觀心自得の修證を経ずして偉人を解せむとす、既に誤まり。況や身、

獨逸語をも解し得ず、ニイチニ自身の著作の何物をも色讀せずして、漫りに其の是非を判ぜむと擬す。眞理を求むるの道を去ること頗る遠しと謂ふべし。

竹風のニイチニ論と共に吾人の記憶に上れるものは、大塚保治氏の女子服裝の美術的價値に關する論文、藤岡作太郎氏の東西兩京の美術比較論、畔柳芥舟の詩文病理論等ならむか。讀賣紙上の『馬骨人言』が坪内博士の筆なりしことを聞きたれども、恐らくは寫にする者の流言ならむ。吾人の畏敬する博士が斯かる淺薄凡俗なる批評法を以てニイチニに臨まる、事あるべしとは、吾人の思惟し能はざる所なれば也。某々雜誌記者等が空谷の足音として讚美措かざるが如きは滑稽の極と謂ふべし。萬一坪内博士にして、馬骨人言は吾が草せし所なりと言明せらるゝが如きことあらば、吾人は謹て前言の紅雲を謝し、同時に改めて大に博士に問ふ所あらむと欲す。夫の小兒輩と論争するは到底吾人の堪ゆる所に非ざる也。

### 九 断片の事件

三十四年の文壇に關して吾人の言はむと欲する所略々右の如し。其他記憶に遺れる断片の

事件は、一にして足らず。『文壇照魔鏡』なる一書が文壇の廓清を期すと稱し、醜陋至極なる文字を弄して與謝野鐵幹の私行を許しし事もありき。鐵幹の兒戯に與みして法廷を煩はし、が如きは大に直に過ぎたりと謂ふべし。雜誌『明星』は極めて單純なる裸體畫を挿入したるの故を以て、時の内務大臣末松氏によりて發賣禁止を命ぜられたり。秋に入りて白馬會の展覽會に黒田氏等の裸體畫陳列せらるゝや、當局者は命じて腰部に黒布を纏はしめたり。彼れと此れと、共に俗吏輩が美術上の鑑識に盲目なるを證せると共に、文藝保護の爲に何等かの行政機關設立の必要を感じしめたり。高安月郊氏が譯出せる『イブゼンの社會劇』は好出版と謂ふべし。讀賣新聞は月曜文學を廢して連りに懸賞俳句を募り、紅葉の名は常に撰者の中にあり。爾來彼れを呼ぶに早く宗匠を以てすべき也。露伴は新作の見るべきもの無き代りに、舊作を集めて『譚言』、『長語』の二卷を公にせり。中江兆民居士の『一年有半』及び『續一年有半』は是の間に出版、洛陽の紙價を貴からしめたり。大橋乙羽が是の年六月の初め、僅に三十三の壯齡を以て易賣したるは本邦文藝界の爲に太だ惜むべき事となす。

終りに臨みて一言せむ。他人は知らず、吾人は三十四年の文壇を徳とすべき何等の理由をも

有せざる者也。彼れは吾人に何等の慰藉をも與へざりき。如上の記憶の吾人の頭腦に印象せられたるは、吾人の甚だ遺憾とする所也。あゝ是の如き文壇は何時まで繼續せざるべからざる乎。吾人の懸念する所唯、是れのみ。

(明治三十五年一月)

### 文 藝 雜 談

#### 一 挿 畫

この頃の文學雜誌又は詩集に挿畫無きは稀なるが、その多くは挿畫と云はむよりは一種の摸樣とも見るべきものにて、其の技巧はいとく拙きが如し。日本畫かと見れば骨法用筆の工夫もなきのみか、思ひもつかぬ處に陰影を施せるなど西洋畫らしくも見ゆ。さて西洋畫かと見直せば、聊か形の似よりはあれど、明暗の描き方など更に相應はしからず。さらば所謂新派獨創の新畫とも許し見むか、東西古今の流派を離れて何處にかその新らしきを誇り得べき點ありや。かゝる化物畫をば新と唱へ奇と稱ゆるは何の見る所ありてにや。

總じて高尚なる美術としての挿畫は我が邦人の多く知り能はざる所なるべし。こは一つは我が繪畫の性質にも因るべけれども、技倆ある畫家の初めより墨藝人の小技としてそを卑むにも因るが如し。されば新聞雜誌又は小説家の挿畫に見るべきもの甚だ少く、例へばかのテ

オドル・ドレなどの諸作品に見る如き偉大なる成功は、我邦にては殆ど想ひも寄らざる所也。予は是の點に於て本邦畫家の三省を促すべし。

## 二 ドレの挿畫

ドレの作にて最も有名なるはミルトンの失樂園の挿畫と聖書の説明畫となるべし。前者は友人晩翠の許にてしばしば見たるが、その崇高神祕なる表情はドレ獨得の深酷なる描法によりて殆ど遺憾なく發揮せられ、失樂園の本文も爲に一層の光焰を放てるが如し。「夜の如く黒く、塔の如く高き」魔王の姿、陰慘なる地獄の光景などは言ふまでもなし、「創造」の大問題を捉へて波濤の如き連山の頂、いつしか大蛇沖天の化成せるが如き、其の想像の偉大にして其の描法の奇抜なる、一個無聲の大詩篇也。聖書の説明畫は余の書架中にもあり。ソドムの陥落、ダニエルの獅子窟、或はサムソンの最後など何れも見るべし。新約の終り、十字架上の基督の如き殊に崇大を極めたり。

總じてドレの作、個性の包容豊富にして、體勢の變化極まりなし。殊に數十人を一幅に集

めて其の奔馳、格闘、憤怒、驚怖の狀情を現じて活けるが如きは、本邦畫家などの企て及ばざる手腕と謂ふべし。本邦の畫家にありては太だしき怪奇の面貌を許すに非ざれば、恐らくは十人の個性を現はし得るもの無かるべし。少しく表情按配の困難なるに遇へば、すなはち種々の方便を以て是を塗糊し、掩蔽し、曖昧の中に其の責を免れんと欲す。而も尙ほ其の虚飾の風情を離れざるや、其の表現せむとする當體の果して本文の要求に稱へるや否やを省みず、ひたすら自家の小技倆を衒はむと力むるの惡習慣あり。慎むべきこと也。

## 三 人の容貌

人の容貌を吟味して其の性格を想ひ合はせむはいと興味ある業也。予はこの目的にて現代の人に就いていさ、か考へ試みしことあれど、流石に憚りあることとて言ふべき機なく過ぎぬ。

西洋人の中に好ましきは、ゲーテ、ヘーゲル、シヨペンハウエルなどの顔ばせ也。顰みの影だになきゲーテの圓滿なる面に現はれたる平和は、即ち是れ人生の最も大いなる苦痛に

打ち勝てる表章なるを想へば、言ひ知らず貴し。ヘーゲルの面ばかり威重と自信と平和との表はれたるはあらず。シヨ氏の顔には悲愁、黻深く刻まれたれど一分嘲世の氣ありて其の人格の超絶を示現せるところ、たとしへなく美はし。吾等人に對する時、何とはなく、たとへば重き石もて頭上を壓されたらむ如く、面を擧げ難ぬるまでにけおさるゝ事あり。奇矯物に滯らざるハイネの如きすら、始めてゲーテに會へる時、その威容に打たれて言ふべき事も言ひ得ずして、空しくワイマルの麥酒を稱ふるまでの無念を忍びたりき。

今の我邦にて斯かる人に邂逅めつりあふこと頗る稀なるべし。路行く人に是れはと心附かるゝ顔容の人は甚だ少く、多くは物欲しけなる賤しき面構へなり。予の見る所にては、婦人は知らず、男子の美は今の日本に於ていたく荒れずさびたり。

#### 四 文藝は嚴肅也

「人生は嚴肅也、文藝は遊戯也」とは古の詩人の套語にして人のよく唱ふる所なるが、予は然か思はず。文藝は決して遊び事に非ず、その意義の嚴肅なることに於て決して人生に劣

るまじき也。

予は常に好でバイロン、ハイネ、ケョルネル等の詩を読む。予は是等詩人の文字を通じて人生の最も嚴肅なる事相を感受するを樂しむ。畢竟是の如きは文字にあらずして精靈のひきき也、血汐と涙の痕也。吾等の胸に打てば應ふべきあらゆる人生の憂悶と悲愁と希望と歡喜と、活ける呼吸を通じて吾等の耳にひびく也。吾等は箇中に作者の生涯を想ひ、彼等が自讀せる人生の事相によりてその詩篇を解く。詩篇こゝに至りて人也、命也、人生也。

予はかくの如くにして詩初めて解し得べしとなす。けに等しきもののみ等しきものを解し得べし。文藝を遊戯と觀せむは、かつて涙を以て其の麵麩を割きしことなき徒のみ。

#### 五 當今の文章

當今、文を能くする人甚だ多し、されど吾等を以て見れば、多くは優人の其面に粉して喜怒哀樂を装へる類ひのみ。意誠語朴の人を動かすものとは甚だ少し。かの青年讀者流、その才に任せ其の氣を驅りて巧に優麗閒雅の文藻を綴れども、その情に於て既に眞摯の一義を

缺く。細心精緻又何かせむ。西歐文藝の風手を傳ふると云ふもの、唯、西施の��に倣へる類ひのみ。吾等を以て見れば戯文たるを免れず。

戀と云ひ、望みと云ひ、慰めと云ふ、是れ人生の一大事也。人はその文字を弄ぶに先ちて、自らの血と涙とを以て、それを解釋せざるべからず。

### 六 眞正の寫實

予の知れる小説家中、寫實に最も長けたるはゾーデルマンにして、最も拙きはゾラなるが如し。ゾラは通例寫實の大家と稱せらるれども、たゞ、精しきのみ、順序なく統一なく精しきのみ。そが主觀上の印象より見れば寫實の本義を去ること頗る遠しと謂ふべし。ゾーデルマンは然らず。その事を記し景を叙するに當りて畫面の物象を僅少なる觀念に約して、餘は是を讀者の想像に委ぬるところ、鑿々として肯綮に中らざるは無し。一句、二句、五字、七字、身は忽ちにして作中の人となり了るを覚えしむるは、他の作者に於て殆ど見るべからざるの技術なるが如し。

今の我が小説界に自ら寫實家と稱するものあれども、概ねゾラ一流の無意義なる精緻を以て自ら得たりとするもの、ゾーデルマンの亞流は予未だ是を見ず。往々人の語るを聞く、寫實は凡才も尙ほ能くす、唯、力めて達し得べきのみと。是れ大なる誤解也。眞正の寫實は天才にして始めて能くせむのみ。

### 七 例と談理

例を擧げて論ぜざれば解し難ぬる人あり。かゝる人には常識の外は談すべからず、抽象の理は説き難し。高遠なる宗教の信仰、幽微なる文藝の趣味、得て共に談すべからざる也。

事例を以て解し得べくむば、吾等多くの場合に於て言論の要を見じ。事を離れ境を絶し、厘に理義によりて會通を求むるもの、如何にして更に事例によりて解説し得べき。シヤペンハウエル曾て曰く、抽象の談理に勝へざるものは我が書を読むことなかれと。予は今の凡俗學者に向つても亦同じく是の語を寄せむと欲する者也。

例に依らざれば解し得ざる人は、取りも直さず想像の貧しきと、思辨の足らざると、觀心

の到らざるとを證す。あゝ心はたゞ心を以て解し得べけむのみ。

### 八 俗學者の猾手段

世に分類を好む論者あり。例へば或人の價值を判定せむとする場合に、先づ是の人の屬し得べき種類を別ちて甲乙丙丁等と爲し、扱て是の人は甲にもあらず、乙にもあらず、丙にも丁にもあらず、故に何物にても無しと云ふが如き論法にて斷じ去る也。かゝる論法は一寸俗眼にて見れば如何にも精緻公平穩當らしけれども、實は甚だ危険にして且つ凡俗なる論法也。故如何とならば、凡て分類は人々の勝手次第に定むるものにて、其の人の考の精粗、又識見の高卑等にて如何様にも差別のあるもの也。今甲乙丙丁等と分ちたりとて、甲乙丙丁等以外に尙ほ遺漏なきを保し得べきや。良し又遺漏無しとするも、所判の當體は活ける人也、甲乙丙丁等の何れにも屬せずして而も何れをも含むと云ふが如き場合なきを得るや否や。甲乙丙丁と分つは人々の任意也。然れども茲に以呂波仁等と新たに分類し得べくむば如何。又は甲乙丙丁等各部の所屬量若干づゝを結合し、取捨して幾多無量の分類をも爲し得べき也。

單に甲乙丙丁等の在り來りの文字によりて活ける人を判定せむとするは、是れ小我のみに執着して、我以上の新事物世に無しとする大偏見也。されば是の種の論法は表面は精緻らしくして實は大粗漏也、穩當らしくして實は大不穩當也。所謂客觀的の判定らしくして實は大主觀的偏見也。今の學者、是の種の猾手段を弄して俗目に媚びるものあり、注意すべし。

### 九 表

又學者の中には何事につけても表を作ること好む人あり。こも亦た利害相半ばすることをお忘るべからず。表にて示せば打見たるところ如何にも明晰にして、所謂是を掌中に指すの觀あれども、表の作り方の誤りなきや否やを看破し得る人に非ざれば、動もすればその明晰なるに欺かれて知らず、論者の所説に化せらるゝ者多し。畢竟表は前項に述べたる例と同じく極めて方便的、はた器械的のものにして、人の思想の活ける作用を障碍する傾あり。議論上萬已み難き場合を除いては使用せざるを好しとす。世の學者中には、一にも表、二にも表と、表ならでは議論説明の出來ぬ人あり。是等は其の頭腦の器械的なるを證するもの

と謂ふべし。

### 一〇 畫家と小説家

畫家にて詩人を兼ねたる人少からず。例を西洋に取れば、遠くしてはレオナルド・ミケランジェロの如く、近くしてはダンテ・ガブリエル・ロセッチの如し。されど畫家にして小説家を兼ね、聲聞並び到れるもの、近年にありてデュ・モーリエ (Du Maurier) の如きは多からじ。彼れは五六年前六十餘歳にて死せしが、其の死する五六年前までは一個の畫家、殊に滑稽畫家としてのみに知られたりき。然るに『ビーター・イベツトソン』てふ小説を一雜誌に公にして圖らず非常の喝采を博してより、續いて『トリルビー』、『マルシャン』の二篇を公にし、一時英米文壇の耳目を聳動せり。予は是の二篇を読みしが、其の文章脚色等の勝れたるは暫く措き、其の自筆の挿畫、一篇毎に二百數十葉はあるべきが、何れも見事に描かれ、一冊の畫帖としても類ひ多かるまじき成功を示したり。古人は、書畫一體なれば書を能くするもの多く亦書を能すと言ひしが、繪畫に長けたるもの亦た小説をも能くするの謂はれあればにや。兎にかく珍らしき例なりと云ふべし。

### 一一 繪畫と寫實

繪卷物と云へば宮中の宴遊、社寺の沿革、或は合戦など、凡て上品なるが如き様なれど、昔の畫家は随分思ひ切つたる題目を描きしもの少からず。光信、元信等が描きし春畫は言ふまでもなく、病草紙、狂ひ草紙、百鬼夜行などは土佐家常套の畫題也。たしか光長のなりしと覺ゆ、病草紙の第一紙に婦人の下痢に悩める態をさながらに描き出せるにて餘は推して知るべし。例の烏羽僧正に到りては、例へば放屁軍、男色繪、陽物くらへ繪など奇想奇構、毫も憚るところ無し。傳ふる所によれば時の帝病に臥せし時、陽物くらべ繪及び其他の滑稽畫を奉りて帝の鬱を散せし功によりて名を勝畫と賜はりしとか。されば當時はかゝる題目をば畫く人も觀る人も強ちに怪み咎めざりしと覺ゆ。今日より見れば大膽なる寫實ならずや。

(明治三十五年四月)



增補 樗牛全集 第二卷 終

大正 癸 年 十 一 月 十 五 日 印 刷  
大 正 癸 年 十 一 月 十 八 日 發 行

(製 複 許 不)



定 價 金 壹 圓 參 拾 錢

編 者	姊 崎 正 治
編 者	畔 柳 都 太 郎
編 者	笹 川 種 郎
發 行 者	東 京 市 日 本 橋 區 本 町 三 丁 目 八 番 地 大 橋 新 太 郎
印 刷 者	東 京 市 小 石 川 區 久 堅 町 百 〇 八 番 地 高 橋 季 吉
印 刷 所	東 京 市 小 石 川 區 久 堅 町 百 〇 八 番 地 博 文 館 印 刷 所
發 行 所	東 京 市 日 本 橋 區 本 町 三 丁 目 博 文 館

(換 替 貯 金 口 座 東 京 二 四 〇 番)

高山博士遺著

# 樗牛全集

全五册每編菊判上製  
金 綠 美 裝  
每編一圓五拾錢  
小包料各十二錢

## 第一卷 美術及美術史

### 第一部 美學上の研究

○美學上の思想説に就て○美感に就ての觀察○  
月夜の美感に就て○宗教と美術○詩歌の所縁と  
其對象○日本畫の過去及び將來に就て○歴史畫  
の本領及び題目○再び歴史畫の本領を論ず○坪  
内先生に與て三度び歴史畫の本領を論ずる書○  
『審美綱領』を評す○壯美及び優美○外界の美○  
自然美

### 第二部 日本美術史未定稿

第一章總論(日本美術の特質を論ず) 第二章奈  
瓦朝以前の美術 第三章天平時代 第四章平安

## 第二卷 文藝及史傳(上)

### ▲文藝評論

文藝と人生・近松巢林子 第一期(明治二十八年九月より)  
運命と悲劇・歴史的精神外十二目 第一期(雜誌)  
文學會漫評・青年文人の厭世觀、其他三十四目 第  
二期(明治三十年六月より) 我國現今の文學界に於ける批  
評家の本領、明治の小説其他 第二期(雜誌)齊藤綠  
雨の色道論を讀む其他五十三目 第三期(明治卅四年  
三月より) 文明批評家としての文學者、作文論、其他

45  
316

終

